
真・恋姫†無双 ～霸王の意志を継ぎし者～

落日人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～霸王の意志を継ぎし者～

【Nコード】

N55050

【作者名】

落日人間

【あらすじ】

本来なら北郷一刀が天の御使いとして後に霸王と呼ばれる少女の前に現れる筈だった……しかし彼は現れたものの五年も早く、この地へ降り立ってしまった

……そしてその早過ぎる出会いは彼と少女とその周りの人々の運命を大きく変化させながら、五年余りの月日が流れようとしていた

新たなる外史（前書き）

携帯で書いてるため、漢字変換がうまく行かない場合がありますのでそこはカタカナ入力しますので、何卒おねがいします。

新たなる外史

——とある森——

Side：一刀

ある日、俺はなかなか帰ってこない二人の姉妹を探すために近くの森へ探しに来ていた

数時間の搜索の末、静かな水の音が森全体に響いてる泉の前に姉妹の一人が座っているのを見つけた

その隣には豪華な装飾が施された鎌があり、俺が近づいても気づかなかったので俺は声をかけた

「秋蘭……春蘭はどうしている？」

不意に声をかけられた秋蘭は一瞬、驚いたようだがすぐに俺の質問に答えてくれた

「……一刀か……姉者はまだ塞ぎ込んでるよ。やはりまだ受け入れきれないらしい」

こちらを全く見ずに背を向け、ただ返事をしただけのその背中が妙に寂しく感じる

「やっぱりか……まだもう少しかかるみたいだな」

「すまん、お前には苦勞ばかりかけてしまって……こんなザマでは華琳様に到底、顔向け出来ないな」

たとえこちらを向かずとも声だけで分かっってしまう。秋蘭の発する声は震えて弱かった

「それで華琳の所に居づらくなりこの泉まで来たわけか？」

「……一度は行くことはしたが、やはり認めたく自分が心のどこかにいるようだな。気が付いたらここに来ていた」

俺の質問に答える為によく振り向いたその顔は涙の後がハッキリと確認出来た。それを見た俺は反射的に秋蘭の肩を掴み、秋蘭の目を真っ直ぐに見れるようにした

「秋蘭。お前が無理なんかしないでいいと思うぞ？今までもそうだが、お前は自分を閉じ込め過ぎだ。もっと素直に感情を出してみたらどうだ？」

こいつ相手にはいつも強く言わなかったけど、今回ばかりはそうはいかなかった

「っ……一刀……私は……」

秋蘭は俺から目を逸らし、小声で呟くだけでどうしたらいいかわからないようだったが俺はもう見ていられなくなり、今も呟く秋蘭を抱き締めた

「大丈夫だよ秋蘭。まだお前には俺や春蘭がそばに居るしさ。そりゃ俺は華琳よりは頼もしくもないかも知れないけど……それでも秋蘭は一人じゃない」

「……………」

最初は不意に抱き締めたために僅かながらももがいていたけど、俺の言葉を聞いた秋蘭はだんだんと動きを止め

「……………一刀……………う……………く……………」

今まで我慢していたものが一気に崩壊し、子供のように泣き始めた

（秋蘭もそうとう華琳のことを……………当然だよな。全部俺のせいだ……………だから二人に、そして華琳に償うためにも俺が出来ることは）

自分の未熟さと無力さを嫌ほど実感したあの日を思い出しながら秋蘭が泣き止むまでずっと俺はただ抱きしめていた

—————

Side：秋蘭

ずっと無理をしていたのは自分でも自覚はあった……………だが他人に甘える気などなかった

私は他人が思う以上に弱く脆い。一度甘えてしまったらまた甘えてしまう。だから一刀には絶対に弱音は見せたくなかった

「大丈夫だ秋蘭。まだお前には俺や春蘭がそばに居る。そりゃ俺は華琳よりは頼もしくもないかも知れないけどさ……それでも秋蘭は一人じゃない」

だが、あいつの言葉は私の心に簡単に入り込み、私の心の障壁を取り除いてしまった

（本当にお前は私の隠してた思いを簡単に見破るな。普段とは大違いだ。だがお前にそんなことを言われたら私は……甘えてしまうじゃないか）

「……一刀……うう……く……」

しばらくの間、私は一刀の温もりを感じながら泣き続けた

「……頼りない俺なんかが華琳の代わりになるか分かんねえけどな」
そう不安そうに言う、一刀には先ほどの凜々しさがなくなっていたが逆にそれが私は安心できる

（そんな事はないさ一刀。お前は十分頼りがいがあるぞ。ほんの数年前まではそこらの一般兵程度の武しか持たなかった奴が今では姉者に匹敵するぐらい逞しくなったものだからな）

「ふふっ……わかった、約束しよう」

「ああ、たくさん頼ればいいさ」

（……まだ華琳様には及ばないが……それでもお前は私にとっては本当に愛しい奴だよ）

S i d e : 一 刀

そのまま泣き続けた秋蘭しばらくして落ち着きを取り戻し、城に戻ることにした

（最初来たときはまだ昼だったのにすっかり夕暮れになっちまったな。まあ不謹慎だけど珍しく素直な秋蘭を見れたからいいかな？）

「一刀顔がニヤついているぞ、どうかしたのか？」

「い、いや、何でもないよ。それより早く帰らないと、春蘭がうるさいぞきつと」

「うむ、そうだな姉者が怒ると大変だからな」

俺も秋蘭も本人がいないところで、好き勝手言っただけで笑い飛ばしていた

（もう秋蘭は大丈夫みたいだな……後は春蘭がどこまで受け入れられるかか……）

「秋蘭……城に戻ったら少しの間、春蘭を借りてもいいよな？」

「ああ、いいぞ。手間は私以上にかかると思うが、一刀なら何とかしてくれるんだろう？」

察しのいい秋蘭はさつき一言で俺の言いたい事を理解したらしい

「当然、やるだけのことはやるさ。出ないと華琳の意志を継げないもんな」

「華琳様の意志か……」「かあじゅうとうとおおお」「……いや、いい」

秋蘭の声を遮り、いのし……ゲフン、ゲフン……猛将春蘭が剣を振りかざして俺に襲いかかってきた

(……てか、あいつ絶対に酔ってるだろ!!)

「かじゅとか?……おまえ、しゅうらんをつれてまわしてにやにをしてたあ?」

俺の目の前で酒臭い息を吹きかけながら、呂律が回らずなんて言うてるのかよく分からなかった

(うわっ近くからだと酒の匂いが……)

「姉者、一刀は私達を思って……」

「にやにをいつてるか、しゅうらん、じちゅのあねよりこのおとこをえらぶのかああ?」

秋蘭が俺にフォローを入れてくれたが酔うと普段の倍以上は人の話を聞かなくなる厄介なモードに入っている我が軍の筆頭將軍

「……一刀、すまない……私にはこれ以上は無理だ」

……姉の春蘭には基本的に甘い秋蘭が自分の限界を悟ったのか特に理由も付けずに俺にバトンタッチをしてきた

(はあ〜まあついさっきなんとかするって言ったしな……しょうがないか)

「春蘭！」

「なあんだ〜かじゅと〜？かくごはついたのかあ」

相変わらず呂律は回らず体もふらつきながら剣を町中で振り回しているために町人は俺達から離れ、正直危なっかしい

「春蘭、華琳がいなくて寂しいのは分かるが、そう周りに八つ当たりしても意味ないだろう？」

「う、うるひゃい……こんなひはさけでもものまんどきがはれんのだ！
「！」

(聞く耳もたずだな……はあ〜このまま放置するのも町民に悪いし、もう力づくで)

「悪いな、春蘭」

「ぐふ……うう……」

俺は自信が出せる最高の速度で春蘭の腹に当て身をし、気絶させた……と思ったのは一瞬で

「う……ゲエエ〜」

「ぐあああああ!!」

「姉者……!?」

町に盛大にばらまかれた春蘭のソレは真正面から放たれたもので当然、当て身した俺も例外ではなかったそしてそんな俺を突き飛ばし、どこから持ってきたのか水と布巾で春蘭を介抱し始めた

「秋蘭……俺は？」

「……うむ、姉者はやはり手がかかる……あ……す、すまない一刀」

完全に俺なんか見えていなかった秋蘭は俺の声に気づくと分かりやすいくらいにあせり、謝った
そしてそんな俺に哀れんでくれたのか町人の一人が水と布巾を持ってきてくれて拭き終えた後、気絶した春蘭を担いで秋蘭と共に城に戻って言った

(でも俺の存在って一体……)

S i d e : 秋蘭

「起きたか、姉者？」

「……秋蘭？ここはどこだ、私は確か街の店で酒を飲んでいたはずだが？」

まだ少し酒が残っているのだろうか、右手で頭を抑えていた

「ここは私達の部屋だ。姉者はそのまま酔って暴れ回っていたのを一刀が無理やり止めて此処まで運んだのさ」

「何、一刀の癖に生意気な！おい秋蘭あいつはどこに居る！？今度こそ叩きつけてやる！！」

相変わらず、一刀にのみ素直になりきれない姉者を見て、自然とため息が出てきた

(はあくまったく相変わらず素直じゃないな。まあそこが姉者の可愛い所だな)

「落ち着け姉者、今はもう真夜中だし周りのものに迷惑だ。それに一刀が止めたのは姉者が襲いかかってきたからだぞ？」

「ううゝ本当は分かっているのだ。だが私は……華琳様の事が……」

「なら姉者はどうして、一刀への八つ当たりは何時も通りとして、部屋に閉じこもったりしてるんだ？」

動かず何もしないのが姉者は一番嫌う性格だが、今回は状況が違った

「そんな事、華琳様の事に決まっているだろう！秋蘭は華琳様の事などどうでもいいというのか！？」

「姉者、そういう意味ではなくてだな。私は姉者がそのまま前を向かず、ずっと止まったままなのが心配なんだ。一刀もきつとそう思っているだろう」

「秋蘭……それは華琳様を忘れて一刀に鞍替えするということが？あいつなんぞ華琳様の足元に及ばん、結局あいつなど所詮は余所者だ！！」

(一刀は余所者……どうして姉者はそんなことが言えるのか？)

私はつい姉者を叩きそうになったが、必死でこらえた

「姉者、さっきの言葉は本気で言ってるのか？」

「当然だ、私はいつだって本気だぞ秋蘭！！」

パン！！

もう我慢の限界だった

「そうか……そんなにふざけた事を抜かすなら……容赦はせんぞ姉者？」

Side: 一刀

「な、なんだこれは!？」

深夜、慌てた様子の子の城の召使いに呼ばれ来てみたら、俺の目の前で見たことのない光景が広がっていた。それは……

「ぐ……が……いい加減にしろ!秋蘭!」

「意味が分からないといった……う……顔だな……自分の言葉を思い返して見る!！」

普段は仲がいい筈の春蘭と秋蘭が武人ならではのとつともなく危険で激しい喧嘩を繰り広げていた

(なんで喧嘩なんかしてんだ?……まだ春蘭が酔ってるのか?嫌でも秋蘭がそんな誘いに乗るはずが……もしかして華琳絡みか?)

「落ち着け二人とも、何でそんなに怒ってるんだ!？」

「何故だと?姉者は一刀や華琳様の気持ちを踏みにじっておいてまだとぼける気か!」

お互いに殴りあいながら話している為、良く聞こえないが、さつさと止めないと周りに被害が拡大する。俺は意を決して姉妹喧嘩を止めに行った

「なあ……2人ともそろそろ止め shouldn't かい？」

「ああ！何だ一刀か！！今は貴様など、どうでもいい邪魔だから消えろ！！」

「一刀、すまないがこの馬鹿でふざけた姉者に言い聞かせないといけないから邪魔しないでくれないか！？」

「いや、でも一応、深夜だし……城の人達にも迷惑だから、な？」

俺の制止も無視し、さらに激化する喧嘩

「悪いが今回ばかりは退くわけにはいかない。姉者が言っただけならんことを言っただけであつ！！」

「くっ……さつきからごちゃごちゃと訳の分からんことを言いおつて……いいだろう、2人してかかってこい！！」

(このままじゃ拉致があかない。本来の抑え役の秋蘭が春蘭化して
るからな……見た感じ、秋蘭が春蘭対して怒ってるようだけど……
喧嘩両成敗だ)

「春蘭、秋蘭」

「「なんだ!？」」

「いい加減しろ!!」

「な!？」

「か、一刀!？」

暴れ続ける二人の首元をつかみ、そのまま壁にたたきつけ、にらみを効かせて言い聞かせた

(正直、こんな脅しみみたいな真似はしたくなかったけど)

「はあくやつと落ち着いたか、何やったんだ春蘭、秋蘭があそこまで怒るなんて？」

突然のことで放心状態だった二人を放し、事情を聞くことにした

「あ……え、その……よく分からのだ？」

「わからんだと「秋蘭?」うつ……姉者が……一刀のことを」

またも手を出そうした秋蘭を止め、そのまま春蘭に質問した

「え、華琳のことじゃなく俺のことだったのか?……どういうことだ、春蘭?」

「……………」

「春蘭、大丈夫か?どこか具合でも悪いのか。顔が赤いぞ?」

「さ、触るなあ!この余所者!！」

さっきのことで警戒してるのか春蘭は俺の手を酷く弾いた

「姉者!！」

「……よ、余所者？」

Side：秋欄

「姉者！！」

気がついたら私は姉者を押し倒していた。今までは愛しいと思わなかった姉がこんなにも憎いと思ってしまったのは初めてだった……

「……わ、私は……」

そこまでしてようやく気づいた。姉者の眼に明らかな迷いがあることに

(ー！！……そうか……まだ姉者は気持ちが悪く整理できてないのか。だから、あんな事を……これでは私が……)

「秋蘭、春蘭からどいてくれないか？少し話したいんだ」

「一刀……その、姉者を余り責めないでくれないか？私も熱くなりすぎたようだな」

そこまでいうと姉者からどいた私に一刀は笑って私の頭に手を置いた

「大丈夫だよ。俺は全然気にしてないよ。それに実際、春蘭の言ったことは本当だろ？」

「ち、違うのだ一刀、そうじゃなくてだな……」

余所者扱いされた本人は何事もなかったかのような顔して、笑い飛ばしていた

「それにさ、右も左も分からない俺を支えてくれた春蘭の優しさは知ってるからそれが本心じゃないって分かってるよ」

「ううゝ／＼／」

一刀からの感謝の言葉に姉者は顔を真っ赤にして照れてしまった

(すごいな一刀は……私が気がつけなかったことにあっさりと気づいてしまったからな。それにあの覇気……やはり一刀は華琳様と同じ部類の)

「で、喧嘩した原因はなんだったんだ？」

(……前言撤回、華琳様はこんなに鈍くない)

「一刀、つまりだな。姉者がさっき言ったとおり五年も共に過ごしたお前のことを余所者扱いして……そのつい……」

「そうだったのか……うう……すまなかった……一刀、秋蘭。私は華琳様

のことで自分のよく分からんのだ…どうしたらいいのかが…」

「そうだったのか、なあ春蘭……」

「な、なんだ…一刀……な！？だ、抱きつくな／＼／」

姉者の前に立った一刀は有無言わず抱きしめ、口では嫌がっている姉者も特に抵抗らしい抵抗はしてなかった

（むう、一刀が姉者を抱きしめているな……少し羨ましいな……私も／＼）

「大丈夫だよ春蘭、さつき秋蘭にも言ったけど、俺じゃ華琳の代わりにならないかも知れないけど……少しでも二人を支えられるように強くなるからさ」

「か、かじゅとおく……うう……すまん……うう……」

一刀に抱き締められたまま、姉者は私と同じように鳴き始め……そして泣き止むまでの優しい時間を私達は暫くの間過ごした

―――一カ月後―――

Side：一刀

……あれから一月たった今、俺はこの地がよく見渡せる丘に座って風を感じながら眺めていた

「ようやく春蘭も現実を受け入れてくれたよ……これでやっとお前の願いも目指せそうだ」

近くの大樹に腰をかけ、独り言のように呟いていたとき、今ですっかり仲直りした二人の姉妹が俺の前に立っていた

「一刀、近辺の村に賊が出たそうだ。しかも今までとは規模が違い、千人は居るようだ」

「ふん、そんな数など問題ない！今までのようにこの夏侯惇が打ち払ってくれるわ!!」

「姉者、それでは他の兵たちがついていけずに犠牲になってしまう。今回こそはこちらの作戦通りに動いてもらうぞ?」

いつもの通りに春蘭の無謀とも取れる発言に困った顔をしながら止める秋蘭

「ははっ、まあその方が春蘭らしいけどな」

「だからといって……はあくまでいい、それよりそろそろ行かんと手遅れになるぞ」

「ああ、分かっているよ。華琳が目指した霸道……この想いを必ず果たさなくっちゃな」

「ふん、そんな事、貴様に言われんでも我が魂に刻み込まれてるわ。先に戻ってるぞ」

「一刀、姉者の言うとおりで。既に華琳様の意志は我等の魂に深く刻まれている……軍の再編してくる、お前もすぐに来いよ」

「ああ、もうちょっとしたら戻るさ」

再度、強い意志と誓いを元に春蘭と秋蘭は来た道に戻っていき、俺は立ち上がり大樹の根元にある無骨な石に目を向けた

「お前の意志は俺が継ぐよ。お前が果たしたかった事を成し遂げてみせると誓い、お前の言った事を信じて進もうと思う。それがあいつの為にも……」

目の前で眠る人物とは別の友も思いながら俺はゆっくりと背を向け

「また来るよ……華琳」

俺は春蘭達には悪いと思いつつもゆっくりと歩き出し、この丘に吹く風を感じていた

Side：秋欄

（ようやく戻ってきたか……あの様子だと恐らく華琳様と話していたな）

「一刀、遅いぞ。何やってたんだ？」

兵の再編も終わり、待ちくたびれた姉者が一刀に溜め息混じりで聞いている

「ごめんな春蘭、ちょっと気合いを入れ直すのに時間がかかっただけだよ」

「一刀、兵の皆に言うことがあるんじゃないか？」

「ああ……」

その背中を見て私はふと笑みがこぼれた……まるで最初に華琳様と姉者で旗揚げした頃と……姉者を見てみるとその視線は一刀に釘付けだった。きつと無意識なんだろうなあその目は華琳様に向けていたのと同じだと言うこと……

「……その俺達が目指すは乱世のない大陸の統一……そのためにも皆の力を貸してくれ……」

「……ウオオオー……」

そう耽っている内に一刀の演説は終わったようだ。あの有無を言わせない覇気……それは私や姉者には無いものだ……ようやく再開する華琳様が目指した霸道……その意志を一刀が受け継ぐ新たな霸道が……

波乱の予感（前書き）

遅い気もしますが、北郷一刀のキャラ設定です。

北郷一刀

武器：黒羽漆黒くろはねの翼の形をした大剣

見た目は原作と大差はないが、原作のような制服は来ておらず、本作の一刀は原作よりも5年前に来たために服装は全体的に黒装束を纏っている。

また、巷では賊2000人相手にたった1人で討伐したことから「血濡れの黒鷹」など大層な通り名がついたが、実際は戦、政などを夏候姉妹と共に切り盛りしてやっつてるため、陳留以外の人々から美しい黒髪を持つ、聡明で武にも優れている霸王もしくは完璧超人と3人の長所を集めた1人の女性としての誤解が世間に広がっている。因みに武は3年間、華琳や春欄に死ごかれたため現在は春欄と対等な武力を持つ。

波乱の予感

――城内、とある一室――

Side：一刀

ある日の昼下がり、俺と秋蘭は政務に追われる中、政治面では特にやることもない暇人の春蘭が突然、こんな事を言い始めた

「なあ、一刀、最近賊が多すぎやしないか？」

ピタッ……

この何気ない一言がただひたすら政務をしていた俺と秋蘭の筆を止めた

(……いま、この娘はなんて言った？……まさか、今の今まで気付いてなかったのか！?)

「姉者、軍議には出席していただろ？報告を聞いてなかったのか？」

「というよりも、しょっちゅう賊討伐に先導して行ってたのに……はあ、もういいよ、流星は春蘭だな」

適当に誉めておけば、しばらくは大丈夫だろうと思いきや褒めてみたら

……

「そ、そうかノ、まあ私に任せておけば、賊の千や二千など一捻りだ。えへへ……」

……呆れるほど単純だった。そんな春蘭はほつといて再び資料に目を通そうとすると、一つの資料がないことに気付いた

「なあ秋欄、今回は遠征なんだろう？その時に使う兵糧の資料はどこにあるんだ？」

「そんなものは担当者に任せておけば良いのではないか？」

政務をやりながら特に何とも思わず聞き流している秋蘭に俺は……

「確かにそうかもしれないけどさ、俺がさらに管理してより効率的になるかもしれないだろ？それにそんな妥協は華琳は絶対にしない筈だろ？」

「！……ふふっ華琳様の誇りのためか……分かった、なら直ぐに持つてこよう」

「ああ、ありがとな秋蘭」

俺の返答に秋蘭は満足したのか、いい笑顔を俺に返してそのまま部屋を出て行った

(なんか秋欄は嬉しそうに出て行ったな……)

「えへへ〜一刀に褒められたあ〜」

(……なんで姉妹なのにここまで違うのかな?)

そんなどうでもいいことを思いながら、俺は政務を再開することに

した

S i d e : 秋 欄

一刀に資料の伝達を頼まれた私はその道中、成長した一刀の昔の事など思い出していた

（最近の一刀はだんだん様になってきたな、時折見せる覇気や状勢を見極める能力など王らしく……五年前に初めて出逢ったときの非力さなど微塵も感じないな。あの頃の一刀は覇気もましてやそこの賊にすら殺されてしまうような輩だったが……それから三年足らずで私や姉者と対等に打ち合えるようになった頃、私は一刀がこんなにも成るとは思わなかったが華琳様のあの様子は最初から確信していたのかも知れないな……）

「おい、そこのお前」

兵糧庫の近くに着いたが準備中のためか人が多く、誰か判別がつかないので近くの一般兵に聞いてみた

「か、夏侯淵將軍！？こんなところまでな、何用ですか？」

「別にそんなに畏まらなくても良い、それより一刀が次の遠征の兵糧の資料を確認したいと言ったもんでな。その担当者は誰だ？」

「あ、はい、えつとあの小屋の前にいる方です。」

先ほどの兵士の指した方向を見ると、兵糧庫の前で何故か怒鳴りながら他の兵士に指示を出している小柄な女がいた

「もつときびきび動きなさいよ！……まったくこれだから男は使えないんだから。でもこの陳留の街を治める北郷様はきっと聡明で素敵な御仁でしょうね／＼……フフフ、何としても今回の遠征は成功させて北郷様に認めさせてもらうんだから」

(……さつきから怒鳴り散らしてるかと思えば、今度は顔がニヤけてる……あいつで大丈夫なのか?)

何かの間違いだといけないのでもう数人に聞き、紛れもなくあいつだということが分かり、声をかけてみた

「……お前が兵糧関係の担当者か？」

S i d e : : ? ? ?

「……お前が兵糧関係の担当者か？」

(ああ、北郷様あゝそんなに／＼……誰よ、大事な策を練ってる

最中に……て……夏侯淵將軍!!?ど、どしうて私なんかを…
…はっ、まさか北郷様が私のことを見抜いたのかしら、ええ…きつ
とそうよ、そうに……)」

予想の範疇を遙かに越えた人物が話しかけて来たために私はつい、
早とちりし無視してしまった

「おい、聞いているのか?兵糧の資料は何処にある?」

自分より格下の者がいく度々なく無視をしているので多少、イラつ
いた声に変わり、私は少しあせってしまった

「え、あ……す、すみません、兵糧の資料ですね……此方になりま
す」

(いけない、いけないもうそ……じゃなくて策を練りすぎて過ぎて
無視しかけてたわ……)

……ふむ。お前、本当にこれを一刀に見せてもいいのか?」

夏侯淵將軍は軽く資料に目を通し確認して、私に有無を言わせない
顔で尋ねてきた

「はい、この軍ならそれで十分です」

「ふっそうか、なら期待して待つがいい……直に呼ばれるだろう」

夏侯淵將軍は少し私に微笑むと資料を片手に戻っていった

(あれは多分、私の意図に気付いたわね。まあいいわ、策は順調に

進んでるわけだし……後はこのまま北郷様に会い、そして私の有能振りを見せれば……私を馬鹿にした挙げ句、自分の非を認めようとしないうの南皮でふんぞり返ってる金髪女の鼻をへし折ってやるんですから。フツフツ……見てなさいよ……絶対に私を敵に回したのを後悔させてやるわよ！！！！（

姉妹の葛藤

――一刀の私室――

Side：一刀

(ふう、最近は賊が多すぎだ……おかげで政務が滞ってるな。出陣や遠征が多いせいで、只でさえ秋蘭には武官、文官を両方仕事をやらせてるからな……こう、なんかピリピリとした空気が痛い)

「一刀、言われた資料を持ってきたぞ」

「ああ、ありがとな。その机に置いてくれないか。まだこの件が終わってないからさ」

一向に減らない政務を処理している最中、俺の要望通りに秋蘭が兵糧の資料を持ってきてくれた

「うむ、では私も仕事を再開するとするか」

「あ、秋蘭。お前、最近休んでないだろ？今日の分は俺がやっつくから、たまにはゆっくりと羽を伸ばしたらどうだ」

そう言ってまた政務を再開しようとする秋蘭を俺が静止した

「いや、主であるお前にそんな苦勞をかけるわけにはいかないよ。私のことなど気にしなくていい……」

「秋蘭……これは命令だ」

(あんまり押さえつけると流石に断りづらいのか納得いかない顔をして、
「う……分かった……今日はゆっくり休ませてもらう」

俺が圧力を掛けると流石に断りづらいのか納得いかない顔をして、
力なくドアを開けそのまま部屋を後にした

(不服そうに出ていったなあ。まったく……)

「これでいいんだろ？春蘭……」

(俺になんか頼まず、素直に自分の口から言えばいいものを)

「すまん、一刀。最初は私も休めと言ったんだが、なんかすぐにはぐらかされてしまった……」

俺が呼びかけると春蘭は素直に窓から出てきて、珍しく申し訳なそうに言った

そんな春蘭を見た俺は少し、意地悪したくなり

「だけど俺は出来れば、命令なんて言葉を使いたくないんだけどなあ？」

「うう……最近の一刀はなんか意地悪だ……」

軽く涙目になってすねるように声を絞り出した春蘭は正直、可愛かった

「ハアハア……よう……秋蘭、奇遇だな……ハアハア……」

(姉者……奇遇というのは額に汗を流しながら、息切れを起こして明らかに当人を見つけた！という目をしてる人間が使う言葉ではないんだよ……まあ、姉者らしくて可愛くはあるが／＼)

「で、何の用だ。姉者？」

「い、いやあなに、これから町に出ようと思つてな。秋蘭も一緒にどうだ？」

さすがに我が軍、最強將軍なだけあり、さっきまで疲れて乱れた息はもう治まっていた。そして続く姉者の説明で私は気付いた

(！……ああ、なる程な、先ほどの一刀の命令は姉者の差し金だったか……まったく、こんな事のために一刀を使うのは許せないな……なら少し虐めてみるか)

「せっかくだが、つい先程一刀の命令でゆっくり休めて言われたのでな。今日は大人しく休もうと思うんだ。すまないな姉者。」

「……え？……そ、それは大事だな……でもだな秋蘭、町を見て回るのも、悪くないと思うぞ。」

案の定、姉者は困った顔をして何とか私と町へ行こう誘ってくる……が私はニヤけそうになる顔を堪えて簡単に許さなかった。

「だがな姉者、私は姉者と違って文官もしてるんだ。しかも最近、寝不足だからな。今日はあまり動きたくないのだが……」

「ああ……うう……し、しかし」

普段の勇ましい姿はどこにいったのか目尻に涙を滲ませ、今にも鳴きそうな顔をしている。

（ああ、姉者の泣き顔は可愛いなあ／＼）

「ふ、まあそこまで姉者が言うのであれば行こうではないか」

それを聞いた姉者は一変して笑顔になり、私の手を掴むと脱兎の如く城を飛び出した

――陳留、市街――

「……秋蘭、迷った」

ふと気付いた姉者がとんでもない事を言い始めた

「はあく目的地があつて走つてたんじゃないのか？」

私はてつきり目的地が在るのかと思い、無理やり手を引つ張る姉者に着いていったが、まさか迷うとは考えていなかった

「それは最近できた新しい飲茶の店に行こうと……」すまぬが、最

近こころで新しくできた飲茶の店を知らぬか？」って無視するなあ！？」

一度迷った者の話を聞くほど私は優しくないので、近くにいた女性に尋ねてみた

「はい、えつとあちらの角を曲がって真っ直ぐ行ったところに在りますよ」

「そうか、感謝する。場所が分かったぞ姉者……？」

「どうせ……私……なんて……」

そこには人目を気にせず何かぶつぶつ呟きながら拗ねている情けない姿の姉者の背中だけが見えていた

「ほらっ姉者、場所も分かったことだし行くぞ」

「……………（コクリ）」

（まったくこれでは気苦労が増える気がするな……………）

そんな姉者の手を引き、当初の目的地だった場所に向かいながら呆れていたが、先ほどの姉者の子犬みたいな目と仕草はしっかりと焼き付けている

――一刻後――

お茶をすませた後、私達は城に戻り、自分達の部屋に帰る途中に姉者が何かを思い出したかのように……

「そういえば、最初から行く気があるなら何故、最初に断ろうとしたのだ？」

「それはな姉者、今日私と出掛けるために、私を休ませるように一刀に頼んだらう？」

「な、ななな何故わかったのだ!？」

「やはりか……姉者、一刀に何でもかんでも頼むのは良くないぞ?」
一刀の最近の状況ならいつも近くにいる姉者はよく分かっているはずなのにここ数週間は一刀に頼りっきりのような気がしていた

「そんなことを言われてもだな……つい……その……最近の一刀は頼りがいがあると云うかノノノ……」

(なる程、これは重症というわけか。まったく多少素直になったと言っても甘え過ぎじゃないのか?……姉者は不器用故に一刀を華琳様の……)

「それでもな、姉者。一刀は私以上に仕事をこなしているんだ。そこは分かって言ってるか？」

「一刀は無理してるのか?そうは見えなかったのだが……」

私は姉者が一刀の余裕の無さを理解していると思ったがどうやら違
つたらしい。

「いや、一刀は今も相当無理をしてる……恐らく華琳様と自分を重
ねて焦ってるのかもしれないな」

「……………」

「……………」

何とも言えない沈んだ空気の中、私達は黙りきってしまった。

(…………一刀に甘え過ぎなのは姉者だけではなく私なのか?…………だと
したらこれ以上、一刀に…………)

「キヤアアアアアアアアアア……………」

「「!?!?」」

自分の甘さを振り返っている最中、突然、城のほうから女性の悲鳴
が木霊した

「な、なんだ、さっきの悲鳴は!?!」

「一刀の部屋の方から聞こえてこなかったか?」

「!?!」

一刀の部屋からと姉者が聞いた瞬間、見たこともない速さで走り出していった

「まて姉者!く……」

(とにかく一刀の部屋に行かんとわからんがあ悲鳴……一刀……)

どう考えてもただ事ではない悲鳴に私の心は焦りと不安で満たされていた

王佐の才、悲しき叫び

――数時間前、北郷一刀の部屋――

Side：一刀

「……秋蘭が持ってきてくれた資料を確認するか」

秋蘭が出ていく前に机に置いてくれた資料を手に取り確認してみるとその内容に驚愕した

(なんだこれは……明らかに当初の予定よりも糧食の量が少なすぎる……でも秋蘭も一応、確認はしてる筈……ということはこれをあえて俺に渡したのか？……)

「……誰がいるか？」

「はい、何でしょうか？」

近くにいた護衛の一人を呼び、資料を作成した奴を連れてくるように命じた

「この兵糧の資料を作成した担当者をここに連れてきてくれないか？」

「了解しました、しばしお待ち下さい」

(……別に走って行かなくてもいいのに……あいつ絶対春蘭の元で働いてるな)

俺はそんなどうでもいいことを考えながら春蘭によって無惨に破壊されたドアを見て溜め息をつき、終わりの見えない政務を続けることにした

――――

「北郷様、連れて来ました」

「おっ、ありがとう。ご苦労さん」

「いえ、では自分は警備に戻ります」

と言って護衛とすれ違いになるように小柄な女が入ってきた

「失礼します。北郷様、お呼びでしょう……か……？」

(………思ったのよりちっさいな、まあ見た目で判断するのはやめよう。まあ華琳も似たようなもんだっただし………)

「俺がお前を呼んだのは理解してるよな、糧食の件だと言うことは？」

「………」

「……別にそんなに気構えなくていいよ」

最初の言い方が不味かったのか目の前の娘は緊張して固まってるように見えたので、リラックスしていいように言ったが……

「……………」

(どうしたんだこの娘は？なんか反応がないまま固まってるし、覇気は抑えてるはず……だよな)

「あの、黙ったままだと分からないんだけど？」

(ハッ！もしかして、「申し訳ありません！間違いました！」とかいうパターンか？……いやそれはないな、もしそれなら秋蘭がその場で注意してるはずだしな……)

などと考えていた俺だが、ようやく口を開いた娘からは予想もしない返事がきた

「あ、あんたが……あの北郷様なの？」

(！？い、いきなりタメ口に……俺舐められてるのか？……っついてい
うかなんだこの妙に嫌な寒気は……)

「えっと、そうだ……一応、この陳留を治めてる、北郷は俺だけど
……それがどうかしたのか？」

それを聞いた瞬間、彼女の顔は一気に真っ青になり何か絶望したよ
うな酷い顔になってしまった

「う、嘘よ！だって、北郷一刀という御方は、天性の武の才を持ち、その圧倒的な力で生み出される剣技は他の追随を許さず、政治の面でもその豊富かつ斬新な知識から誰も考えつかない、まったく新しい政策をいくつも出し、全てに置いて結果を残す非の打ち所がない、まさに完璧超人と言わざるを得ない能力を持ちつつも……」

(……なんか噂が一人歩き過ぎてないか？……というより前半は春蘭と秋蘭のことだろどう考えても……)

別の意味で呆れている俺にお構いなしで喋り続ける目の前の担当者

「その姿はまるで漆黒の翼のような黒く美しい髪を持ち、剣を振るい戦場の血の雨の中で飛び回る姿を人は”血濡れの黒鷹”と呼ぶ”絶世の美女”と言われてるのよ！！アンタみたいな、下劣で嫌らしい上に変態の女だったらしてみたいな顔をしてる男が北郷様なわけないじゃない！！さあさっさと本人出しなさいよ！！」

(て……ええええええ！！？なんじゃそりゃああ！！俺が美女扱いになってるうえにこの娘からなんでボロクソ言われなきゃなんねえんだ！！……なんなんだこのやりきれない気持ちは……いかん落ちて着け俺、まずは誤解を解くのが先決だ)

「いや、だから俺が北郷一刀、でその噂は俺と春……夏候惇將軍と夏候淵將軍が合わさってると思っ……」

バシィィ！！

俺が何とか説得しようと思いついたら、もの凄い速さで俺の手を弾き飛ばした

「触らないでよ！！孕んじゃうでしょ……ハッ！ま、まさか本当は北郷様を餌にして私をおびき寄せて犯す気ね！？この変態最悪最低全身精液男！！」

（なんつう罵声だ！？普通の女が使う言葉じゃなねえ！！早く誤解を解かねばまた死亡フラグが……）

「ち、違う！？いいから俺の話聞いて……あっ……」

俺はこの時、失念していた……なぜならここ数日仕事が忙しくまともに寝ていないうえに体も動かしてない状態で混乱してる俺が急に動いても体はついて行くわけがない。結果、駆け寄ろうとした瞬間に情けなく膝から崩れてしまい、目の前の娘と一緒に……

バターン……

「……………」

「えっと……その……ごめん、いまのはふK……………」

「キ……………」

「キ？」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア……！！！！！！！！！！」

ドドドドオオオオ……………」

（ぐああ耳があ……………こんな近くで叫ぶな、頭が割れ……………！！！！……………こゝ、

この力強い走る音はまさか春蘭!?)

「かずとおおお!!無事かあ!?!何があつた!?!お前まで居なくなられたら私は……一刀?」

(ああ、春蘭、お前は本当に優しい奴だな。俺の為に涙を流してまで心配してくれるなんて……けどさ、このタイミングは悪すぎるよ……だって俺はこの娘を襲ってるようにしかお前には見えないもんな春蘭?)

目の前の娘は声も出ない状況で、春蘭はブルブルと震え、俺は恐怖で声も発せない……もし後一つ何かアクションが起こればその時に俺は終わる気がした

「一刀……お前、何をしてる?」

(最後のアクション?秋蘭まで来ちゃったか。さて、どうしようか……ひとまず逃げた方が……)

ガシッ……

「一刀、どこに行くつもりなのだ?」

「私達姉妹には説明は無しなのか?」

「分かりました。説明するの放して下さい」

それから俺は3人の誤解を解くのに春蘭から話す度にポコポコに殺られながらだったので一刻は要した

――一刻後――

「つまり、お前は一刀の事を噂通りの美女だと思い、実際は男だったために取り乱したと？」

「……そうよ／＼」

彼女は荀？、字は文若というあの三国志に出てくる王佐の才で有名な曹操の軍師だ……また女だとは知らなかったが……因みに俺が領主だとは一応、理解してくれた

「それでそろそろ糧食の件ついて話を聞きたいんだけど……」

「いや、近付かないでよ、この全身欲情下劣男！！」

(いや、ほんの少し近づいただけだろ……しかし、立場も関係なしにここまで暴言を吐けるなんてある意味すごいな……)

「貴様、さつきから黙って聞いてれば一刀が動くたびに罵りおつて！！」

「落ち着け姉者、気持ちは分からんでもないが、一刀が普段でいいと言っただから我慢しろ」

「一つだけいいかしら？」

俺に出来るだけ離れている荀？が俺を見ずに秋蘭に質問した

「……………なんだ？」

「どうして、あのは……………北郷がアナタ達の主なわけ？どうみたって夏候淵、アナタの方が適任でしょ？」

（その微妙な間はなんだ！？そこまで男嫌いか！？）

「ふむ、まあそれは簡単な話だ。一刀には私達姉妹にはないものを持つてることと、前任の曹操様の御意志だ。もっとも後者はきつかけだな」

「はっ、この男が持つてるものといえば汚い汚物だけでしょ！？こんな私でも襲うような孕せ男を選ぶ曹操ってやつも大したことないんじゃない？」

（まだ、そつちの誤解が解けてなかった！？……………って春蘭、あいつ何をする気だ！！）

突然、荀？に切りかかろうとする春蘭の前に立ち、手首を掴んで振り降ろそうとする剣を止めた

「おい、春蘭いい加減に落ち着いたらどうだ？たかが罵声だ。いちいち気にするな」

だが、俺の言葉は華琳のことを馬鹿にされた怒りで春蘭にはもう届かなかった

「お前が気にせんでも私が気にするのだ！！もう我慢できん、あい

つをたたつ切つてやる!!」

「だから、それはいくらなんでも不味いって……秋蘭からもなんか言ってくれって……秋蘭!？」

「悪いが一刀、私も姉者には同感だ、ここまでお前や華琳様の事を悪く言われ続けたら私だって感情的になるさ……」

そして誰もが恐怖するようなフフという笑いをする秋蘭

(二人がそこまで俺や華琳の事を想ってくれるのは嬉しいけど、いくらなんでもこの王佐の才を殺すのは惜しい……なんとか説得して余所の国に行かせないようにしないと……骨が折れそうだがな)

「二人とも武器は下ろせ、それにまだ話も聞いてないし、な？」

「アンタみたいな全身変態男に話すことなんてないわよ!」

俺が説得しているにも関わらず、苟?の全く空気の読めない発言によりで夏候姉妹は完全にキレた

「ほづ、どうやら命はいらないらしい、なあ姉者?」

「任せておけ秋蘭。今すぐにもこいつを斬り伏せてやるつ」

「やれるもんならやってみなさいよ……この猪姉妹!」

一向に治まる気配がなくただ悪化するこの状況について俺もキレてしまった

「全員黙れ————!!」

「か、一刀？」

「……あ……な、何よ……これ……？」

(はあくまた覇気使っちゃまったな。これ使つと暫くなぜか春蘭が純情になるんだよな……それに苟？は武将じゃないから耐えきれないな)

「さて、雑談はこれくらいにして、苟？。糧食の件を今度こそ説明してもらおうか？」

俺は無無を言わず、苟？に本題を追求した

「え！……あ……はい……」

(まあ、こんな糧食の案を作ったんだ。それに関しては最後まで働いてもらわないとな)

軍師候補と鉄球少女

――陳留城内――

Side：一刀

「それでこの兵糧の資料見て思ったけど、どうしてこんなにも量が少ないんだ？」

「は、はい……まず、この軍の錬度や行軍を見てきましたが、量を減らすことで遠征への進行速度が上がり、当初の予定よりも早く帰還することが出来ます……」

さっきまでのピリピリとした空気は一切なくなり、とても静かな空間の中で苟？の意見を聞いていた

(……急におとなしくなったな。顔が若干青ざめているが、倒れたりしないよな？)

「しかし、いくら行軍速度が上がったとしても黄巾党の数自体は此方より上だ。かなり手間取ると思うが？」

「今までのやり方だと時間はかかりますが、策を用いれば相手は所詮は獣、簡単に崩すことが可能です……」

(このタイミングで策の提案をしてきたということは……)

「だったら苟？はその策を提案する事が出来るか？」

「はい……元よりそれが目的だったんです」

恐らく落胆しているのだろう。憧れていた者が実は嫌いな男だったことが……苟？の過去に何があったかは知らないが……

(やつぱりか……まあ普通のやつはこんな事はまずししない。王佐の才か……)

「そこまで言うのなら、この件に関しては最後まで責任はとってもらうよ。その後は君の自由でかまわない、じゃあ今日は下がっていいぞ」

「わ、分かりました……」

(まあ、一日休めば大丈夫だろう……あの罵声は勘弁だけど……)
結局、落ち込んだ様子のまま出て行った苟？を見送った後、扉が嫌にでも目に入ったので春蘭に請求する事にした

「春蘭、お前はあの入り口を見て何か言うことはないか？」

「ハア／＼／＼……はっ！な、何だ一刀!？」

(いや、お前は何をトリップしてんだよ……)

「とにかくお前の給金から引いておくからな」

「な、何故だ……も、もしかして一刀は私の事などが嫌いになったのか？私なんてもういらないと言うことか!？」

そう俺が言つと何を勘違いしたのか、俺の襟元を掴んでブンブンと揺さぶり始めた

(く、首を締めるな……マジできつい……)

「だ……れおまえのこ……嫌いにむ……し……だよ……」

「姉者、そんなに一刀の首を絞めては本当に嫌われるぞ？取り敢えず放してやれ」

秋蘭の静止でようやく解放された俺だが……

「ゴホツゴホツ……春蘭、お前はもう少し人の話を聞けって」

(ああ駄目だ……また、意識が……まあ寝れるからいいの……か?)
解放されたが、日頃の疲れやなんやらで俺の意識は再びブラックアウトした

こんな筈じゃなかった……私は小さい頃から私は天才と呼ばれてこんな失敗なんてしなかったけど地方での仕事が完璧すぎて周りから蔑まれ、南皮の袁紹ならきつと私を認めてくれて思ってたけど

(……あの金髪くるくる馬鹿は一文官の私の献策など地味すぎて派手にしないと必要ないですって!?……ああもう、あの笑い声を思い出すだけでムカつくわね……そして最近、この地で治めている北郷という美女が善政を行っているというから何もかも捨ててここままで来たって言うのに、汚らわしい男だとは思わなかったわ……けど、あの瞬間から何故か……逆らえなくなってしまう敬語を使ってしまったじゃない……何なのよあいつは男のくせに)

……私は次の日の朝まで今日の出来事について悩みつづけ、気分は最悪だった

「……もう朝ね……あの男のせいでホント最悪だわ……」

「大丈夫か苟??顔が真っ青だぞ、そんなことで大丈夫なのか?」

そんなことを言っていると少し前くらいから部屋に入ってきた夏侯淵が話しかけてきた。

「……問題なんて……ないわよ……」

「そうか、一応、一刀から命で軍師同等として扱えとのことだ」

「はあ!?なんでよ。あれだけ罵声したのになんでそんな優遇された扱いになってんのよ!?!」

実を言うと私がここに来たときの本当の部屋は共同部屋立ったのだが、部屋で悩んでた私を夏候淵がこの空いた一人部屋で休めと言われ、今に至る

（有り得ない……普通、軍師というのは結果を確実に示す者で主君に対し、絶対的な忠誠を誓える人物ではないとなれないはず……）

「あくまで候補だが、一刀はすでにお前の才を見抜き、期待してるよ。うだ……そういうわけで取り敢えず行軍中は軍事として一刀の隣に居てもらうぞ？」

「はあ？何で私が穢らわしい男の隣にいなきやいけないのよ！？そんな「それ以上言うつもりなら頸と胴がわかるが……いいのか？」うつ……」

気がついたら私は夏候淵に壁際に押さえ込まれ、首元には短刀を当てられていた

（なんで、あの夏候姉妹がなんであんな男に入れ込んでんのよ……そんなにあの男が力をもつてるとは思えない、昨日のは油断してだけよ、私が男なんかには気があるわけないわ……）

若干のわだかまりと首に残る冷たい感触が消えぬまま遠征が始まった

Side：一刀

「なあ秋蘭、春蘭はどうしたんだ、あの落ち込みようは？」

荒野を行軍中、いつもは俺の隣にいる春蘭が今回は後ろにいて、どうしてか理由を秋蘭に聞いていた

（なんか春蘭から負のオーラが出まくってるけど、何とかしないと士気に関わるなありゃ）

「なあに少し昨日のことを引きずってるだけだよ。まあ一刀が慰めてやればいいんじゃないか？」

秋蘭がそういうと馬を近付けて、耳打ちをしてきた

「え……ふう、わかったよ。……ほら春蘭、昨日のことなら気にしてないからさ元気だせよ、な？」

そういつて春蘭の頭を撫でてやった。一年ぐらい前に秋蘭から「お前がそうしたやつたら大概、姉者は機嫌直すよ」と言ったとおりにしたら本当に直るから……単純なやつだなあと思ったのは内緒だ

「えへへ〜かじゅと〜／＼／」

「……………あんなんで本当に大丈夫なの？」

崩れた顔をした春蘭を見て、苟？は呆れているようだった

（春蘭その顔は止める。苟？が引いてるぞ……………）

「戦になればちゃんと働くからお前の心配は杞憂だよ」

「……」

――遠征、五日目――

「ようやく着いたな、取り敢えず秋蘭、近くの役人に取り合ってもらえないか？」

「うむ、了解した」

目的地へと着いた俺達はまず、この村の況を確認するため秋蘭と数名の兵が村の中へと入っていった

(……しかし、村とその周辺が酷いな。荒れているというレベルじゃないぞ……あの黄色の布は黄巾党か……！？鉄球を持った女の子が1人で黄巾党に突っ込んでいった。まずい！！)

「春蘭、部隊の一部を連れてあの子を助けに行け！！」

「おう、任せておけ！！」

春蘭にも見えていたのだろう。俺が指令を出す頃にはもう飛び出していった

「苟?!お前は秋蘭が戻るまでここに居ろ、その後の判断はおまえに任せる」

「……分かったわ」

「村人には被害がでないように注意をしる」

(よし、これで大丈夫だろう、後は春蘭を援護しに行くか)

俺も黒羽を手に取ると、直ぐに動ける部隊と共に援護へと向かった

――

「そのの娘、大丈夫か?この私が来たからにはもう大丈夫だ!!」

「え、うん、僕は平気だよ、お姉ちゃんはだれ?」

「わ、私か?私は夏候……「春蘭、敵に集中しろ!!……とそうだったな、賊共覚悟しろ!!ウオオオオオ!!」

さすがは春蘭と言ったところか、気合いと共に迫り来る賊を次々と斬り伏せていった

「あのお姉ちゃん凄いなあ〜よし、僕も負けないぞ!」

それに便乗した女の子が鉄球をいきなり振り回し、周りにいた賊を

無惨に吹き飛ばしていった

(凄いなあの子、あんな小さいの体のどこにあの馬鹿でかい鉄球を振り回すパワーがあるんだ?……)

「もしかしたら単純なパワーは春蘭以上じゃないのか?」

「おい、そこのお前お「邪魔だ」……ぐああ……」

(……こんな奴らを纏めてる張角はどんなクズ野郎なんだろうな……)

「おい、賊共この黒羽に血を与えてくれる奴は遠慮なくかかってこい……奇麗に殺してやるよ」

張角の人物像を想像しながら、近づいた賊を斬り殺し、挑発をした

「舐めんなよ?この人数相手にたった1人で勝てるわけねえだろ!」

――半刻後――

「たかが百程度の雑魚が俺に勝てるわけないだろう?……春蘭、終わったか?」

「ふん、こんな奴らに遅れを取る私ではないわ！」

「そうだな。それで……えっと君は大丈夫なのか？どうして一人で？」

春蘭の後に続いて近付いてきた女の子に俺は話しかけてみた

「うん、さっきの賊の奴らが村から食糧を奪っていったから許せなくてつい一人で……後、ボクの名前は許緒だよ」

(！この子があの許緒……荀？といい華琳といい有能なやつはなんかつさいなやつばかりだな……)

それは失礼と思い、口には出さなかったが……

「だとしても無謀じゃないのか？いくら君が強くても一人じゃ限界がある「北郷」……荀？か？」

「か、夏候淵を連れてきたわよ……それがさっきの娘？」

「！北郷……夏候淵……ねえ兄ちゃん達つてもしかして官軍？」

「ああ、そうだけ「出ていけ！」……っなんだいきなり!？」

返事を返した瞬間に叫び声とともにあの鉄球が左から迫り、かろうじて避けることが出来た

「一刀！貴様、我らの主に何をする!？」

「秋蘭！！武器を下げる」

それを合図に春蘭と秋蘭が臨戦態勢に入り、俺はそれを制した

「官軍なんかいなくても僕達で村を守るんだ！！おまえ達の助けなんていらない！！」

許緒の力任せの攻撃を俺はまともに受け止めた……そしてそのまま……

「く……確かまだここは俺の管理が行き届いてなかったから……いや言い訳はよそう……すまなかった」

頭を下げ、謝った……

「え、管理下じゃないって兄ちゃんたちは前の官軍の代わりに来たんじゃない……の？」

「いや俺達は陳留から来たんだ、この辺一带まだ来てなかったからな。そうだろ秋蘭？」

「ああ、そうだな、まだこの辺は確かにまだだ」

秋蘭がそこまで言うとしばらく沈黙が続いたが、やがて自分の勘違いに気付いた許緒がいかなり謝りだした。

「ご、ごめんなさい！てつきりこの村を捨てた奴らの仲間と違って攻撃しちゃって……」

（うーん、そう深々と謝られてもなあ……あ、そうだ……）

「それならさ、君さえ良ければ俺の軍に力を貸してくれないかな？」

「え……？」

「春蘭にも勝る怪力に俺がさつき攻撃を受けて確信したんだ。君なら武将としても十分やっていけるよ……どうかな？」

「僕なんかの力で良ければ、いくらでも……」

自分の力が役に立つと思ったのだろう。許緒はみるみる、元気を取り戻していった

「そうかなら、俺は性は北郷、名は一刀で字と真名はないんだが、まあ一刀が君達でいう真名だからな、宜しくな」

「うん、僕の真名は季衣っていうんだよろしくね、一刀様！」

こうして、他に春蘭達と真名を交換（荀？はまだ仮なので許してない）し、今回の遠征に心強い味方が出来た

（さて黄巾党を殲滅に行くか、荀？の知謀も見たいしな）

こうしてこの遠征の成功理由がまた一つ増えた

軍師の在り方（前書き）

キャラが激しく崩壊します。

軍師の在り方

――遠征、十一日目――

Side：一刀

賊討伐は苟？の策により当初の予定より速く片付けることができたが……

（……まずいな。軍全体の士気が落ちている……今の状態で黄巾党なんか出てきたら一溜まりもないな……）

「なあ、苟？。どうして勝利した我が軍の士気が落ちてると思う？」

「……食糧がなくなったことかと……」

「だよなあ……まあ今日まで我慢すれば城に戻れるから……皆、すまないがもう半日は我慢してくれ」

「……はい……分かりました」「」

「うう……」

遠征十一日目の現在、食糧なし！……そう苟？が作成した糧食の案は見事に外れ、昨日時点で糧食は殆どなくなり、俺達も含め、兵の皆も朝から何も食べていない、もちろん本来なら足りる筈だった……だがそれは新戦力、季衣を計算に入れてなかった場合の話。結果、人の何倍も食べる季衣によって糧食は不足し、現在の状況をできてしまった……

(まあ戦の策自体は完璧だったんだがな。季衣があんなに大食漢だとは誰も思わなかったな……)

「ええい、貴様ら！！腹が減ったくらいで(ぐうぐう)…… / / /
……」

「」「」……「」「」

「……一刀、姉者を頼む……」

(……駄目だこりゃ……今、本当に賊が来たら俺らは全滅するんじゃないのか?)

「どうしたの、一刀様？」

「季衣か、どこに行ってたんだ？姿が見えなかったから……は？」

「」「」！?「」「」

俺達が気休め程度に休憩を取って、愚痴を言ってる間、どこかへ行ってた季衣がなんか毛深い物(?)を背負って戻ってきた

「なあ、季衣、それって……熊？」

「はい！鍋とかにしたらとても旨いんですよ。だってお腹が空いてるでしょ？」

その瞬間、春蘭が全力で季衣に突進し、抱きしめて喜びを体全体で表現していた

この日の夜、俺達の軍は本当の意味で一つになれたと俺は思う……

――翌日、王座の間――

Side: 荀?

(はあ〜どうしよう……昨日、城に到着しとき、北郷に「改めて明日、今回の件について話があるから、朝、王座の間に来いよ」と言われた。恐らく昨日の失態の処遇といったところだろう……そりゃ許緒の大食漢は誤算だったわよ。けど軍師はどんな予期せぬ事態が起きても対処できる能力が問われる役職だ、そんなのは言い訳にしかない……)

そんな意味のない事を考えてるうちに北郷が来た

「お、早いな荀? ……大丈夫か、そんな疲れ切った顔をして?」

「あんたのせいでしょ! 次の日に処罰を与えられる事が確定してる人の立場になってみなさいよ!!」

(ああ、もう何を言ってるのよ私は!? 仮にも一国の主であるあいつにこんな暴言を吐いたらより酷くなるって分かっているのに〜)

頭では理解しているのだが、どうしても過去のことが災いし、条件反射が出てしまう

「うーん、確かに気分は最悪になる上にゆっくり眠れはしないな」

けど、この男がおかしい。遠征中も何度かこれ以上の暴言を吐いた私に怒るわけでも気分を悪くするわけでもなく、今みたいに笑い飛ばし、普通に接してくれた

(最初はただ気持ち悪いだけと思ったけど、だんだん話してるうちにそれが北郷の本来の気質だと感じるように……は!?!/……)

「で、早く処罰を言いなさいよ!?!」

「いや、もともと……! そうだな、じゃあ苟?、お前への処罰は……」

(な、何で途中、ニヤリとしたのよ……は! まさか私を犯す気!? 孕ませる気!? ……やっぱり男なんて信用す……)

「俺の専属軍師になってもらおうかな?」

「え……?」

「いや、だからの俺の軍師にならないかって言ったけど?」

「ハ、ハア……!?!」

「お、お前は声が高いんだから耳元で大声で叫ぶのは止めてくれな
いか?」

「正気なの！？あんだ、昨日の遠征で頭、可笑しくなったままなの！？」

「いや、別に、単純に、お前の、知略を、見て、欲しいと、ていうか放してくれ……」

私は意味不明な事（私的に）を言われ動揺しまくって普通なら自分から触らないはずの北郷の肩を掴み、首をブンブンと振っていた

「と、とにかく、私はあんな失態を犯したのよ！そんな私が軍師に相応しいわけないわよ！！」

それに気付いた私は勢いよく北郷から離れた

「うう……いや、あんなの失敗にならないし、そんな小さな事でせつかく見つけた有能な軍師を手放すわけないだろ？」

（私が有能……？そんなこと……いままで親類以外誰にも……）

「分かったわ。一日だけ時間を頂戴……考える時間が欲しいから……」

「ああ、分かったよ。また明日ここで待ってるから……後、今日は秋蘭の仕事を手伝ってやってくれ、人手不足で悪いな」

（……どうして、北郷は私を認めてくれるんだろう……男なんか穢らわしいだけだと思っていたのに……北郷だけは他の男と違う気がする……）

申し訳なさそうに笑う北郷が出ていった後、私は初めての感情に戸惑い、虚しく開いたままの扉を見てただ立ち尽くしていた

――翌日、王座の間――

Side: 一刀

(はあくやっぱり無理かな、昨日の荀？の様子をみる限り……軍師は忙しい今の状況で欲しかったけどなあ)

そんな諦めムードで王座の間に入っていったら……

「おはよう御座います、北郷様!!」

「……………」

バタン……

扉を開けたらおかしかったのでとりあえず閉めなおした

「あれ？まだ寝ぼけてるのかな？」

(あの光景はちがう、あの荀？が罵声は言っても北郷様なんて言う

のは有り得ない！錯覚なんだ……きつとそつに違いない)

俺は目で起きた有り得ない光景を否定し、再び扉を開けた……

「おはよう御座います、北郷様！」

「ハアアアア……！」

幻じゃなかったことで俺は昨日の荀？とまったく同じ反応をしてしまった

「どうした！？荀？？大丈夫か？どこか怪我してないか……」

(ハッ！？ま、まずい、荀？について触れてしまった！？今までの経験上「な、なにすんのよ！？この変態下劣全身精液まみれ男！！」なんてボディブローと罵声のセットが飛んでく………る？………あれ？)

「あ、あの北郷様。心配してくれるのは嬉しいのですが、桂花って呼んでくれると私は尚、嬉しいです／＼」

(デ………デレたぁ………！？あのどう考えてもツン成分100%の荀？が！？昨日の内に一体なにが！？)

連続する超展開についていけず、もうすでに俺の精神は衝撃で崩壊していた……

「えつと……それって荀？の真名？」

「はい、私の真名は桂花と申します／＼」

「そ、そうか、じゃあ俺のことも一刀と読んでいいぞ……」

「はい、ありがとうございます。一刀様／＼」

畏か？とも思ったが目の前で心底、嬉しそうな顔で俺の名を呼ぶ、
苟？……桂花の笑顔を見て、それはないと確信した

「真名を許してくれたなら、軍師の件も？」

「勿論です！私は一生、一刀様の軍師として共に生きて逝きます！
！」

（なんか字が微妙に違う気がしたが……秋蘭だ！！秋蘭なら昨日な
にがあつたか知ってるかも知れない……）

「桂花、最初の命令だ。秋蘭をここに連れてきてくれないか？」

「……御意」

秋蘭を呼ぶように言うと若干、嫉妬した時の春蘭に似た顔をし、出
て行き、俺はなんだか頭が痛くなってきた

本当の姿（前書き）

少しづつ、いろんな意味で壊れ始めます（・・・）

追記：少し改変しました。

本当の姿

――陳留城内――

side：秋蘭

一刀が呼んでると豹変した荀？から報告を受けたので王座の間に来た……恐らく昨日の事だろうと昨日の有り様を思い返しながら扉を開いたら

「よう秋蘭……来てくれたか」

案の定、目の前には疲れ果てた一刀が居た

「一刀様、夏侯淵を連れてきました！」

「そうか、ありがとな桂花。後日でも改めて皆に紹介するから今日もう下がっていいよ」

「あ……はい……分かりました」

先程までの荀？の笑顔はみるみる引いていき、すこし寂しさを感じさせる顔になって部屋を出て行った

(姉者と同じぐらいに表情で分かるな、そこまで一刀の事を……)

「で秋蘭、なんで桂花……荀？はあなっただんだ？」

「ああ、それは昨日、私のところに仕事をしに来たときに……」

くく回想くく

『ハアくどうしたらいいのかしら?.....』

『.....さつきからどうした苟?溜息ばかりついて全然はかどっていないじゃないか.....お前らしくもない』

『.....ねえ夏候淵。あなたも私に期待してるの?』

『ふ、それはまた随分、突拍子もないことを聞くな.....勿論期待してるさ。先の遠征では見事な采配だったぞ。私がそう思うのだから一刀もきつと期待してるさ』

『あいつが期待してくれてるっていうのはさつき聞いたわよ!.....は!?!?.....』

『ほう.....さつきとはもしかして軍師の事か?』

『な、どうしてそれを!?!?』

『なあに、一刀が遠征中にいつも『苟?は絶対に軍師として欲しいなあ』とか言ってたからな』

『そう.....』

『そのようすだとまだ決めかねているということか.....何をそんな

に悩む？』

『わかんないのよ……こんな気持ち初めてで……どうすればいいか……それに』

『ああ、そう言えばお前は男嫌いだったな？……だが一刀を他の男と同じにされては私は納得いかない』

『そういう意味じゃないわよ。ただ、私は……いつも誰かに疎ましく思われ、居場所を奪われ、挙げ句の果てに前に仕官していた所ではつまらない、地味という理由だけで献策も捨てられたから……』

『（なるほどな。要するに人を信じきれないわけか）荀？、ちょっと着いて来い……お前の知らない本当の一刀を見せてやろう。一刀には内緒だがな』

『え、あ、ちょっと……』

私は荀？の腕を掴み、街へと連れ出した

くく陳留市街くく

『いらっしやい北郷様。今良いところにちょうど肉まんが蒸し上がってます。よつかたらどうぞ』

『お、じゃあ一つ貰おうかな』

『北郷様、この桃なんていかがですか？』

『春蘭や季衣にあげたら喜びそうだな……よし、じゃあ三十貫つよ』

『あ、いえ、お代は結構です。そんな北郷様に……』

『いや、俺だけ特別扱いとはいかないからさ。まあ取っついてくれ』

『北郷様、この間頼まれた例の服が出来上がりましたよ！良かったら見ていって下さい』

『マジで……じゃあ、さっそく見せてくれ』

『ああやって暇さえあれば民と触れ合いながら、同時に街の警邏までやっている……昔から一刀はいつもあんなだ。忙しいくせにな』

『……………』

『どうだ苟？、これでも一刀を信用できないか？』

『……………そうよ……………でも……………』

『……………苟？？』

『あ……………そ、そうね、大丈夫よね……………？』

『そうか、ならもういいな。さっさと城に戻って今日の分を片付けるとしよう』

『……………ええ』

～～城内～～

『……………』

『……………ふう……………今日はこのくらいで終わりにしよう。おい、さっきから黙ってばかりだが大丈夫か苟？？』

『そうだったのよ！！』

『なっ！……………？いきなり大声を出してどうした？』

『そうだったのよ、今まで失念してたわ！どうしたこんな簡単な事に気付かなかったのかしら！』

『気付かなかった？……どういう意味だ？』

『夏候淵、礼を言うわ。あなたがさつき、いつもの”北郷様”を見せてくれなかったら気が付かなかったわ！！』

『そうかそれはよか……は？……おい、今お前……北郷様って言わなかったか？』

『私……私達の主だから様を付けて敬うのは当然に決まってるでしょうー！！？』

『いや、だから意味が分からんぞ？男嫌いのお前が北郷様などいばっかじゃないの！！！』な……馬鹿……だと？』

『そうよ！この世には三種類の人間が居るわ。男と女と北郷様よ！……ああ北郷様、愚かな桂花を許して下さい。私は、私はー！』

ボタン……ドドドドドドー……

～～～回想終了～～～

「……………はは」

(話が終わった後、一刀も疲れてはいたが、どこか嬉しそうだった

……因みに市街のことは上手くはぐらかした)

「と、まあこんな感じだ。それに走り去った方向からして目的地は多分ここだな」

「あいつもしかしてずっと一晩ここで待っていたんじゃないだろうな？」

あながち有りそうな事だと私も思った

「恐らくな待つていただろうな……というわけで私も疲れてるんだ」

「秋蘭……」

一刀が私の名を呼ぶと、抱き締めてくれた

(久しぶりだな。一刀が抱いてくれたのは……)

「ふふっ、どうした一刀？いきなり抱きしめて……」

ここ最近は本当に忙しく、一刀にこうして貰うのは本当に久しい……だから私は少し意地悪になってみようと思った

「あれ？……いや、秋蘭が構って欲しそうな目をしていたからつい……違ったか？」

「いや、違わんよ。ただ少しな……」

「まったく……冗談がうまいな秋蘭は」

そういうと一刀はさっきの仕返しと言わんばかりに耳にそっと口付けをした。

「ん／＼／＼……一刀、釣った魚に餌をやらないのは酷いぞ?」

「それは前にも華琳に言われたよ……そうだな、じゃあ明日の朝までは秋蘭に付き合ってやるよ」

「……仕事はしなくていいのか? 姉者は呼ばなくていいのか?」

私が不安そうな声で確認すると、囁くように……

「安心しろ、今日は秋蘭だけだよ」

(／＼／＼……苟?には感謝しておくか。きっかけをつくってくれた礼を……しかし、これでは姉者にも同じ事は言えないな。すまん姉者)

私は姉者に取り敢えず謝り、今日は一日中、一刀と共に過ごした

――数日後、王座の間――

side: 一刀

新しく我が軍に加わることになった苟？こと桂花と季衣の大まかな紹介を終えた後、親睦を深めるために重臣だけで宴会をやっていたのだが……

「何故、貴様が一刀の名を口にしてるのだ!？」

「はあ？そんなの一刀様にお許しを得たからに決まってるでしょう？そんな事も分からないなんてやっぱり春蘭は脳筋ね」

「桂花ああー!!貴様、そこに直れ!たた切つてやる!!」

「ふん、アンタみたいな取り敢えず力で抑えればすべて解決だ!……みたいな馬鹿な脳みそをして……あ、間違えたわ。脳筋は一刀様のそばに居るのに相応しくないわよ?」

「い、言い直すなあああー!!」

(あはは……おかしいな?皆の親睦を深めるための宴だった筈なのに……)

もともと、春蘭と桂花は相容れぬ質なのか少し話しただけで、あつと言つ間に喧嘩になつてしまったのが原因だった

「ほら、春蘭も桂花もその辺にしておいてくれ。せつかくの宴が台無しだぞ?」

「しかし……うう……わかった」

「も、申し訳ありません、一刀様……」

しびしびといった感じの春蘭と素直に俺の言うことだけは聞く桂花はどこまで両極端な二人だった

「あはは、なんだか春蘭様も桂花も一刀様の猫みたいだね」

「ふふ、季衣もなかなか面白いことを言うな」

「季衣。だ、誰がこいつの猫だ！？／＼」

「一刀様の猫……えへへ……ああ、いい／＼」

(しかし、たまに季衣の発言はとんでもない影響を及ぼすからな……あの時みたいに……)

俺はまだ桂花が従順になる前の遠征の出来事を思い出すと共に季衣の発言を否定した

「いや、誰も猫扱いはしてないって、敢えて言うならみんな俺の大事な人達だよ……」

「「「！！！！／＼／＼」」」

「あにや？どうしたの一刀様。なんか三人の顔が赤いよ？」

「……そうみたいだな」

季衣を除く三人がボツと一気に真っ赤になり、言った俺もあとから恥ずかしくなってしまう、そのまま何とも言えない微妙な空気のまま、親睦会は自然消滅していった

未来の英雄

「――とある義勇軍――」

「愛紗、お姉ちゃん。ここからすぐ近くの村に賊がたくさん出てるらしいのだ」

「なに、どうでしょうか、桃香様？」

「勿論、助けに行くよ。だって目の前の助けを求めている人を助けなきゃ大陸のみんな笑顔で過ごせるようにはならないもんね」

「しかし、現状では我が軍は兵も疲弊し兵糧も余裕はありません」

「あわわ、その上、最近は黄巾党が勢いづいて数も何倍にもあぎやっ……あう／＼嘔んじやった」

「でも、鈴々、許せないのだ。弱い人たちが泣くのはもう見たくないのだ」

「そうだね、私も鈴々ちゃんと同じ意見だよ。桃香様、私と雛里ちゃんがこの辺一帯を調べて、策を練ってみます」

「うん、みんな頑張ろう。大陸の人達全員が笑って過ごせる平和な世のために」

――陳留、城内――

side：一刀

「現在、我が領内で黄巾党が頻繁に出没し、被害が拡大しています……一刀様？」

（最近、賊が著しく増えてるな。もうこうなったら根元から絶たないと駄目か……）

「ああ、聞いてるよ……よし、ウジウジしても始まらないか！秋蘭と桂花は戦の準備をそれに春蘭と季衣は兵に伝え、いつでも動けるようにしとくようにいいな？」

俺は自分の顔を軽く叩き、気合いを入れ直し、皆に指令を出した

「うむ、了解した」

「はい、一刀様の命あらば……」

「おう！季衣、行くぞ……」

「はい、春蘭様……」

（それにしても黄巾党頭首、張角……その名前だけしか知られてない黄巾党の頭をどうやって捕らえるか後で桂花に聞いてみるか）

こうして新たに発生した黄巾族の集団を潰すために俺達は準備を急いだ

――翌日、とある荒野――

現在、新たに発生した黄巾党を叩き潰すためにその村に向かってい
る最中、行軍中の空き時間を利用して、桂花に現状を聞いた

「そついえば桂花、黄巾党の張角の情報はどうなってる？」

「……斥候を出して調べてはいるんですが、何分張角の実像がはつきりとしてないので、行き詰まっている状況です。申し訳ありません……」

そつ言うと本当に申し訳なさそうな顔を見せ、必死に隠そうとして
るが明らかに落ち込んでいるので俺は桂花の頭を撫でてみた

「なあに心配すんなって今から始まる戦で挽回すればいいさ。俺はお前の力を信用してるよ」

「一刀様／＼……はい、頑張ります！！」

(しかし、桂花はすっかり変わっちゃったな……まあこつちの方が可愛がりようがあるからいいけど……)

「ふ、姉者も羨ましいなら頑張った姿を一刀に見せればいいんじゃないか？」

「な……だ、誰があんな奴に慰められたり、撫でられたりなんてものは羨ましくなど……ないこと……ない……／＼／」

「あ、一刀様、目の前にどこかの義勇軍が居るみたいですよ、どうします?」

秋蘭がいつものように春蘭をイジリ楽しんでいると前方にいた季衣が義勇軍を発見したと知らせてきた

「義勇軍?……桂花、誰だか分かるか?」

「あの旗を見る限り、あれは最近、公孫贛から出てきた劉備のようです」

(リュウビ?……劉備!……まさかあの三国志の劉備か?……もし本人ならこんな所で英雄の一人に会えるなんて……)

俺はせっかくなのでその英雄の信念を見てみたいと思ったのと同じ時にもしかしたら英傑、関羽と張飛も見れるかもと思った

「なるほどな。じゃあ取り敢えず、会って見ないことには分からないしな。それに確認したいこともあるし……」

「分かりました」

――義勇軍の拠点――

「どう、朱里ちゃん？なんかいい案できた？」

「すみません、まだです……どんなに策を練っても犠牲が大きくなってしまふんです。せめて後、500人くらい兵が居れば他の策が可能ですが……」

「そっか……やっぱり上手く行かないね……」

「朱里ちゃん、ど、どうしょ」

「え、落ち着いて雛里ちゃん。どうしたの？……あ！もしかして賊が攻めてきたの！？」

「ち、違うよ。実は陳留の北郷さんが桃香様と話がしたいって……」

「そう言つこと」

「ひゃあああ……！？」

無許可で入るのは悪いかなとは思ったが待つのは時間の無駄なのでこっそり後ろからついてきたが……

「いや、そんなに驚かなくても……」

（なんか随分、ちっちゃいな。何者なんだろ……！まさか季衣と同じタイプじゃないよな？）

「び、びつくりしますよ。いきなり現れたりしたら……」

「あ、あわわ……」

「ふう〜びつくりしたあ……それで、えっとどちら様なんですか？」

「ああ、俺は北郷一刀、でこっちは軍師の匂イク」

本当は一人で来るはずだったが、桂花がどうして「一刀様の軍師として貴方を一人に出来ません」とかなんとか言って結局、ついてきた

「え、北郷一刀ってあの陳留の……」

「そくだ、最近売り出し中の劉備軍つてのを見たくてね……そう言うわけで、劉備に会わせてくれないかな？」

目の前の女の子は警戒しながらも、劉備を紹介してくれた

「劉備様は此方の方です。」

「あ、はい、私に用ですか？」

「……君が劉備なのか？」

「はい、初めまして……えっと北郷さん。」

(なんか、想像してたのと違うなあ……覇気もまったく感じないし……)

「そうか……で、君たちは？」

いきなり話を振られたのか、二人の女の子はビクツと肩を震わせた
……少し傷付いた

「わ、私は諸葛亮です。」

「あわわ、鳳土元と申しまひゆ！……あう／＼／」

（は？……ええええ！？……この娘たちが諸葛亮に鳳統……）

俺はふと思い出し、ちらつと桂花を見た……

「……何ですか？」

（軍師ってみんな貧しいのかな？……って、失礼なことを考えてる
場合じゃなかったな）

「へえ、君たちがあの有名な水鏡塾の軍師？」

「はわっ！？ど、どうしてそれを……」

「むっ……」

俺が三国志で得た知識を使ったら、見事に的中したよつで諸葛亮達
は驚いていた

「まあ、そこそこの有名だからね……後、そのの奴、隠れてないでこ
っち来て話に加わってみないか？」

「な！？……」

気配がビリビリと発する方向に声をかけたらすぐに薙刀を持った女が出てきた

(綺麗な黒髪だな……劉備の周りにいる武将だと関羽が張飛のどちらかだろうな)

「……君は関羽と張飛どっちだ？」

「「!？」」

「……？」

「!……私は関羽です。しかし何故私が隠れてることが？」

劉備を除く、他の三人が一気に俺に警戒心を向けたがそれを俺は無視して、劉備に聞きたかった事を聞いた

「関羽、殺気を出し過ぎだ。今にも劉備に手を出したら殺すって言うのを感じたからね。それより劉備、少しいいかな？」

「はい、何ですか？」

「君がこの乱世に旗揚げした理由を聞かせてもらえないかな？」

「え、どうしてですか？」

「こつ言っっては聞こえが悪いが、はっきり言って君みたいな、武力もなく、軍師のような知略もない者がどうしてこの乱世の表舞台にでてきたのかな？って純粹に興味が湧いただけだよ」

「！？貴様、桃香様を馬鹿にしてるのかぁっ！！」

怒声と同時に切りかかってきたので、俺は持っていた黒羽で弾き返した

「……………」

(恐らく関羽は脅しのつもりで斬りにきたんだろっが舐められるのは嫌いなんでな)

「あ、愛紗ちゃん、落ち着いて。駄目だよ？すぐに力に頼っちゃ？」

「う、申し訳ありません。桃香様……………」

「すみません、北郷さん、うちの愛紗ちゃん、私の事になるとすぐあぁなっちゃって……………」

いきなり威嚇した関羽を劉備が宥めて抑えた

「いや、別に気にしてないよ。部下に思われてるなんていい主従関係じゃないか？」

「北郷さん、みんなと私は主従関係じゃなくて仲間です」

(ほう……………今まで力のない人を纏める奴は上で物言うだけのクズしかいなかったが、こいつは違うな)

「そうか……………ならもう一度問うが、君がこの乱世で求める物は？」

「はい、私の願いはこの戦だらけ世を終わらせて大陸のみんなが楽しく、笑って過ごせる平和な世界が私の求める物です」

(歴史と同じ……いやそれ以上に考えが甘すぎる)

「甘いな、この世界はそんな綺麗事が通じるほど甘くはない現に今やってる盗賊狩りにすら悲しむ奴だっている……それを解ってるのか？」

ほんのすこしのだけの覇気を劉備に出し……反応を待った

(ここまでの人間か、俺の知る歴史通りに生き抜くことが出来る人間か、見物だな)

「はい、それは分かっています……私がやってるのは綺麗事だって、けど、それでも目の前で悲しんでる人がいたら一人でもそういう人達を救いたい。これが私の答えです!!」

(まだ、理解していないな。その甘い思想がどれだけ危険な事を……しかし、俺の覇気を受けて顔色一つも変えず主張できたのはまあ及第点だな)

俺は出していた覇気を抑え、劉備たちに提案した

「そうか、なら今回は協力しないか？」

「え?……」

「俺もこの乱世は終わらせたいと思ってる。お互いのためにもここ

は協力しないか？」

そこまで言うと理解したようで劉備が俺の手を掴み……

「はい！一緒に頑張りましょう！」

「なら、早速軍議をやるか……桂花、説明を」

「……御意……劉備、諸葛亮と鳳統を少し借りるわよ？」

「はい、朱里ちゃん、雛里ちゃん、頑張つてね！」

「はい、ではあそこの天幕で軍議をしましょう」

「あ、あの…宜しくお願いします」

諸葛亮が指定した天幕へと三人が入っていった時に申し訳なさそうに関羽が話しかけてきた

「あ、あの北郷殿、先ほどの無礼をお許し下さい……」

「別に気にしてないよ。君主思いで良いじゃないか」

「ありがとうございます……後、宜しければ手合わせを御願いできないでしょうか？」

「うーん……まあ、いいよ。ならさっそくやるうか？」

取り敢えず、俺達は一時的な同盟を組んだ……いずれは強敵に成りうる可能性がある人物、劉備と……

関羽の力

――義勇軍、拠点――

side：関羽

風が吹き抜ける荒れ地の中で、私の得物である青龍堰月刀を北郷殿に向け、ただ、じつと構えていた……

（これがあの”血濡れの黒鷹”と呼ばれる北郷殿か……対峙しただけで感じる凄まじい覇気……やり合えるのは正直、楽しく思う）

「ふふ……」

「どうした？」

私は無意識に笑みがこぼれて、突然の笑い声に北郷殿は不思議に思っただに違いない……

「いえ、ただ、貴方みたいな強者と闘えるのは武人として素直に嬉しい」

「……そうか、ならあんまりじらしても意味ないし、さっさと始めるか？」

北郷殿のその言葉を皮切りに、その黒く大きな大剣を私の頭上めがけて、重量を感じさせない速さで振ってきた……だが、その程度の攻撃は私に通用するはずもなく……すぐに青龍刀を構え、そのまま振ってくる大剣の側面に武器の柄で弾き飛ばし、流れるように斬り

込んだ

「ふ……流石にこれくらいじゃ引かないか、関羽は……」

しかし、そこには余裕で体を体を回転させ私の青龍刀が北郷殿の体を通り過ぎた瞬間、地面を蹴り、私に腕を狙って先ほどよりも更に速く斬りつけてきた……

「甘いっ！！」

私はそれに合わせて青龍刀で受け流し、今度は切り上げるように振り上げようとしたが、また弾かれる……その後、お互いの力量がほぼ同じなためだろうか、幾度なく、決め手が決まらず武器の弾き合いが暫く続いていく……

「はっ！」

「はああ！！」

その掛け声とともに私と北郷殿の模擬刀はぶつかり合ったが、男と女の体の違いのせいかな、私の体力が先に無くなりかけたらしく、ギインという音と共に後ろに飛ばされてしまった

「ハアハア……く……」

(想像以上に強い、まだまだ私は未熟者ということか……)

「どうした、関羽。もう体力切れか？」

「ふ……そういう北郷殿も肩で息して……疲れているんじゃないん

ですか？」

私がそう指摘すると北郷殿は「バレてたか？」と聞き、私が頷いて応えるとまた武器を構え、距離が開いたまま最初のようにじっと静観した状態に戻った

(?.....どうしてさっまでのように攻めて.....!!なる程、そう言うことですか)

「分かりました.....我が全身全霊を込め、関雲長.....いざ参る!!」
その気合いの声と共にお互いに地を蹴って飛び出し、武器を振り下ろした。

ギィィィィン---

side:一刀

「あ.....きゃっ.....」

「おっと.....」

結局、俺達がほぼ同時に降った得物は激しくぶつかり、流石にずつと仕合をしてたため、二人して握力の限界がきていたらしく、武器だけがすっ飛んでいき、そして.....

「あ！？す、すみません！／＼／」

「いや、別に気にしてないから、そんなに謝らなくても。」

突進の勢いを止められなかった関羽は俺の胸に飛び込んで来て、俺は反射的に抱き締めてしまった……当然、関羽は見た目通り男に免疫が無かったのか、勢いよく俺の腕から出て行った

「もしかして関羽は初なのか？」

「／＼／＼……何分、武だけを極めるために生きてきたもので」

顔を真っ赤にしたまま、小さくボソボソと返答してくれた

「ははっ、それよりも関羽、いい仕合だったよ」

「い、いえ、此方こそ……良い経験をさせて頂きました……あの、北郷殿？」

「何だ？」

「私の真名を受け取って頂けませんか？」

二人の間には火照ってた体には心地よい、乾いた風が一際、強く吹いた気がした……

「今はまだ、同盟を組んでるが、いずれ敵になる可能性が高い……そんな俺なんか教えていいのか？」

「確かにそうかも知れません。ですが貴方のことをさっきの仕合で

真名を預ける人物に値すると私の心がもう決めているので」

そう言い、自分の手の片方を胸に当て、真っ直ぐで決して揺るがない、目で俺を視る

(……史実の曹操の関羽を欲しがった気持ち、今なら分かる気がするな……ただこれ告白っぽくないかな?)

「そうか……だったら、俺のことは一刀と呼んでくれ、それが俺の真名みたいなものだ」

「はい一刀殿、私のことは愛紗とお呼び下さい……って真名みたいもの?」

それから俺達はしばらく、野营地から少し離れた荒野で話していたが……唐突にそれは終わりを告げた

「かあずううとおおお!!!」

ひどい砂埃を巻き上げながら、七星餓狼を振りかざし、もうスピードでこちらにむかってきた……まさに猪突猛進と言う言葉がピッタリだと思った

(……ってか、あの振りはヤバい!!!)

ドグウウウウ……

「……ゴホツゴホツ……春蘭、いきなり何すんだ?」

俺はとっさの判断で春蘭の剣を回避することができたが、それによ

ってひどい砂埃が発生しせき込んでしまった

「うう……うう……」

凄いご立腹の春蘭を見て俺は事情も分からず、焦りしかでてこない……それは関……愛紗も同じだった。ともかく理由を話してくれるように頼んでみた

「しゅ、春蘭？……えつとどうしたんだ、いきなり怒らないで、理由を話してくれないか？」

「さつき……桂花から、関羽と仕合していると聞いて、遠くから様子を見てたが……一刀、お前はさつきあいつを抱いておったじゃないか……！」

(や、やばい……今すぐ抱き締めたい……ここまで春蘭が嫉妬するのは珍しいからな)

だが、愛紗がいるので頭を撫でるだけで自重する

「分かったよ春蘭、この戦が終わったらお前のしたいことをさせてやるよ？」

「本当か……ならさつきと終わらせるぞ！」

「ああ、そうだな」

「一刀殿、大丈夫ですか？……おい、夏侯惇、お前は自らの主になぜ剣を向けた？」

えていた……こっちに戻って来たでこっちも荒れてるようだ……

(まあ武器をもって暴れられるよりましか……)

「どうしたんだ桂花。策はまだ出来てないのか？」

「か、一刀様！？……いえ、大体の方針は決まったのですが……」

(妙に歯切れが悪いな？いつもの桂花は自信満々に物申すのに……)

俺は他の二人を見た、諸褐亮と鳳統が簡易的に作った机の上でなにより地図を広げてその上に駒を置いて、ああだの、こうだの言ってる

「二人共もどうしたんだ……何か問題でも起きたか？」

「一応、策は前々から決まったのですが……少々問題が起きて、取り敢えず、お伝えします」

「ああ、分かった……」

諸褐亮は先ほどの地図を広げ直し、駒を使って説明をし始めた

「今回はここから少し離れた両脇が山に挟まれているところが賊の本拠地になります。しかし、賊の本拠地は古い砦を使用しており、簡易ながら防衛機能も働いていて私達だけでは正直、攻略は無理がありました……」

「あわわ……そこで、その周辺に斥候を出しました。そうしたらふもとの方の開けた場所に村があり、斥候の話しでは現在その村は

義勇軍が頓駐しており……協力要請をしたところ承諾を受けましたので……なんとかなりそうと思った所に北郷さん達が来てより楽になりました……ふう……」

「諸葛亮達の大まかな策の内容は、まず大陸に名が通ってる一刀様が兵を引き連れ、賊共の砦に一当てして、この村へと引き返します。恐らく賊共は怒りに身を任せて一刀様を追うでしょう。その後、手薄となった砦を春蘭達が早急に奪取し、後は挟み撃ちをすれば恐らく時間は掛からないでしょうが……」

そこで桂花が言葉を詰まらせ……一つの駒を諸葛亮が取り、それを先程の村の場所に置いて、倒した……

「どづい意味だ？」

「はい、この策はこの村の義勇軍と連携を取らないと無理なんです。だから定期的、連絡兵を出していたのですが……今日の朝までには戻ってくるはずの連絡兵が戻ってこないの……」

「そう言うことなら、俺が行こう」

「いけません、一刀様!？」

そのまま天幕を出て行こうとすると、桂花が俺の腕を取り、阻止した……

(やっぱり、引き留めようとするか……まあ桂花が心配してくれるのは嬉しいが、今回は聞けないな)

「桂花、放してくれないか？別に死に行く訳じゃないし、俺が行こうとする理由は軍師である桂花には解るだろう？」

……桂花は俯いたままで無言を貫き、諸葛亮と鳳統はどうしたらいいか分からずあたふたしている……

「分かった。その間は無理に戦わない……これでどうだ？」

「うう」……分かりました」

かなりしぶしぶと言った感じだが、納得してくれたようだ。俺は自分の天幕に戻り、何時もの戦闘装束に着替え、兵を100程引き連れ、連絡がつかなくなった村へと急ぎ、馬を走らせた

復讐の恐怖

――山の麓の村――

side：一刀

俺達が野営地を出てから半日ぐらいたった頃、義勇軍が駐屯してるという村に着いたが、そこで俺達が目にしたのは想像以上に最悪な光景だった

……村の入り口は防壁だろうか？……いや防壁だったんだろう。無残に破壊され、近くには綺麗に並べられて横たわってる……血だらけの死体が寝ていた。簡易的な鎧や剣を身に着けていることから、義勇軍の兵士のような

(……しかし、並べられてるということは生存者がいるのか……賊がこんな事をするとは思えないし……)

「皆、村や村周辺を手分けして調べてくれ、生存者が居るはずだ……」

『御意！……』

「ギヤアアアアアア……」

兵の皆が探索を始めようとした瞬間、村の中心辺りから多数の悲鳴と、とてつもなく大きな爆発音が同時に響き渡った……

「北郷様！？」

「お前等は村周辺を探索している！……あそこには俺が行く！それとお前は軍の所へ戻り、桂花にこの事を報せる！」

「分かりました！」

兵達が動揺する前に指示を出し、俺は焦るように悲鳴と爆発音が聞こえる村の中心部へと足を走らせた

(……周りの家も壊されたり、焼き尽くされているな……あれは……子供……く……)

だが、近づくにつれ……徐々に爆発音は聞こえなくなり、変わりに笑い声が聞こえるようになってきた

……そして俺の目に写ったのは素手で賊を次々に返り討ちにしてる女が居た

(！体のあちこちに傷は浅いが切り傷が多い……まずい、追い詰められてる……仕方ない助太刀に行くか。あの程度の数なら簡単に殺れる……)

「はぁ……はぁ……くそっ……」

「よくも仲間を殺してくれたな。その礼はお前でじっくりはら「お前が死ね」……」

悲鳴を与えることも許さず、俺は賊と傷だらけの女の子の間に入り、話しかけてた賊の顔を横一線に切り裂いた

「あ、あの……？」

「話はコイツ等をしとめてからだ、な？」

「は、はい……！」

「は、まだ500は居るんだぜ、お前等たった二人で勝てるわけないだろうがぁ……！」

「ふ、安い物言いだな。かかつこいよ……クズ共！」

……そこからは早かった。俺が賊共を一気に斬り倒すと周りは怖じ気づき、弓を持ち始めた時、俺は討たせる前に仕留め、あの娘を見たら、信じられない光景が見えた……女の子の手からエネルギー弾みたいなものが放出し、それが賊に当たった瞬間、派手に爆発した……だが呆気にとられたの一瞬で、俺は何時も調子で賊を仕留めた

（あれがさっきの爆発音の正体か……凄いなこの娘は）

結局、豪語していた賊の頭は逃げ帰り、それにあわせて周りの賊も逃げ出した

「あ、あの……助太刀、感謝します。私は楽進と申します。あなたは？」

俺達はさっきの血生臭い場所から移動し、自己紹介をやっていた

「俺の名は北郷一刀……陳留の刺史をやってる者だよ」

「陳留……北郷……！もしかして貴方が”血濡れの黒鷹”ですか？」

（毎回聞く度に思うけど、どうにかならないかな？その通り名……）

「ああ……まあ一応、そっだよ」

「やっぱり、先程の剣の腕前からしてただ者じゃないと思ってましたから」

妙に憧れ念を抱かれているように感じた俺は少し恥ずかしくなり、話を変えた

「それより、一つだけ聞くが、他の義勇兵はどうした？ 恐らく君が率いてたと思うんだけど？」

「はい、確かに私と後二人との三人で率いてたのですが……私が食糧の手配のために数人の兵と共に、村を出て行った間に……く……村の人や……私の親友たちまで……うう……」

(……悔しいんだろうな。民を賊から護るはずなのに自分がいない間に全て殺されてのが)

……もう既に真夜中だが、楽進の顔が月明かりに照らされて涙を流しているのがわかる……

「それで頭に血が登り、賊に挑んだのか……？」

「……敵を……親友二人の敵を取りたかった。自分が馬鹿な事をしたと分かってはいます……けど……!？」

俺はその姿がああ時の秋蘭に似ていたので思わず楽進を抱き締め、背中をさすりながら、落ち着かせようとした

「辛いよな。大切な人達が死ぬのは……けどな、そんな事やってお前が怪我でもしたりしたらその親友は悲しむ筈だ……違うか？」

（ふ……そんな事、かつての自分にも言えた義理じゃないのにな……）

そう思いながら、ある程度落ち着いた楽進を解放した

「……ですが……どうしようもなかった！！自分が自分じゃないみたい……貴方なんかに分かってたまるかあっ！！」

俺は楽進が力任せに振ってくる拳を避けようとはせず、まともに腹で受けた

「……ぐ……な、なかなか……いい拳だな。」

「ど、どうして避けないんですか……あなたなら簡単に避けられるはずなのに……どうして!？」

「今のを避けたらお前はかつての俺のようになるかもしれない……大切な者が傷つきに、感情を抑えることが出来ずに周りの全てが憎く見え、手当たり次第に憎しみをぶつけてしまう……信念がない力がどれほど危険か……俺が身を持って体験した。そのせいで俺は自分も傷付け、そして大切な人も自らの手で殺してしまった……」

「!?!?……」

「……最後にそいつのお陰で自分の過ちに気付いたけどな。だが俺以外の奴にはそんな世界に堕ちて欲しくない……だから、泣きたい時には泣け、そうやって感情を閉じ込めてしまおうのが一番よくない」

「あ……ああ……うう……」

それを皮切りに楽進はタンを切ったかのように俺の胸で泣き叫んだ……そして俺はその背をただ撫でるだけしかできなかった

（楽進も俺と同じだな……もし俺達がここに来なかったら……）

考えたくもないことを考えている自分自身に嫌悪し、また後悔をし
てる時……ようやく、楽進が落ち着いて呟いた……

「うう……私は……まだ……やり直せるでしょうか？」

「ああ……お前が俺のように堕ちてない。これからも心を強く持て
ばきっと大丈夫だ」

「はい、ありがとうございます……」

（眠ったか……しょうがないよな……よっと……）

このままこんな場所に寝かせるのも悪い気がしたので馬を繋いで置
いた場所まで行こうとして楽進を背負った頃……

「一刀、無事か……！むう誰だ、その女は？」

秋蘭が、慌てた様子で駆けつけてきた

「ああ、こいつは義勇軍の生き残りだ……今は疲れて眠っている……
……俺たちの陣まで運ばせる……後、ここの義勇軍達に墓を頼む」

「うむ……了解した……」

スヤスヤと寝ている楽進を俺の前に乗せ……そのまま村を後にした
……

（ハアゝまったく、こんな事を言うつもりも思い出すつもりもなかったんだけどな……なんだかんだ言って一番弱いのは俺か……）

ふと、空を見上げるとあの日と同じのような満月だった……あんな満月を見るとあの時の馬鹿で甘すぎたあの時の自分を何時までも戒めたくなる……昔の自分を思い出していた

共有する負、信念の拳

――山間地――

side：一刀

辺りは暗闇に包まれ、風が木々を揺らす音が聞こえる夜に、俺達は賊が居座る砦に夜襲をかけようとしていた。俺が楽進を駐屯地に連れ、手当てをした後に桂花がこの作戦を俺に提示した

あまり時間を余りかけても被害が拡大する可能性が有るため、今夜でケリをつけるつもりだ。最初に春蘭と張飛による奇襲部隊の攻撃で敵を混乱させ、その後、砦から炙り出すために秋蘭の部隊による火計……最後に俺と愛紗の本体による殲滅作戦……恐らく、成功するだろうが俺の隣にいる楽進の様子がおかしい

「楽進、まだ体が痛むなら無理をするな」

「いえ、心配入りません……」

(……あくまで隠し通すつもりか。復讐することを……)

……そう思ったのも僅かな間で、奇襲部隊の突撃によって、続けて火計の成功……残すは俺達の攻撃だけとなり思考を止め、突撃の準備を兵の皆にさせる

「楽進……死ぬなよ？」

「そんなつもりはありません……」

「……そうか」

若干の違和感を残したまま、愛紗は戦闘の準備が出来たと告げてきた

「一刀殿、そろそろ行きましょう」

「ああ……皆、あそこにいる賊共は我らの同志となる筈だった人、罪のない大勢の民から全てを奪っていった獣共だ……情けを一切かけるな。その甘さはいずれ自分を苦しめる……全軍突撃！」

〓〓回想〓〓

side：楽進

気が付いたら私は自分の義勇軍が居た村が襲撃されている悪夢を……そこには容赦のない賊の笑い声と義勇軍と民の悲痛な悲鳴を聞いても私は何も出来ないまま、賊の進行は止まらず村の中心部へと進み村を蹂躪していったが、そこに村人を逃げさせるために少し疲弊している私の親友二人が立ちふさがった

『へええ〜上物が居るじゃねえか』

『ち、まだ村人全員が逃げ切っておらんのに……しゃあないな沙和、凧と他の義勇軍が来るまで何としても耐え抜くで』

『了解なの』

賊は余裕な笑みを見せ、二人を取り囲み……攻撃を仕掛けていったが……流石に疲労していても一国の将程度の力を持つてる二人は襲い掛かる賊を全て倒した……だが、また賊が集まりその中から偉そうな男が出て来た。恐らくこの賊の頭だろう。二人は直ぐに攻撃を仕掛けたが……

ギイーンー

『振りが鈍ってるぞ！』

『キヤツ……』

『ハアハア……くそ……』

その男は強かった。二人の攻撃を受け止め、弾き返す……周りには賊がいる……私の知る限り二人に勝ち目はない……そのまま疲弊していき、体中に幾つもの切り傷をつけながらも……戦いつづけたが……親友の一人があつた男によって肩を裂かれ、隙ができてしまい、周りの賊に捕らえられ、もう一人は男に脅され抵抗することが出来ずに捕らえられ……身動きが出来ないように縛られた……

（貴様らあつ！！真桜と沙和を離せ！！）

だが、私は声すらもあげることが出来ず、ただ、呆然と観てるだけだった

『ハアハア……お前ら、こんな事して楽しいんかあ！？』

『そりゃ楽しいからに決まっているだろう?』

男が当然のように言葉を返すと縛れている真桜の腹を蹴り飛ばした

『ぐが……』

『真桜ちゃん!? キヤア……』

その男は沙和の髪を乱暴に掴み……

『……だからお前らみたいにな奴らを見ると余計にやりたくなるんだ
よ……』

その叫びが合図かのように周りにいた賊共が二人を囲んだ

「止めるー……!?!?」

「うおっ!?!? どうした楽進?」

「……ハアハア……ここは?」

「大丈夫か……悪夢でも見たか?」

気が付くとそこには刺史でもあるにも関わらず、見ず知らずの私を
助けてくれた北郷殿が居た……

「な、何故分かるんですか？……」

「大分、うなされていたからな……それより体の方はどうだ？一応、手当てをしたが……」

「は、はい、大丈夫です……すみません……迷惑をかけてしまって……」

「一刀様、賊共に対する策のことで会議を今から開きます……」

そこまで私が言うと、天幕が開き……猫耳みたいな頭巾を被った人が入ってきて軍議を開くと北郷殿に話しかけてきた……何故か私を一瞬、睨んだ？

「分かった……楽進、お前はどつする？」

北郷殿が私を見て確認を取るかのような感じで話してくる……

(そうか……北郷殿は私に……)

「勿論、行きます……いや、行かせて下さい……」

「ああそうふうと思ったよ……」

「一刀様！？ 駄目です。こんな得体の知れない者を軍議に参加させることなど……」

……当然だ。私の説明を北郷殿はどうしたのか分からないが、得体が知れないのは間違いない……

「桂花……こいつはあの義勇軍の生き残りだ。それじゃ駄目かな？」

「う……だ、駄目です。こいつが賊の生き残りかも知れないじゃないですか！！」

「桂花……ちよつと耳を……」

北郷殿はあの猫耳の人に耳打ちすると……猫耳の人が顔を真っ赤にさせ、すぐに外に出て行った

「さて……桂花に許可を貰ったし行くぞ、楽進？」

「は、はい……」

その後すぐに会議が開かれ、作戦を結構するために私は北郷殿と共に賊の殲滅に向かった

――夜、賊の砦付近――

『ぎゃああああ……』

既に皆は火の海になっており、炙り出された賊は次々と北郷、劉備
両軍に襲われ、あちこちで賊の悲鳴が木霊する……

(私の友を殺した罪、地獄に堕ちて償え……)

この皆の賊の殺しているときに私は気付いた。あの時、夢で親友二人の殺戮に参加した奴の顔がある……なら、その原因を作り出した頭が必ず居るはずと思い、私は周りの賊を吹き飛ばしながら、なかなか見つからずに焦りを感じていた

(ひとりで殺すため単身で行動をした……こんな姿誰にも見られたくない……特に北郷殿には……)

無我夢中で探し続け、どのくらい時間が立っただろうか、ようやくその男に私は遭遇した

「ち、使えねえ奴らだな……しょうがねえな……さっさと逃げるとするか」

「まて……」

「!?!?くそ……軍の人間か……そこを(ズギャン)グハア!?!?……」

男が話している最中に私は我慢できずに男を氣弾で吹き飛ばした

「ぐあああ……て、てめえ……いきなり……何しやがる。武人なら何が、武人だ!?!?……ぎゃああああ……や、やめろって言ってんだろつがあああ!?!?」

「ごちゃごちゃともを言う男に私は男の片方の足をへし折った。もう歩けないはずだ……だがそれでもまだ立ち上がって逃げようとしたのでそのままもう片方の足もグシャリという音ともに潰れた……」

（簡単には死なせない……このまま、なぶり殺しに……）

「お前はそうやって言った者達を何人殺したんだ？」

「ぎがが……知るかああ！」

五月蠅いので、真桜の腹を蹴り飛ばしたように男の腹を蹴り飛ばし、そのまま……

ズシュ……

「……が……」

「楽進、もう戦は終わりだ……これ以上、意味のない争いで自分を見失っては駄目だ」

北郷殿があつさり殺し、私は何とも言えない虚無感を感じて、気が付けば北郷殿の胸倉を掴んで責めていた

「どうしてですか？どうして私に復讐をさせてくれない！？」

「……」

無言のまま答えようとしない北郷殿に私は自然と殺意が沸いた……

「あなたが……あなたが……あなたが……早く、援軍を送ってくれればこん

な事にはならなかった……全部、あなたのせいだあつ……！」

「……それが楽進の本音か？それが本音ならお前は何をしたい？」

「っ……それを言ったところで、あなたが私に何をしてくれる！？
……何を……何を……所詮そんな事も出来ないのに、私のこの感情をどこにぶつけなければいいんだあつ……！」

「なら、来いよ。力の限りぶつけて……それでお前の気が済むならな」

「な！？……あああ……！」

北郷殿から凄まじい氣を感じ、一瞬、私は怖じ気付いたが、叫び声で自分をごまかし、身体中の氣を右手に全て集め、北郷殿の言うとおり、力の限り振りかぶった

ズガー……ン……

「ハアハア……！？……私は何を……北郷殿？」

私は身体中の氣を殆ど出し切ったせいかわやく、頭の中が軽くなつたと同時に自分の行いに気付き、北郷殿の安否を心配し探したが……

「よう楽進、もう氣は済んだか？……」

そこには私の氣弾で地面が吹っ飛んだ奥でボロボロになりながら手を振る北郷殿を見つけ、震える足に鞭を打ち、すぐさま駆け付けた

「……うう……く……すみません……北郷殿……私は馬鹿です。あ

あなたがこんな事にならないように言ってくれたのに……」

(ああ……もう駄目だ……私は堕ちたんだ……)

そんな自暴自棄になってうつむいている私に……ずっと無言だった不意に北郷殿が痛むであろう右手で私をまた……抱き締めてくれた

「大丈夫だ。まだ楽進は堕ちてない……自分で気付くことが出来た。誰の手を借りずにここまで戻って来れたじゃないか……そのまま落ち続けた俺とは違うよ。だから、後は俺がお前を引っ張ってやるよ」

「……はい、はい……」

私は涙を流しながら、少し恥ずかしかったが北郷殿の温もりを素直に感じ、ようやく曇りがかった私の心は晴れた気がした

――二日後、村周辺の森――

「もういいのか？」

「……はい……もう大丈夫です……」

私と北郷殿は、夏候淵將軍達が造ってくれた義勇軍の墓がある森に来ていた。風もあまり強くは吹かず木々のざわめきしか聞こえない静かな森……その陽が当たる開けた場所に私の親友二人は眠っていた……

「……楽進、君はこれからどうするんだ？」

「……いえ、正直まだ決めてません……私は……私達は何時もある三人で一緒に過ごして二人が私を導いてくれてましたから……よく分からないんです」

……三人で過ごした日々を思い出し、感傷に更けて笑っていると……座っていた北郷殿が立ち上がり私のほうを向いて、言った……

「だったらさ……俺の所に来ないか？」

「え……北郷殿の所にですか……？」

「ああ、楽進の力ならもつと大陸の皆の為になると思っし、その力は十分に役に立つよ……まだ拳を振るう気持ちがあるならな」

少し不安そうな北郷殿の声……多分、私の様子からして断るかも知れないと思っっているのだろう……確かに答えなんて決まってる……私も立ち上がり北郷殿に返事をした……

「私でよければいくらでも使っして下さい……私の真名は凧と言います。真名を捧げると共に北郷様に忠誠を誓います」

「……八八……そうか、じゃあ俺の事も北郷じゃなく一刀って呼んでくれ……宜しくな……凧……」

「はい……此方こそ一刀様」

「……そろそろ戻ろうか？」

「了解です」

そう言うと一刀様は森の出口へ歩き始め、私も後に続いた……

（真桜、沙和……お前達に会うのはもう少し先になりそうだ……私には新たな目標が出来たからそれを信じて今度は一人で進もうと思う……いつここに来れるかは分からないけど……必ずまた会いに来る。だから安心して見守っていてくれ……それと……今までありがとう）

――オマケ――

side: 一刀

「全く、あれほどムチャをするなど言っておったのにこんな怪我をしてよく、大したことないと言えたものだな。一刀？」

昨日の夜、戦の終わりに凧に肩を支えて貰いながら軍に戻ったとき、秋蘭と桂花が血相を変えて俺に詰め寄り、手当てを受けた後、直ぐに秋蘭の天幕に連れ去られ、二人の説教が始まって半刻が過ぎていた

「秋蘭の言うとおりですよ。一刀様が前線に出るだけで私がどれほど心配するか……分かってるんですか？」

「ああ、もう反省しているからそろそろ、許して下さい」

「駄目だ。今日の間はずっとこうさせて貰うからな？」

「いや、でもそれだったら秋蘭が大変だろ？」

「いえ、その時の為に私がいるんです」

(まあ、確かに秋蘭の膝枕は気持ちいいけど……)

結局、この日は秋蘭と桂花の交代でずっと膝枕で付きつきり俺の看病をしてくれた……その分、説教も延々と聞かされたが……因みに別れの挨拶に来た劉備達にこの様子を目撃されたのは言ってもない

嘘と真実

――陳留郊外――

side：一刀

先の戦の終結後、 凧を皆に紹介をし、 体制を調えるため、 陳留へと帰ってきた…… 最近では軍師の桂花が加わったことで前より忙しくなくなり、 暇な時間が多くできた事もあったので……

「……久しぶりだな華琳。 大体、 半年振りかな？」

……俺はこの町の景色が一望できる小高い丘の上に来ていたそばには大きな樹がありその近くに座っている…… ただじつと陳留の景色を眺めて会っていなかった日に起きた事をただの独り言として言う…… 気のせいかも知れないが風が静かに吹き付け、 葉のざわめきの音はまるで彼女が笑っているかのようにも思える…… だから俺は話し続けた……

「……ごめんな…… まだ春蘭達にお前の事を話すのは早いかも知れないけど……」

けど話すにつれ、 つい最近の凧と出会った日々を話した……

「……春蘭と秋蘭にはお前の事を「二人の心に余裕が出来たら真実を話しなさい」って言われて、 俺は約束をしたよな…… けどさ、 さっき言った凧と出会って本当にそれまで言わなくていいのかなって思ったんだよな」

その瞬間、周りの風が止み……空気が張り詰めた気がした……

「……やっぱり、まだ言わない方が春蘭達の為だと言うことが……
そっか……そうだよな。分かったよ……まだしばらくは黙っておく
……変な事を言っただけ悪かったな」

俺の返事の後には何も返ってこなく……しばらくはこの穏やかな時
間をゆっくりと過ごした……

――城、王座の間――

俺が城に戻ると、門番から王座に来るようにと桂花から連絡があった

「みんな集まってどうした？」

王座の間に入ると……季衣がいきなり抱き付き、予想外の報告を言
った

「一刀様！、聞いて聞いて、ついに張角の正体があったんだ！！」

「！？……本当なのか季衣？」

「うん、でも詳しい事は桂花に聞いてね」

そこまで季衣が言つと俺から離れて春蘭の隣に移動した

(……春蘭や秋蘭に囲まれているのか……どうやら本当のようだな)

「……桂花、どういうことだ？」

「はい、先ずは一刀様も知つての通り、最近連中の中には将校崩れなど、ある程度の武や軍略の知識を持つものまで現れて……手ごわくもなっています……」

「はい、一刀様……これを見て下さい」

季衣からバトンタッチをされた桂花が説明すると風が俺に一枚の紙を渡し、読めというので読んでみた……余談だが新入りの風には町の警備と新兵の訓練をしてもらっている

「えっと……張三姉妹の次の講演は3日後、会員は後述の場所に全員集まれ……これは何かの連絡文書か？」

「はい、お察しの通り、それは黄巾党の物です」

(厄介だな。最近の黄巾党には読み書きまでできる奴がいるのか……)

「それでその指定された場所に斥候出してたら……数万という数の黄巾党が集まってなにやら中央には張三姉妹と思われる者達を取り囲んで、賊は異様な奇声を上げていたとの報告がありました……恐らく、士気高揚の為ではないかと……って！一刀様、大丈夫ですか！？」

(昔っからこの常識には疑問があつたけどライブまであんのかよ

……俺は本当に三国志の世界にタイムスリップしてるよな？)

……などと下らない事を考えてると桂花が心配そうな声で俺を呼んでいた。で現実に戻った

「ああ、平気だよ。ただこの世界の常識に疑問を持っただけさ」

「?……ならいいんですが。それでこの近くに賊のものと思われる食糧と装備があつたので……ここが奴らの本陣ではないかと。」

「そうか……ならようやくカタが付けけそうだな……それもこれも凧のお手柄だな。」

そう言つて凧の頭を撫でると恥ずかしそうに顔赤らめた……

(しかし、そんなに照れなくても……もしかして、この時代の奴らは頭撫でられるのが好きなのか?……華琳もそうだったし)

「は、はい、ありがとうございます……//」

「さて、皆に告いでおけ、黄巾党を殲滅するための準備を怠るなと」

皆、それぞれの準備で散り散りに去つていったが……春蘭だけが何故か俺を見つめていた

「春蘭、ぼけつとしてないで軍の準備を……お前大丈夫か？」

もしかして具合が悪いのかと思い、近付いていったら……

「……はっ！？な……なななななんでもないー！ー！！」

春蘭の叫びとともに俺の鳩尾に思いっきり拳を突き立て、すぐさま走り去っていった

「ぐふっ！？……な、何なんだ。春蘭のやつ……」

俺が意味も分からず悶絶していると隣にいた秋蘭が話しかけてきた……
…心底楽しそうな顔で……

「ふふっ姉者は寂しいのだよ……一刀が最近、他の子とばかり構ってるからさ……私もだぞ？」

あの春蘭が？……とかなんとか考えてる内に急に秋蘭が抱きついてきた。

「秋蘭、お前までどうしたんだ？」

「一刀、なにを思い詰めてるのは知らんが、今のお前はまるで以前の私や姉者のようだぞ？……私達では頼りにならないか？」

「……そんな事はないよ。俺なら大丈夫だ「嘘だな？」………
…すまない」

今でも俺の顔を見つめ「真実を話さないと許さない」という強い意志を込めた目をしてるが……やはり、心なしか不安そうにも見える……

(やっぱり、秋蘭にはごまかしは通用しないなか……けど、今は……

…)

「……ごめんな、秋蘭……今はまだ本当のことは言えない」

秋蘭「……っ……何故だ？……一刀。」

今、ここであの事を……あの日の真実を話すことなど、こんな不安定な精神の秋蘭に話したら恐らく耐える事なんてできないだろう……それに今もこれだけで酷く裏切られたかのような顔をしているから尚更だ

「この戦乱の世が終わり、平和が訪れたときに春蘭も含めて言うよ。華琳の真実を……」

「！華琳様の真実だと？それは一刀、私たち姉妹には今すぐ話すことはできないのか？」

「本当ならすぐにでも言いたかった……でも華琳にな、ずっと言うなど言われたままで、……でも、なんとなく華琳が駄目だと言った理由も分かっている」

(こんな静かで気まずい空気は久しぶりだ……この程度の言い訳は通用するわけがない……結局、俺は最低なままか)

「……分かった。そこまで言うならその日まで待とう……私は一刀を信じてるからな」

そう言うと秋蘭はより強く俺を抱き締め、顔を上げて、それからお互いに引き寄せられるかのように……

「ねえ、お腹空いたよぉ、ご飯まだあぁ？」

「人和……まだお風呂に入っちゃいけないの……？」

「何度も言っけどもうそんな余裕はないの。少しは我慢して」

「でも、もうお姉ちゃん。限界だよ」

「もう嫌よ！何でちい達がこんな目に合うの！？」

「はぁ、もう姉さん達は黙って……話がややこしくなる……」

悪意無き歌

――とある荒野――

side：一刀

俺達はようやく、今まで誰も正体を掴めることが出来なかった黄巾党の党首、張角がいると言う賊の本陣が一望できる場所に軍を構え、重臣だけで会議を開いていたが……予想以上に敵が多かったため

「うわあ〜さつき外を見ましたけど、なんかすっごい人数ですね……何人くらいいるのかなあ？」

「……報告以上の数、ざっと二十万くらいだ」

「へえ〜二十万か……って、ええ！？二十万！！僕達一万くらいしかいませんよ。一刀様〜どうするんですか？」

案の定、季衣は目の前の敵で判断して動揺している……春蘭は「ふん、相手になってやる！」とか言っているが放っておこう

「季衣、少しは落ち着けて……桂花、敵は二十万と言っても実際は何万が相手のまともな戦力なんだ？」

「そうですね……多く見積もっても三万くらいが限度だと思います」

桂花が実際の見積もりを言うと心なしかげんなりした顔で春蘭が桂花に聞いてきた

「……………何故だ？」

「……………はあくあんたのような敵の状況もまともに分かってない馬鹿には今からちゃんと説明してあげるわよ！」

(桂花、俺以外に毒を不用意にはらまくのは止めてくれ)

そしてもはや、近頃のお約束と成りつつある……………春蘭が桂花に突っかかる事が……………

「桂花ー！それはどういう意味だ！それではまるで私が周りの状況も読めなただの突撃するのが取り柄の猪武者ではないか!？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………にゃ？」

季衣を覗き、俺を含む皆は「今更気付いたのか」という驚き半分、呆れ半分の顔をして目をそらしてる

(……………春蘭、なんて不憫な娘だ……………)

「……………な、何故そこで皆黙るのだ。うううう……………季衣! !お前はそうは思わないよなあっ?!」

涙目で最後の希望（春蘭にとって）季衣に凄い勢いで訴えたが……

「え、でも……春蘭様のいつも考えなしで突進する姿も僕はカッコいいと思いますよ？」

ある意味空気を讀んだ屈託のない無邪気な笑顔で見事、春蘭にトドメをさした。そして春蘭は精神は崩壊した……

「う、うわあああんー私だって……私だって毎回毎回、突進だけしたい訳じゃないんだぞ……ただ敵を見るとそういう気持ちを抑えられないんだああ……うう……」

（一応、確認しとくがここは戦場だよな？……そんな当然のことも忘れさせる春蘭、恐しい奴だな……）

「まんま猪そのものじゃない、それがわかってるならもう一刀様に近づかないことね。迷惑だから。ほら一刀様に「今まで迷惑かけてすみませんでした。これからはただの猪として生きて逝きます」って言いなさいよ！」

「……うう……だ、だまれ……桂花……」

（……これ以上、ほっといたらホントに春蘭が暴走しそうな勢いなので、俺は桂花の頭を小突き、春蘭を慰め始めた……）

「あう……一刀様あ／＼」

（何故をそこで顔赤らめる？そんなに強く叩いて無かったはずだが……まあいいか）

「桂花、もうそれくらいにしておけよ……後、春蘭……前にも言ったがお前は俺の大切な奴だ。俺にはお前が必要だ。だから自信をもて、お前には俺がそばにいてやる、な？」

「ひつく……か、かずと……うああーかずとおおー大好きだああー」

喜びの余り、春蘭は告白ともとれる事を叫びながら今まで見たこともないスピードで突進してきたので……

ズガアアナー……

「ぐあああああ！！？」

「……は！？……しまったああ！？」

「姉者ああー！！」

「春蘭様あ〜」

「フフツ、いい気味ね」

「……一刀様、最低です……」

……俺は今、現在用いる神経をフル活動させ、春蘭のハグ（突進）を全力で避けてしまった……勿論、春蘭は勢いを止めきれず天幕を突き破り、飛び出てしまった……秋蘭と季衣は春蘭の安否を確認しに外に飛び出し、桂花は不適に笑い、凧には軽蔑されてしまったよ

うだ……

(ごめんな春蘭。避けたのはわざとじゃないんだ……でも、あんなの誰だって避けてしまっさ)

――半刻後――

「さて、気を取り直して作戦を改めて桂花に説明させて……もらっ

「うにゃあん……一刀お……」

「く……はい、先ずは秋蘭に先発隊を率いてもらっわよ。その先発隊で敵の食糧に火をかけて……春蘭、季衣率いる本体で相手の混乱に乗じて一気に瓦解させて頂戴……いいわね!!」

「了解した……」

「分かったよ!」

今の状況を簡単に説明すると、春蘭の突……愛情表現をよけたばかりに手のつけない暴れん坊となり、仕方なく望みを聞いたところ、急に真っ赤になり小声でボソボソとよく聴こえなかつたから秋蘭に

代弁してもらい、聞いてみたら、会議が終わるまで膝枕しながら頭を撫でて欲しいらしいと言つので、半信半疑でやってみたら今の状況と言っわけだ

(……つつか、まんま猫だよな。春蘭って)

「……風、お前には張三姉妹を捕らえて貰いたいが、やれるか？」

「はい、そのくらいお安いご用です。」

「さて、じゃあそろそろ行くか」

俺は風に指示した後、春蘭をどかし、天幕を出て、すでに準備が出来てる軍に渴を入れた

「聞け！我が軍の精鋭達よ。今こその大陸に猛威を振るつた獣も今は肥え太り、動きのとれなくなった脆獣へと変わり果てた！！今こそあの愚かな賊共を討つ時だ！あいつらにはもはや今までのような手強さは残っていない……全力で叩き潰せ！！」

『ウオオオオー』

――一刻後、駐屯地――

「で……君らが張三姉妹か？」

戦は予想以上にあっさりと終結をした。先ずは秋蘭の部隊による火計、その後いつも以上に気合いの入っている春蘭、季衣の本隊による攻撃……どれも敵は混乱するだけで主犯の張三姉妹ですら逃走していた所を尻が発見したところを捕らえて、現在に至る

「そつよ、文句あるわけ?!」

いきなり張三姉妹の一人が突っかかってきたが構わず俺はつづけた

「見たところただの一般人のようだがどうしてこんな事を始めたんだ?」

すると紫色の髪の子がため息混じりで説明した

「……色々事情が有りすぎて、気が付いたら、手のつけられないことになっていたのよ」

「だったら、その事情とやらはなんだ?」

「はん、どうせ聞くだけ聞いたら、バツサリ……と斬る気でしょう! 私達に討伐指令が出るの知ってるんだから!!」

(あの張宝とかいう奴はよく喋るな……今の状況が分かってないみたいだな?)

「その事に関してだが、お前勘違いしてないか?俺はお前達を殺す気はないし、朝廷に突き出す気もない……第一、お前達の正体を知ってるのは俺達だけだ。」

「へ……ど、どどういう事？」

張宝と張角が分からないといった顔してるので俺は桂花に例の世の中に広まっている張角の特徴を言わせた……案の定、三姉妹内2はシヨツクは受け、もう一人の張梁は知っていたようだ。

「それで殺す気がないなら私達をどうする気？」

「単純に君たちが起こした黄巾党。あれだけの規模の人間を集める求心力はたいしたものだなって、思ったからさ……つまり俺の軍の徴兵や士気向上に手を貸させてことだ」

「……見返りは？」

「俺達の領地なら自由に活動できるようにしてやるよ……勿論、活動資金も与える……どうだ？」

「え、それって……今まで通りに歌っていいって事？」

「ちょっと姉さん、私達はこの今の言いように利用されるって事よ！私……」

張宝が騙されまいとそこまで言ったところで俺は黒羽に手にかけて、そして首もとに突き付けた

「そうか。だったら殺すしかない……制御できないあの求心力は危険だからな？」

「……う……う……」

(…………返事なし…………か、しょうがないな)

俺は黒羽を振りかざし、斬ろうとしたとき紫髪の娘が制止した時……

「まって！それって要するにそれは興行主になってくれると言っ事よね？」

「ああ、そういうことだ……………どうする？　この話しに乗るか？」

「ええ、有り難く受けさせて貰うわ」

すると、さっきまで動けなかった張宝が勝手に了承したのを不満に思ったのか、反論し始めた

「ちょっと人和、私はこんな奴の下で……………」

「ちい姉さん、条件さえ飲めば本来、討伐指令の出てる私達を殺さないと約束するだけでなく資金も与えて来るといふのよ。私達から見ればかなり破格の条件だと思う……………北郷、あなたはこれからも領地を広げてくれるのよね？」

「当然だ。俺の目的は大陸を一つに統一し、戦乱の世を終わらせることだ。そのためにも君達、三姉妹には強力して貰うつもりだよ」

そこまで俺が言うと満足そうに笑って、二人の姉妹に言った

「姉さん達、この人に付けば私達の夢を叶えられると思うの……………いいわよね？」

「お姉ちゃんは難しいことはよく分かんないから、人和ちゃんが決めたことならそれでいいよ」

「はあ、分かったわよ……私も賛成にすればいいんでしょ？」

二人の了解を得て、再び俺の方を向いて三人からは服従の証として真名を授けられた……それと同時に黄巾党は壊滅し、大陸には張角は炎の中で燃え尽きて死んだと言うことが広まり、黄巾の乱は終結した

……後日、陳留に戻った俺たちに今回の功績を讃え、俺に官位と荊州を与えるという”ただ”それだけの為に朝廷からの使者が来た……勿論、予定した宴会は中止になったのは言うまでもない

黄巾党編・完

悪意無き歌（後書き）

中途半端におわってしまった感じがしないでもないですが…とりあえず黄巾党編はここまで言うことで…次回は拠点フェイズを2、3程、入れようと思っています。

不安の渦中

――城内、書物庫――

side：秋蘭

「そういえば前から聞きたい事があったけど、あんた達姉妹と一刀様はどんな関係なの？」

ある日の午後、城の書物庫に私用で本を探しに来ていた時に、政務で使った資料の整理をしているであろう桂花に会い、暫くして本を片手に出ようとしていた時、ふと思いついたかのように桂花が私に質問をした

「どんなと言われても桂花と同じよう、主従の関係だと思いが……」

私は当たり前のようにそう答えたが、桂花には満足した答えではないようで、さっきとは違い具体的な質問をしてきた

「違うわよ！私が聞きたいのはそういう意味じゃなくて、本当にただの主従関係ならどうして敬ったりしてないのよ。はっきり言って一刀様とあんた達姉妹は主従関係というより……盟友のような感じがするからこそ聞いてるんじゃない」

「……どうしてそう思ったんだ？……」

「簡単な事よ……普段のあなたの様子を一刀様の隣でずっと見ていたら馬鹿でも気づくわよ」

そう言う桂花の目は真剣そのものでただじつと私を見ていた

(……桂花の言うとおりだな私達の関係は出会った頃から何も変わってないからな……だからこそ普通こんな関係は対等な立場でないと気が付くのだろう……)

「まあ確かに一刀と私達はいまさら主従なんて関係は無理だろうむしろ昔は逆の立場だったからな……お前の言うとおり、一刀とは同じ人を仰ぎ、今はその人の意志を受け継ぐ盟友さ……それは今も変わらない」

それを聞いた桂花は一瞬、寂しそうな顔をしたが、同時に分かっていたようだ

それからさらに私に問いかけた

「理由を教えてもらえない？……時々、一刀様が酷く傷付いた表情で出掛けたりするから……」

……桂花の危惧している事は恐らく一刀の性格だ……一刀は自分を閉じ込め、そのくせお節介過ぎるほど他人の苦しみまで背負い込む……そういう人間だ……いくら桂花が一刀を慕っているとはいえ、それは一個人の話で、この軍全体の話ではない

この軍はそういった一刀の器質に引かれた者も少なくはない……もし何らかの事で一刀が死んだり、少なくとも重傷を負ってしまったらこの軍は崩壊する。そう桂花は確信している……だから私は理由を話そうと思っただろう

「一刀には聞いたのか？」

「聞いたわよ……でも、「お前はそんな事気にしなくていいよ」「っ
て感じではぐらかされて結局、教えてもらえなかったから秋蘭に聞
いてるの」

(ふ……やはり一刀はそういう奴だな)

私は持つて帰るはずだった本を棚に戻し、桂花に自分が知っている
真実は話すと答えた……

「……なら、私を知る限りの事を教えてやる……但し、ないとは思
うが一刀を裏切るような真似をしたら……」

「そんな事は絶対にないわよ」

桂花は頷き、理解してくれたようで私は一年前のことを思い出すよ
うに話した

〳〳回想、約1年前〳〳

……その日は雨や風が強く打ち付ける嵐のような日だった。まだ一
刀が私達の主では無かった頃のこの城の一室、そこには一目で弱り
きつているのが分かる私たちの元主、……曹操様が寝台で眠っ

ていた

そしてその周りには私と姉者が看病に付き添っており、今も油断が出来ない状況が続いていた

『華琳様……』

『く……こんな時、一刀はどこに行っているのだ』

普段なら一刀はこのような状態になられた時からずっと華琳様のそばについていたが何故か今日に限ってはいなかった……そしてそのまま半刻の間、私と姉者は互いに無言の状態が続いたが、その沈黙を破ったのは華琳様が目を覚ました時の声だった

『う……ここは……春蘭、秋蘭……？』

こんなにも弱り切っているのに……華琳様は政務を無理してこなし
た結果、途中で倒れてしまい……現在の状況に至る

『ここは華琳様の自室です。水でも持つてきましようか？』

『ええ、お願いするわ……ねえ……秋蘭、一刀は……どこに居るの？』

『え、一刀ですか……？……わかりません今日は『大丈夫か、華琳』
……一刀、お前今までどこにいった？』

一刀の声が背後からしたので、私は振り返って一刀の姿を見て驚いた。体中が濡れていることから今まで外にいたのだろう。

しかしこんな嵐に何をしてきたのだろうか……私は少し疑問を持ちつつも、一刀に体を拭くように、促した

『……一刀、取り敢えず、体を拭いたらどうだ？……そのままでは体に響くぞ？』

『ああ、分かってる。その前に……華琳、慧蓮からの伝言とこれを返すと……』

そういうと、一刀が懐から取り出したのは、銀と真紅で飾られた首飾りだったそしてそれを華琳様の手に乗せた……

『……それで一刀。伝言は？……』

『ああ……』あの時に交わした約束を果たすことができなくて、ごめんなさい』……と……』

『……そう、結局……あの子も……』

……慧蓮？……初めて聞く名だった。恐らく真名なのだろうが、私だけが分からないまま一刀と華琳様の話をただ聞いていただけだった

『華琳、すまない……俺が慧蓮を殺したのも同然だ。あの時、華琳の言つとおりにしておけば……お前や慧蓮まで『一刀！』……華琳？』

『……それから先は言つては駄目よ。またあなたが壊れるのを私は見たくないから……』

そこまで言つと華琳様は私の方を向き、少し、二人で話をさせてくれと言われたので一刀を残し、部屋を出たところにちょうど姉者が水を持って帰ってきた

『秋蘭、どうしたんだ部屋から出て？……』

『いや、ただ華琳様が帰ってきた一刀と二人で話したいと仰ったので出ただけだ……入るなよ姉者……？』

それから半刻ぐらい時間がたった時に一刀が部屋から出て、『華琳は寝ているから後は頼む』と言った一刀の顔は沈んでおり、私達の返事を聞かぬまま、その場を後にした

私達は疑問に思ったが華琳様が心配だったので再び部屋に入った。その部屋には今も苦しそうに眠る華琳様が居る……

『まだ、華琳様は苦しんでおられるな……』

『……医者の話ではやはり、あの時の傷口から僅かに毒があったらしい……そのせいで体力が減り、さらにそこから何らかの病を患ってしまったことだそうだ』

『く……あの時、一刀は華琳様と共に行動していた筈だ……どうして一刀は華琳様を守ってやれなかったのだ！？』

……華琳様がこのような状態になられたのはある日の賊が二つの離れた場所で発生し、私と姉者、華琳様と一刀で討伐した時、私達の方はすぐに鎮圧することができ、そのまま城に戻ったが、華琳様達はそれから二日過ぎた辺りで帰ってきた。そして帰ってきた華琳様達を見たときに絶句した

千は居たはずの兵は数人しか残っておらず……一刀はほぼ無傷だったが、華琳様は腹部と右肩に裂傷した後が残っており……すぐに城の医者に見せたが、あれから1ヶ月過ぎた現在も病状は悪化しただけで何一つ良くなっていない

『一つだけ腑に落ちない事があるが、姉者は気付いているか？』

『……………何がだ？』

『何故、生き残った兵も一刀も華琳様もあの日の事を誰も話さない……………不思議に思わないか？』

『そんな事は知らん……………要は一刀が華琳様を守れなかったというだけではないか』

『姉者……………華琳様は一刀を責めると言われたことを忘れたのか？』

『……………分かっている』

……………姉者はばつの悪そうな顔をして俯き……………華琳様が起きる朝まで、お互いに会話を交わすことはなかった

〕〕現在〕〕

side：秋蘭

「そして、その三日後に曹操様は亡くなられた。ただやはり最後まで

で一刀との間で交わされた謎が遺されたままだがな」

どのくらい、話し込んでいたのだろうか。既に少し開いている扉からは夕陽が差し込んでいた

「……ちょっと待つてよ、確かにあんた達姉妹が曹操つて人を大事にしてると言うことしか伝わらなかったわよ！私は一刀様とあなた達の間を聞いたはずよ」

……桂花がさかさず反論してきた……それを聞いて私は急かす桂花に……

「この話が私の意志の前提と言うことだよ」

「……つまり、きっかけと言うわけね」

「ああそうだ、先程の話は曹操様の死が私と姉者と一刀が共有する大切な意志を持つ切っ掛けとなる話だ。まあ一刀はまだ何か隠してるようだがな」

それから、華琳様がなくなられてからの話をした……私と姉者は数週間ほど塞ぎ込み……そこから私達の心を開いたのは曹操様と同じ覇気を持つ一刀によって……

「……そういう事だったのね。じゃあ一刀様はいつもその人の意志を受け継ぎ、貫くことで罪滅ぼしとしているわけなの？」

「そこまでは分からんが……私もそうじゃないかと思っている……だが、一刀と華琳様の約束と言うのが引っかかってはいるがな……」

(…………一刀、乱世が終わるまでは教えないと言ったな…………正直、その時まで待つことなど…………)

これ以上話し込むと終わりそうにないので…………このまま話は止めて、私は桂花を残して書物庫出て行った…………

『……………』

平和な時

――練兵場――

side: 凧

「行くぞ、凧！」

「はい、よろしくお願ひします!!」

まだ、太陽が昇り始めた時間、城の練兵場で一刀様と鍛練を行っている。今は軽く体をほぐした後、ここに来て、もはや日課と成りつつある仕合を始めようとしていた

「では、行きます!!」

かけ声と共に私は攻撃を仕掛け、素早く一刀様の懐に入り込み、腹部に打ち込もうとしたが、訓練用の模擬刀で軽くないなされてしまった

「ここ最近、さらに速度を増したようだが、その後の動きが直線的過ぎる。凧は一撃必殺を狙ってるようだが、そんなものは自分より強い相手には通用しない。相手に反撃の隙を与えない攻撃をしろ」

「は、はい!!」

(相手に反撃されないような攻撃か……ならば……)

「これならどうです!!」

私はさつきより更に接近して突きと蹴りを連続で仕掛けたが、一刀様は僅かに移動しながら体を反らすだけで避けられてしまう

「どうした、それだけか風？」

「っ……まだまだあっ！」

次々に仕掛けても当たりそうであたらない、さらに手数を増やして無我夢中で攻撃をする状態がしばらく続き、私は疲れ始めていた頃……

「風、また動きが単調でがむしゃらになってきたぞ。そんなんじゃ絶対に当たらない……一回、頭であれこれ考えないで流れに任せてみたらどうだ？」

「ハアハア……流れにですか？」

「そうだ。できるか？」

「……やってみます」

指摘された通りに仕掛けてみたが、やはり当たらず、むしろ返しに蹴りを貰ってしまった

「く……」

「風、流れを読もうとするんじゃないやなくて感じるんだ……そしたら自然と体も付いてくれるさ」

「……わ、分かりました」

目の前にいるのは私の主であり、師でもある一刀様は、私の欠点である部分を的確に指導してくれる。きつと前の私はこんな事を聞き入れなくてただ単純な強さのみを求め、人の意見など聞き入れなかっただろう

……けど今の私は素直にそれを受け入れることができる。あの時、守れなかった二人に顔向け出来るぐらいの本当の強さを手に入れるために……

「私はまだまだ強くなる……」

気合いを入れ直し、今度は考えるのを止め、精神を一度、落ち着かせ、それから流れまかせて打ち込みに行った。まず自身が出せる最高の速度で蹴り入れたが……

「甘いぞ、尻！」

一刀様は模擬刀を私の脛にあて蹴りの威力を受け流す。けれど木刀で受け流されることは最初から分かり切っていた

一刀様は攻撃の受け流しが人の何倍も上手い、だから私はその流れを受け入れ、その勢いに任せ更に逆の足で無理をせずに蹴りを仕掛けた

(木刀は未だに片方の足にある……これならいける!?)

「はは、やるな尻。けどなもう一手、足りないな」

「え!?!……ぐはっ！」

一瞬、何が起きたのかよく分かなかった。気が付いたら私は仰向け

に倒れ、木刀が首の隣に突き刺さっていた

「今日はこちらまでかな。立てるか風？」

「あ、はい、ありがとうございます」

一刀様がそう言うのと私に手を差し伸べて笑っていた……そして頭が段々と冷静になっていき思い出した

あの時、正直決まったと思ったが、そこから一刀様は体をさらに回転させ腹部を狙った蹴りを己の体で回転を利用し、受け流してそのまま私の足首を掴み、地面に叩きつけた
その結果、不意に来た衝撃に私は体の空気がすべて出ていったような感覚に陥り、無様な声を出してしまった

「流石です。一刀様……」

様「そう落ち込む必要は全くないぞ。さっきの攻撃は正直焦ったからな。風は前より確実に成長してるよ」

そう言うと一刀様は私の頭をいつものように撫で始めた。日もまだそれほど高く昇っていなく、未だに訓練場には私達以外には誰も居ないけど妙に恥ずかしい……

「そうでしょうか、一刀様や春蘭様を見てるととてもそうは……」

一ヶ月くらい前から一刀様と共に朝鍛錬をしているとき、たまに早起きした春蘭様も加わることがあるが、その時の二人の仕合を見る度に自分の未熟さを思い知らされる

「そう言うけどな、昔は全然適わなかったさ、もつと言えば春蘭達と出会った5年くらい前はその辺の一般兵より弱かったからな」

「……嘘ですよね？」

私はそれを聞いてさすがにあり得ないと思った、何故なら、たかが5年程度で一般兵より弱い人がそんな短期間で武の高みにいる春蘭様に到達するはずがないという思いの冷やかな目線で一刀様に訴えると……

「ほ、本当だって、修行をし始めた頃の三年間は武将レベル……ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」

ふと何かを思い出した一刀様はみるみるうちに顔が真っ青になり、物凄い勢いで誰かに謝り始めた。どうやら知らず知らずの内に何かの傷を抉ってしまったようだ

「か、一刀様、しっかりして下さい!？」

拳動不審に陥りひたすら謝罪し続ける一刀様の肩を持ち揺らし続けること、数分、ようやく我に返ってくれた

「……は!……だ、大丈夫だよ……もうあの地獄は越えたんだから。」

苦笑いを浮かべたまま、もうしばらく体を動かし、半刻を過ぎた頃、一刀様は「そろそろ朝議があるからといい」訓練場を去っていった

(あの一刀様が恐怖するほどの特訓って一体……)

――陳留市街、大通――

一刀様との鍛錬が終わり私は何時もの街の警邏へと来ていた。最近の街の状況は黄巾の残党もすっかり減り、警邏で扱う件もただの酔っ払いの処理や道案内ぐらいのもので、前のような荒事は殆どない。ただ……

「……本当、平和になった……」

(……最近、ここ数日は領内で賊の残党が現れてはいないのに一刀様はどうして兵の鍛錬等をますます強化しているだろうか……)

「あの、、すみません……」

「どうしました？」

「いえ、ちょっとおしえて欲しい場所があるんですが？」

などと考え事をしている最中にいつものように道案内を頼まれてきた……

(駄目だ、駄目だ。仕事に集中しなければ、自分を信用して街の警邏の隊長にしてくれた一刀様に失礼だ)

「どこでしょうか？」

「えっと、お城……」

「の前に、お腹空いたから旨い料理屋を教えてくださいよ」

道案内を頼んできた藍色の髪をした女の人の言葉を遮り、青緑色の髪をした女の人が前に出てきた

「ちょっと、文ちゃん、違うでしょう!？」

「いいんじゃないか。あんな城、いつでも行けるんだし、それより斗詩も長旅でお腹空いてるだろう?」

「はあくもう、しょうがないなあ……なら、取り敢えず美味しい料理のお店を紹介……」

「料理屋が沢山ある場所!」

またも文ちゃんと呼ばれる人が言葉を遮り斗詩と呼ばれる人は諦めたような、疲れたような顔をして溜め息をつき始めた……

「分かりました、料理街ですね……案内します」

しばらく歩くとその名の通り、屋台が立ち並ぶ通りに出た。周りの屋台からはいい匂いがし、昼時もあったかなり人が行き渡っていた

「それじゃ、自分はこの辺で、また困った事があれば、声を掛けて下さい」

そうして私はまた警邏の仕事に戻ろうととき……

「なんだよ姉ちゃんも一緒に食べていきなよ。どうせ昼飯まだ食ってないんだろ？道案内の礼に奢るからさあ」

「まあ確かに、まだ食べていませんが、自分には警邏という仕事を任されているのであまりゆっくりとしている時間は……」

「なんだよ、あたいの奢りが食べられないというつもりかい？」

「ちよつと、文ちゃん。その言い方はよくないよ……はあ……」

と、断ろうとしても、目の前の人には頑に引かず、隣の人が止めようとしても聞かない

「……分かりました。そこまで言うのなら……」

……恐らく、このまま断つても埒があかないと思い、私は折れた

「なら決まり、どっかオススメのガッツリ食える店を教えてくださいよ」
「！」

「ガッツリ食える店ですか……」

(目の前の人にあう店か……)

と、どこか心当たりのある店を考えていると……

「季衣のばか……」

「流琉に言われたくないよ!！」

近くの店から季衣の叫び声がし、私は反射的に飛び出してその店の中に入った

「季衣、どうした!？」

「あ、凧ちゃん、何でもないよお!ただ流琉が連絡をくれなかっただけで……」

「連絡先も書いてないのにどう連絡しろっていつのよお!？」

「そんなの手紙をくれた人に聞けばいいじゃんか!！」

「そんなこと思い付くわけないでしょう!？」

周りの人に構わず、どんどん口喧嘩が激しくなり遂に店の中で暴れ始めたので、私がいい加減に止めようと瞬間、後ろにいた二人組が動いた

「ほーら、二人とも、ご飯の時は行儀よくしないと……なあ、斗詩?」

「うん、それに店の中で暴れちゃ駄目ですよ?」

(!……二人とも何者だ……いくら隙だらけの状態でもあの季衣を簡単に止めるなんて……)

「あなた達は一体、何者なんですか?」

「え、えつと違います！別に私達はやり合つたために来たんじゃない……
「なあんだ？喧嘩ならいつでも買っぜえ？」文ちゃん！！いい加減にして！！！」

私が臨戦態勢に入ると急に焦りだし、連れの人を黙らせると身の潔白を証明するためか自己紹介を始めた

「……私は顔良と申します。実はこの地の北郷殿に用があつて来ました」

そして、この二人の訪問で平和に思えた世界も一気に乱世の幕開けとなつてしまった……

人の価値

――陳留城、玉座の間――

side：一刀

昼過ぎにいつもの政務の途中、凧から俺に来客が来ていると聞いたので会ってみれば、あの袁紹の武将、顔良と文醜という二人だった……その二人の要件は都で暴政をしている董卓を共に滅ぼそうとする連合に参加するかしないかの確認の為にわざわざ来たようだ

「袁紹に袁術、公孫賛に馬騰か……有名な名前ばかりだな」

「はい、董卓の暴政に、都の民は嘆き、今も苦しんでいると聞いております」

「それを我が主は、よのために董卓を打ち倒す英雄の方々にお集まり……」

「いい加減、回りくどい言い方は止めたらどうなの！？ どうせあの我が儘女のことだから、董卓が中央の権力を握った腹いせでこなくだらない連合を結成したんでしょ！！」

手本になるくらいの棒読みを続ける文醜の言葉を俺の隣で今まで静かに聞いていた桂花がいきなり、溜まっていたなにかが爆発したかのように叫んだ

「う……相変わらずですね……桂花さん……」

「はえ〜さつすが、姫の我が儘や暴言に一月耐えただけの事はあつてよく知ってるなあ〜」

「うるさいわよ！大体ね、あの女は自分が派手なら後はどうでもいい、お気楽な脳みそには嫌々してたのよ。あの性格のせいで私があんな奴の為に考えた献策を地味だの品がないだので見向きもせず、挙げ句の果てに私の事を役立たずですって！？……ああもうあの笑い声を思い出すだけでイライラするー！！！」

桂花の悲痛な叫びが木霊した部屋は顔良と文醜以外の皆は呆気に取られていた……

（そういえば、以前にここに来る前、桂花は袁紹の下で働いていたと聞いてたな……思い出す度に心底、嫌そうな顔をされたが……だからなのか恨みが入ってるような感じに聞こえたがあまり気にしない事にしよう）

「なあ、顔良……桂花ってそんなに追い詰められていたのか？」

「はい……私達は武官でしたのでそれなりに麗羽様の我が儘に付き合えば大丈夫ですけど……桂花さんのような誇りが高い文官達ですと個人差はありますが最終的には……」

――顔良の回想：約一年前、南皮――

『……………くうう……………』

『全く、本当に桂花さんは使えませんか。有能な私の部下でしたらもつと、華麗で優雅な献策を出すべきですわ……………こんなで安っぽい献策の紙切れは捨てておきなさい』

『……………い、いえ、ですが……………この献策の街の整備を実行すれば領内にも更なる人が沢山集まるのは……………間違いありません』

『ふん、却下ですね。こんな貧相な計画を実行してたところで私が活躍しませんし、やるだけ無駄ですわね……………まったく貧相な体をしてると献策まで貧相になるのかしら』

『……………(プチッ)』

『まったく無駄に時間を過ごしましたわ。気分転換にお風呂でも……………』

『ちよつと待ちなさいよ……………この剛毛クルクル馬鹿女あつ!!』

『はあ……………ついに桂花さんまで……………』

『あゝあ……………』

『な、なんですって!?!』

『もう我慢できないわ!! 馬鹿もここまでくればただの汚物ね、あんななんか存在自体が邪魔で迷惑な塵よ!!』

『だ、だれがあ……………』

『ほくら姫、落ち着いて下さい。寛大なんでしょう？』

『そ、そうでしたわね……………今ならその言葉を撤回して下されば寛大なる私が……………このワ・タ・ク・シ！が許して上げ……………』

『はあ？もうあなたなんかこっちが見限ってるから、今更頭下げるともりなんてないわよ。本当、そこらの豚以下の脳みそね』

『ぶ、豚以下ですって……………桂花さん、よくもこの三公を輩出した工ん家の私を一度ならず二度までも侮辱しましたわね……………貴女なんか首ですわ、さっさと野に出ておい来なさい！！』

『こんな未来のない滅び逝く国なんてこっちから願ひ下げよ！！』

〜〜回想終了〜〜

「……………という感じです……………」

……………桂花が未だに演説？をしている間に顔良から袁紹のひとりとなりを聞いたが、「酷いな」と同時に「この連合は大丈夫か？」という

不安が両方来ており、一緒に聞いていた秋蘭も困惑した表情をしている……

「取り敢えず、連合には参加させてもらうよ……袁紹にそう伝えといてくれ」

「……ありがとうございます。それでは私達はこれで失礼します」

「ああ、風、送ってやれ」

「……了解しました」

風に二人の案内を頼み、こうして反董卓連合なるものに一応参加したが……一番、不安なのは桂花が連合でエン紹を見掛けていきなり喧嘩を売られても困る

(……まあ桂花は公私混同はしない奴だから大丈夫……)

「今度会ったらあいつの顔に一発、ぶち込んでやるわ!」

「おう! その時は私も手伝ってやるぞ!」

「……言い聞かせておかないと駄目そうだ」

顔良達が去った後も未だに袁紹は無能だの叩き潰すなどを言っている桂花に一刀が桂花に気付かれないように背後に近づきそのまま……抱き締めた……

「殴り……つて、あー……！？」

「むう……」

「ひゃあっ！！？ か、一刀様／＼……い、いきなりどうしたんですか？」

結果、姉者は叫び、桂花は照れながらも質問し……一刀はその桂花に耳元で囁くように言った……

「……桂花は今の俺に不満か？」

「そ、そんなわけありません！！ どうしてそんな事を聞くのですか！？」

「いや、さつきから桂花の話を聞いてたんだが、元主である袁紹の不満がかなり出ていたからさ、もしかして俺も桂花にそんな不愉快な思いをさせているのかなと思って聞いてみたんだが……どうだ？」

「そ、そんなわけありません！！ 一刀様は最高です！……誰にも認められなかった私の能力を唯一、認めて下さったのですから／＼」

……一刀が悲しそうな表情を見せた瞬間、恐らく桂花は墮ちただろう……だがしょうがないと思う。一刀を好いてる奴なら誰だって墮ちてしまう顔だったからな……

「それならさ……」「一刀様、流琉に城の案内終わったよ!!」……
「いいな、桂花?」

「……はい、私は一刀様のモノです／＼」

突然、王座の間に季衣と流琉が入ってきたお陰で一刀が桂花になんて言ったかは誰にも聞こえる事はなかった……

(だいたいの予想はつくが、桂花の奴、いくなんでも一刀に心酔しすぎだ……)

「もう、季衣ったら……あの秋蘭様?　もしかして今、お邪魔でしたか?」

「いや、もう用事は終わっていたからな気にすることはないさ」

この季衣とは正反対に礼儀正しい彼女の名は典章で真名を流琉といい、季衣の親友……先日、同じぐらいの力を持つてる親友がいるから呼んでもいいかと頼まれて承諾した相手だ

……ただ流琉は季衣が城で働いてるのが信用していなく、連絡先も書いてなかったため合流するのに一月程かかってしまい結局、今日たまたま入った料理店でバッタリ出逢ったらしい……その後、そのまま季衣と同じ親衛隊に入ることにしたようだ

「あのね、一刀様、流琉の作る料理はものすごく美味しいんですよ!!」

「こ、こら季衣、一刀様に失礼でしょ……」

「はは、そんな畏まらなくていいよ。この方が季衣らしいじゃないか。それよりさ料理に自信があるなら今度ごちそうさせてもらおうよ？ いいかな流琉？」

「は、はい！！」

一刀に流琉の紹介が一段落したのか、今度は姉者と桂花の方に行き、紹介しているようだ……それで暇になった一刀が私の方にきて、珍しく真剣な顔つきで話しかけてきた

「秋蘭、董卓の事どう思う？」

「さあ、詳しくは間諜を送らんと分からんよ……どうしてそんな事をいま聞く？」

「ああ、そうだよな……さっきの桂花や顔良の話でエン紹の事を秋蘭も聞いただろう……董卓自身、本当は暴政なんかしてないじゃないかもしれない、と思ったただけだ」

「……一刀、その優しさ、戦で出して貰っては困る……それがお前の……」

命取りになるかもしれないぞ？と云う言葉は声に出せなかったが、一刀が死んでしまったらという想いは消えることはなく私は自然と顔が沈んでしまったのだろう……そんな想いを察してくれたのか一刀は私の肩に手を置き……

「心配しなくても俺は大丈夫だ。そういうのはさ華琳の時に身を持って体験したからな……もう同じ間違いはしないよ」

若干、自嘲気味に笑いながら、肩に置いていた手で私の頭を軽く撫でた後、姉者達が騒いでいる方に歩いていった

（いつも一刀が頭を撫でてくれるだけで私達を不思議と安心させてくれる……私にとってそれほど大きな存在だということか……だったらもし、失ってしまったら……）

「……私は今度こそ壊れるかも知れないな……」

無意識に呟いた言葉は誰にも聞こえることなく、代わりに姉者が私を呼ぶ声が聞こえた

「秋蘭！今から流琉が私達に料理を振る舞ってくれるそうだ……一緒にどうだ？」

「ふ、当然だ、姉者……楽しみしてるぞ、流琉」

「はい、任せて下さい……」

そう返事をする早急、季衣があつと言つ間に流琉の手を取り、調理場へ連れて行き、暇になった私は思い出したかのように一刀に聞いた

「そういえば、季衣がこの部屋に来たときに一刀は桂花になんて言つたんだ？」

その事を聞いた瞬間、桂花は誰からも分かるように顔を真っ赤にし、明らかに動揺していた……

「……／＼……あの、一刀様……」

「ああ、あれか？ いや単純に今日はお前の好きなようにしてやる、と言っただけだよ」

桂花の「言わないで下さい。一刀様」と込めた言葉も虚しく、さも当然のごとく、一刀はあっけらかんとした顔で言い放った

「なっなんだと／＼／＼！！？」

「ほう……そんな事を言ったのか？」

「そんな事って言われても二人にはいつも言ってるだろ？」

「（ボツ！！）そ、そんなことを人前で言うな！！／＼／＼」

一刀の暴走？は止まるところを知らず、今度は私達に矛先が向けられ、赤くする番になってしまった……

「おおっ！流石は双子、寸分変わらずピッタリだな」

「か、一刀様あゝ春蘭達にいつも言ってるとはどういふことですか！？」

こうして季衣と流琉が料理が完成したと来るまで暫くの間、私達三人は一刀の鈍感過ぎる性格のせいで落ち着くことが出来なかった……

集結

――とある荒野――

s i e d : 一刀

反董卓連合が発足して、暫くした後、俺達は軍を率いて、指定された集合場所へと向かっていた

「一刀様、連合の陣地が見えました！ 袁紹を始め、多くの旗も確認できます」

城を出て数日、ようやく目的地に近づき、桂花が報告をしている最中、陣地の入口辺りで見張りをしていた顔良が俺達を見て近づいてきた

「あ、北郷殿。ようこそいらっしやいました」

「ああ、久し振りだな顔良。文醜はどうしてる？」

「ふふ……何時も通りに過ごしてますよ」

「そうか……で話は変わるが、俺たちはどこに陣を張ればいい？」

「それは今から案内します。それと麗羽様がこれから軍議を開くとのことですので、本陣まで宜しいですか？」

(来て早々に軍議か……まあ都の民が今も苦しんでいる世間の噂だと急ぐ必要があるかもな)

「ああ、分かった……なら、春蘭と秋蘭は凧、季衣、流琉と共に顔良の指示で陣を構築しておいてくれ」

「うむ、任せておけ」

「了解です」

とりあえず、軍議に参加するため、各将達には陣の構築と兵をまとめてもらうために顔良について行くように指示をした

「俺はこのまま軍議に参加するから……後、桂花はついて来い」

「はい、分かりました」

――連合軍、本陣――

軍議が行われるというエン紹の本陣に到着し、案内役の兵士と思われる者に会議所まで連れて行ってる道中、周りの兵や馬の馬具まで至る所に金のが織り込まれており見た目がかなり派手な仕様になっている

（この時代に鍍金なんて物は存在しないよな……ということはこの

すべて本物か？)

「おーっほっほっほ！ おーっほっほっほ……！」

と根本的な財力の差を痛感しているとき、何故か聞いていると不愉快な気分になる笑い声が聞こえてきた

「何だ、この甲高い変な笑い声は？」

「ちっ、久し振りにあの耳障りな笑い声を聞いたわね……！」

どうやら原因はあの豪勢な金の鎧を纏っている女から発せられたものらしい

「……なあ桂花、もしかしてあのやたら派手なのが袁紹なのか？」

「……はい、あの剛毛派手女が袁紹です」

隣で聞いていた桂花はまるで汚物でも見るように指を指した

「あら、あなたは誰ですの？」

「ああ、俺はあんたに呼ばれた諸侯の一人、北郷と言う者だ」

「あらそうでしたか、でしたら主要な諸侯もあらかた揃ったようですし最初の軍議を始めましょうか。まあでもお互いに知らない顔も多いようですし……そちらの方から名乗っていただけますこと？」

どうやら俺達が最後の諸侯だったようで、周りを見渡してみると、確かに大まかな人数は揃っているようだ……ちなみにその中には劉

備と諸葛亮も居た

「幽州の公孫贇だ。宜しく頼む」

最初に赤い髪をした公孫贇と呼ばれる人物が簡単に自己紹介するとそのまま身を引き、次に劉備が自己紹介をした

「平原郡から来た劉備です。それからこちらは私の軍師、諸葛亮です」

「宜しく願います」

（久し振りに劉備の顔を見たな……あれからどう成長しているかどうか楽しみだけど……あんまり変わってなさそうだな）

「涼州の馬超だ。今日は馬騰の名代としてここに参加するようになった。宜しく」

「あら、馬騰さんは来ていらっしゃいませんか？」

「ああ、ここ最近、西方の五胡の動きが活発だね。袁紹には宜しくと言われていたよ。すまないが宜しく頼む」

俺が聞きたかった質問を代わりに袁紹が聞いていた

（通りで馬騰さんの顔を見ないわけだな……しかし五胡か……まだ落ち着いていないのか？）

「あらあら、あちらの野蛮人の相手をしては落ち着く暇もありませんわね」

「っ！……………」

「ど、どうされました。一刀様？」

「…………いや、何でもないよ」

「河南を治めておる袁術じゃ。まあ妾の紹介なんぞは必要ないと思うがの！ ほっほっほ！」

「私は美羽様の補佐で張勳と申します。此方は客将の孫策さんです」

袁術と呼ばれた見た目は季衣達とそんなに変わらない年の子が自己紹介をしていたが、あの笑い声でどことなく袁紹と同じ部類に感じた

(…………髪色も同じだし、多分、親戚かなんかかな？)

「……………」

そして孫策はただ黙礼をしただけでそのまま、身を引いた

ただ一つ気になるのは孫策のあの目、まるで自由を奪われた檻の中の猛獣…………虎のような鋭い眼光を感じた…………

「…………俺は陳留から来た北郷と言う者だ。それとこっちは俺の軍師の荀？だ」

「……………」

桂花が先ほどの孫策と同じように黙礼すると、袁紹が懐かしい者に久し振り会ったかのように…………

「あーら、誰かと思えば桂花さんじゃありませんの？私のところを飛び出して何をしてるかと思えば北郷さんのところに居たんですね」

「……何も言わず、勝手に飛び出して申し訳ありませんでした」

「まあ別にいいですね。あなたのような私と合わない無能な人は我が軍には必要ありませんわ」

「く……言わせておけば……一刀様!!」

一応、先日釘を刺しておいたが、恐らく我慢の限界なんてとうの昔に超えてたのだろう、桂花が何かを言い掛けたが俺はそれを制止し……

「さっきも言ったと思うが桂花は俺の軍師でな、昔どうだったかは知らないが……これ以上桂花を侮辱するようなら……」

「っ!?!……わ、分かりましたわ」

変わりに少しばかりの覇気を袁紹にぶつけ、桂花はまだ納得していないようだが、とりあえず場を弁えてもらい、無理やり落ち着かせた

「それより軍議を始めるんだろ？さっさとやろうぜ」

皆の紹介が終わったところで馬超が軍議を始めるように袁紹に促した……どうやらこういいうサバサバしたところは馬騰さんとなんら変わらないらしい

「そうですね……では、軍議を始めさせていただきますわ。それで最初の議題ですがこのわ……」「現状と目的の確認をするんだろ？」「……ええと、そ、そうですね。この私が集めた反董卓連合の目的ですけれど……」

再開した軍議で袁紹が何かを言おうとしたが、公孫贇がそれを遮り、袁紹は多少どもりながら話を続けたが……

「都で暴政を強いて、民を苦しませているという董卓の討伐、だつたはずだろ？」

そして袁紹に喋らせたら話しが進まないと、何故か直感的に感じたので俺も遮り、本題に入らせて貰った

「でも、私は董卓という人はよく知らないんですけど……皆さんの中で誰か知っている人はいませんか？」

「妾も知らんのじゃ。確かどこかの小領主とは聞いたような気もするが、誰か詳しい奴はおるか？」

「私もよく分からん……本初はどうだ？」

「わ、私ですか！？そんな新参者の小者など私がいちいち知っているわけないですわ」

「ようするに誰も知らない謎の人物ってことか……」

結局、主催者の袁紹までも知らないと言って、馬超が溜め息混じりにせめたが、公孫贇が何事もなかったかのように仕切り、話を続けた

「まあ、そいつの情報はこれから集めるとして……現状はこれくらいでいいんじゃないか？」

「で、でしたら、次は……」

「都までの経路ですね」

劉備も直感的に感じたのかは分からないがまたも袁紹を遮り、次の議題へと入った

「それはこの大軍だから、街道に沿った移動が基本的になるんじゃないか？」

「ああ、それに間には大きな関所、？水関と虎牢関があるからな。恐らくその前後で戦闘が起こるだろうな」

いくつもの諸侯が集まり出来た連合は都の董卓に対抗できる量の兵は集まったが、指揮系統がバラバラなので、必然的にある程度整備された街道を進軍しないとたちまち連合は離散するだろう

「そ、そうですね。きつと、そこど戦闘が始まり、このワ・タ……」

「関所の将は誰なのじゃ、七乃？」

「はい、お嬢様……えつと、？水関は華雄、虎牢関は呂布と張遼が構えていると報告がありますが、これはただ連合が出る前の情報ですから、もう一度、間者を放つて再調査をする必要があると思います」

(飛將軍呂布か……確か史実では董卓に不満をもち、裏切ったけどこの世界では俺の世界の歴史が通用しないところが有りすぎるからな……)

「だったら、調査くらいなら、私達の軍がやりますよ」

「そうか？ だったら？ 水関は私達が偵察をしようか、桃香達なら私と連携を取れるしな」

この中では劉備軍は余り強いとはいえない。それ故にこの調査に先に買って出たのは多分、諸葛亮からの入れ知恵なのだろう……

「だったら？ 水関の調査は劉備と公孫賛で任せてもいいな……今はこれくらいで大丈夫か？」

「まだ、大事な議題が残ってますわ!!」

会議がもう直ぐで終わる頃、今まで遮られ続けたエン紹がまだ議題が残っていると行って、叫んだ

「何だ、まだ何かあるのか？」

「どの軍が？ 水関を攻めるとか？」

「そんなのは調査ついでに劉備さんが攻め落とせばいいんですわ」

「ええっ！？ いくら何でもそれは無茶「桃香様！」……分かりました」

袁紹の理不尽過ぎる返答に劉備は何とか返そうとしたが、諸葛亮が耳打ちするとそれ以上は何も言わなくなってしまった

「で、何じゃ？」

「重要なのはこの連合を取りまとめ、仕切れる人物を決める事ですわ！！」

それを袁紹がそれを言った瞬間、皆は絶句し、流れでそのまま連合の総大将は袁紹に決まった

そして解散となった自分の陣営に向かう道中……

「……悪かったな、桂花を疑って、俺もまさかあそこまで非常識にも程があるなんて思ってたからさ……」

「……いえ、分かっていただければいいです……あ、一刀様？」

俺が不意に桂花の頭を撫でると最初は驚いたようだが、だんだんと気持ちよさそうな顔をした

「まあ、なんとというか……今まで頑張ったな桂花」

たったあれだけの事で自らを誇張し過ぎる袁紹に振り回されたと思つと、俺は「ヶ月も」アレ」に耐えた桂花を賞賛しながら自分の軍へと戻っていった

気になる存在

――連合、北郷軍陣地――

side：一刀

連合が組まれて初の軍議が終わった後、自軍の陣に戻った俺と桂花は直ぐに主要な将を呼び、身内だけで軍議を開いていた

「……と言っわけで、最初の？水関攻略の軍は劉備が受け持つことになった」

「なんだとっ！じゃあ、我が軍は今回、後方支援と言っことか？」

今、この場に集まっているのは俺と桂花に春蘭と秋蘭だ。その中の一人、我が軍の猛将春蘭は当然のごとく、今回は前線ではないので反論してきた

……最近、大きな争いもなく力を持て余した春蘭は自信の闘争本能が遂に生かされる舞台があるのにそれを發揮出来ないのは有り得ないらしい……ちなみに季衣と流琉は俺の護衛で凧は軍を指揮している

「まあ落ち着け、姉者。まだ一刀は劉備軍の事しか言っておらんだらう？……実際はどうなのだ、一刀？」

「ぐ……しゅうらあん」

いつものようにせつかちな春蘭を秋蘭が少し黙らせた後、涙目になっている春蘭を無視、変わりに質問をしてくる

(たまに思うが、秋蘭が本当に春蘭を愛しているのか疑わしくなることがあるけど……)

「いや、それ以外は特に決まってるよ。そのまま劉備達が攻める。以上で軍議はほぼ終わったよ……後は袁紹が一応、この連合の指揮官になったことかな？」

そこまで伝えると秋蘭は黙り何かを考えた後、桂花に耳打ちをし、桂花は「分かったわ」と言うと地図に目を通し、策を練り始め、秋蘭は確認するかのように桂花に聞いてきた

「つまり、袁紹の独断でこの連合全体の動きが決まってしまうわけだな？」

「そうよ、元々あの女に作戦という言葉は存在しないのよ。あるのは自分が目立つというつまらない欲望だけね。まあその分、苦労せずに出し抜けるわけだけど」

それから軍議が始まって半刻、主に秋蘭と桂花が互いに意見を述べ、今後の方針のパターンを十数ほど作っている最中に外で兵の指揮をしていた凧が天幕を捲り入ってきた

「軍議中、申しわけありませんが、劉備達が一刀様に話したいと言つて来ておりますが……」

「何のようかな？……まあ待たせるのも悪いし、案内してくれ凧。秋蘭、桂花後は任せたぞ」

「はい、分かりました」

劉備達に会うために天幕を出て行くとするとき、何故か桂花が唸
つてたが、まあ気にしないでおくことにしよう

――北郷軍、陣営前――

「お久しぶりです。北郷さん」

「久しぶりなのだ。お兄ちゃん」

「あわわ、お久しぶりでひゅ……／＼／」

久しぶりに会った劉備達は前と全く変わらない笑顔を浮かべて挨拶
をしてきた。約一名は嘔んでしまったが……

「ああ、久しぶりだな……あれ、愛紗はどうした？」

「愛紗なら鈴々達の軍で兵の管理をやってるのだ」

「そうか、まあ確かにあれだけ軍が大きくなったら統率力を持った
將軍は必要だよな」

「でも、愛紗ちゃんたら、自分も行くって、最初は聞き分けてくれ
なかつたんですよ？」

(……以外だな、愛紗ならその辺の公私を使い分けれる奴と思っていたが……俺とまた手合わせでもしたかったのかな?)

話はそのまま、お互いの近辺情報などから世間話をしていた……話の五割は劉備の愚痴が飛んでいたが……結局、半刻ぐらい過ぎた頃、長話をし過ぎたなと思いつつ、俺は本題があるのかないのかを聞いてみた

「それより劉備。本当にただ世間話をするためだけに来たのか?」

俺がそんな事を言うと、先程までの和やかな空気が一変して、僅かな緊急間のある空気に変わり、少しの間、沈黙が続き、それを最初に破ったのは意外にも鳳統だった

「え、えつと実は北郷さんにお問い合わせが……」

相変わらず人見知りが激しいのか未だに俺に打ち解けてくれない鳳統がオドオドしながら俺に嘆願してきた

「……お願いか……何をすればいい?」

「はい、私達には?水関の将、華雄をおびき出す策を用意してますが、その策が成功しても私達には追撃を行う兵力が恐らく足りません。ですからその時に変わりに追撃をしてもらえませんか?」

先程とは違い、鳳統の瞳には強い意志が宿っておりオドオドした少し前の姿はどこにも見当たらなかった

「……もしそんな事したら、俺達が逆に?水関を攻略したと思われるがいいのか?」

俺がそこまで言つと劉備が鳳統の隣に立ち、珍しく真剣な表情で言った

「北郷さん、私達は別に名を上げる目的でこの連合に参加したわけじゃないんです。ただ今も都の人達が苦しんでいる状況を少しでも早く打開し、救って上げたいんだけなんです」

普通は名を上げる目的のためにこの連合に参加してる者が殆どだが、目の前の劉備達はそれを放棄してまで都の民を救おうという強い意志が三人から確認できた

「……駄目ですか？」

端から見れば甘すぎる。それは以前に共闘したときと何も変わっていない……だが不思議と劉備には協力してもいいかという気持ちを少なからず湧かせる力を持っているようだ

(人徳の王、劉備か……昔の人はよく言ったもんだな……)

「ふ……なら、利用されて貰おうか」

「北郷さん……はい、宜しく願います」

本来の目的が終わって安心したのか、劉備と張飛はすぐに笑顔になり、鳳統はまた弱気モードになってしまった

「やれやれ、朱里に「あの三人が上手く交渉出来るか見てきて下さい」と頼まれて来て見たら、私は必要なかつたようですね」

そんな劉備達の様子を見ていたらどこかで聞いた事のある声のする方向を見ると懐かしい奴が俺の陣営に来ていた

「あれ、もしかして星……なのか？」

「ふふっ、久し振りですな……一刀」

――同時刻、孫策の陣営――

side：孫策

「冥琳、帰ったわよ!!」

「雪蓮！もつと王らしく……はあ、それで軍議はどうだったか？」

その途中、冥琳がなにか呟いたような気がしたけど、まあ気にしない

「どうもこうも、やっぱりあの袁術ちゃんの親族ってだけあって袁紹とか言う奴もなかなかの無能だったわね」

「そんな事を聞いてるんじゃない。最も他に言うことがあるだろう？」

「うん、そうね……袁術ちゃんがムカついたから後ろからたたきつてやるのかな思ったこととか？」

「何時ものことだろう……はあくもついい雪蓮、？水関は誰が最初に攻めるんだ？」

真琳から埒があかないと言った感じの諦めの声の後、直接的な言い方に変わった

（迷惑かな？って思ってもついかからかいたくなっちゃうのよね）私（つて）

「劉備とかいう、最近出て来た義勇軍の集まりみたいな軍よ」

「劉備軍か……新参者とか言っただけの諸侯みたいに油断は出来んと思っぞ？」

「……そうね、でもその話なら一番はあの北郷とかいう奴が気をつけておいた方がいいかもね」

「そうだな、北郷軍は旗揚げ当初から負け無しの上に名実ともに確実に力をつけているからな」

「そういう意味じゃないのよ。私が感じたのはあの北郷は母様と同じ質の氣を感じたのよ」

「！？……それは本当なのか？」

「ええ、間違いないわ、ほんの少しだったけど袁紹にぶつけたから

ね……あの氣を……」

(私が唯一、尊敬できた母様と同じ氣を持つ、北郷とはいつか殺り合ってみたいわね)

――半刻程前、劉備軍陣営――

side: 愛紗

現在私は桃香様に命じられ、戦の準備の為に兵の編成を朱里や先日、我が軍に加わった星とともにやり、つい先程終わったのだが……

「はあく久し振りに一刀殿と会え……は！？いかんいかん／＼な、何を考えている私は！？」

「……愛紗さん？」

「な、何だ朱里？」

「いくら終わったからと言って、駄目ですからね。愛紗さんは実質、我が軍の一番の将なんですから」

さつきから私は朱里に止められつづけ、行かせてもらえない……

(な、なぜそんな冷たい目で私を見るのだ……朱里よ)

「ち、違う！わ、私はただ単に桃香様達がうまく行くかどうか心配でだな……別に一刀殿と仕合したいなあ……とかそう言うことを行ってるんじゃない！」

(そうだ、別に私は一刀殿に会いに行くのが目的ではなく、雛里が提案した策を円滑に進めるための交渉の手伝いに行くだけだ)

と、そんな風に思っていると、毎回事あるごとに私にちよっかいを出してくる星がにやついた顔をして話してきた

「ふふ……愛紗、それではまるで北郷殿に会いに行きたいと行っているようなものではないか」

「な、だから違うと言っておろう／＼！？」

だが、私の反論など耳に入っていないかのように星は無視をし、朱里に話しかけていた

「朱里、このままで拉致があきそうにもないからな、変わりに私が様子を見てこよう」

「な！？」

少し驚いたが、どうせ私ですら何回も止められてるから無理だ……
と思っていたら朱里が予想外の返答をしてきた

「……そうですね。はい、分かりました。お任せします」

簡単に星には許可を出し、星は了解といい、私は当然のごとく納得出来なくて朱里に反論した

「な、何故、私が駄目で星はいいのだ。朱里！星は私と同じぐらいの力量をもっておるだろう？なら変わりに星では兵の指揮を任せられるのではないか？」

「それは無茶を言うな愛紗よ。私はこの軍に来たばかりの新参者でな、緊急時に兵達は私の言うことよりお主の言うことをより聞くはずだ」

「そうですね。星さんの言うとおりですよ。諦めて下さい。愛紗さん！」

「し、しかし……」

だが、星はそんな私の言葉を待たず、言うだけ言って、そのまま我が陣地を出て、一刀殿の所へ行ってしまった……

旧友（前書き）

なんだか、星らしくない気がしますますがご了承ください（・・・・・）

旧友

――北郷軍陣地――

side：一刀

「……あれから一年ぐらい過ぎたが相変わらず元気そうだなによりだ」

「ふ、そういう星こそ変わらないな……」

「ねえねえ、星ちゃんはどうして北郷さんの事を知ってるの？」

「いや、なに昔いろいろ有りましたな……」

俺の目の前にいるこいつは一年以上前にお互いの道を行くために別れたかつての戦友、趙子龍こと星に再会したが、当然そんな過去など劉備達を知るはずもなく、馴れ初めとかいろいろと星に聞いていたが……

「じゃあ、星とお兄ちゃんはどんな関係なのだ？」

この張飛の一言で星の目が一瞬、鋭く光ったような気がした……不安な予感しかしないのは気のせいだろうか

「いや、別にそんな大した「恋人同士だ！」……は？」

「へ、今なんて言ったのだ？」

「あはは……なんかものすごいこと聞いちゃった気がしたけど？」

俺が呆然と立ち尽くしている間に星はますます調子に乗り、俺の方を一瞬振り向き、そして楽しそうな顔をして……ニヤリと笑った……

「何度も言わすな……恋人同士と言っておるだろう／＼」

「えーーーーー!?」

「あわーーーー／＼!!!?」

「やっぱりそうなのか？」

星のイタズラの結果、劉備と鳳統は叫び、張飛はなんか最初から確信していたみたいだが……こんな状況で俺は頭は冷静に働いて目の前の暴走している奴らを止めなければいけない筈だけど、何故か体が全く動かない
かろうじて喋れるくらいだ……その間にも星の暴走は止まることを知らず……

「い、いや、違っただろ星!？」

「そ、そうですよね……冗談に……」

そして星は俺をあざ笑うかのようにさらなる爆弾を投下した

「ああ、そうでしたな……正確には元恋人同士の関係……一年以上前に「もうお前には飽きたから」と言われ捨てられましたな……うう……」

元々、人をからかうのが好きな星は俺達の関係を恋人など俺が星を飽きたから捨てられたなど、白々しい演技をばらまき続け、星のシナリオ通りなのか劉備と張飛があっさり信じ、俺を攻め始めた鳳統は顔を真っ赤にあわわ、あわわと言いながら俯いていた……

「最低だよ、北郷さん……」

「お兄ちゃん！星を捨てるなんて鬼なのだ！鈴々がやっつけてやるのだ！！」

「ちょっと待て、お前ら簡単に信じすぎだ！どう見たって星は演技をしてるだろうが！！」

二人は俺を汚いゴミムシを視るような冷たい目で攻め始めた

「嘘だよ。だって星ちゃん、あんなに悲しそうな顔で泣いてるんだよ」

「星、元気を出すのだあ」

「……ふう……う……くく……」

俺の必死の身の潔白の証明は劉備達の脳内フィルターに通すと俺の方が白々しく聞こえるようだ……そして劉備達いわく悲しんでいる星は、完全に笑いを堪えるの必死でうずくまっている……

「一刀——！！ 大丈夫かああ……て……なんだこの状況は？」

春蘭がこの場に来てしまったことによってもう最悪の結末を迎える予感しかない……

「あ、夏侯惇さん……聞いて下さい。北郷さんが……」

「劉備！待てそれ以上は……」

「まあ落ち着け、一刀。その話は私達にも聞かせても良いじゃないか」

劉備が余計なことを春蘭に吹き込もうとしているのを止めようと試みたが、後ろからガシツと言う音ともに秋蘭に肩を掴まれていた。その間にも劉備が星によって作られた過去という名の嘘を春蘭や秋蘭にも広まっていた。

「……………という訳なんです。ひどいと思いませんか！？見て下さい、あんなに悲しそうに泣いてる星ちゃんを……」

「……く……う……く……」

俺から見たら完全に笑いを堪えている星を見た春蘭からは怒りの才一ラが見え始め、秋蘭は……俺の方を見て困ったような表情で「諦めろ」と目で言った。

「一刀おおっ！、そこに直れー！！」

（はは……今回は死んだかもな……星……後で覚えてろよ）

――二刻後――

「うう、今度からは一刀を真つ先に信じるから、もう許してくれ」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

あれからしばらくの間、春蘭の一方的なラツシュを喰らったり、劉備からは地味に心に刺さる罵声を浴びせられたりとさんざんな目にあった

それからしばらくした後、ようやく元凶の星が笑いを堪えられなくなり笑ってしまったことにより、皆は啞然としてそれをきっかけに俺は憤怒し、勢いのままに春蘭や劉備に一括したことにより、ようやく立場は逆転、星をふくめて正座を無理やり強要させ、一刻以上説教を続け現在に至る

「まあいい、反省したならもうお前等は許してやるが……劉備！」

「はひっ!？」

「暫く星を借りるが良いよなあ？」

「(コクコクコクコクコクコクコク……)」

よっぽど、武人ではない劉備には春蘭に”いつも”している説教が必要以上に効いたのか、完全に怯えており、返事もはや壊れた機械のように何度も首を振るのみだった。これ以上は自分の壊れた主

を見ていられなくなったのか、劉備と張飛の手を取り……

「あわわ、ご迷惑をお掛けしました……失礼します」

俺に一礼をし、自分の陣に戻ろうとしていた……星を一切、見ずに

「ま、待て雛里！私を置いていくのか！？」

自分を置いておこうとする鳳統に星が慌てて聞くと、ゆっくりと鳳統は振り返り……

「……反省シヤガレですう」

武人の発する氣とはまた別の恐ろしい何かを感じさせながら、帰って行った……

「……さて春蘭、秋蘭、俺はこいつと話があるからちょっと二人つきりにさせてもらえないかな？」

「うむ、了解した……ただあまり遅くなるなよ？」

「分かってるって、さあ星……こっちに行こうか」

「わ、悪かったと言っておるだろう一刀！？」

騒ぎ続ける星をそのまま肩で担ぎ上げ、俺は人気のない場所まで連れ去った

自分の陣から少し離れた場所に星を降ろすと、星は警戒してるかのようによろこび退いて距離を取った

「ああ、そのなんだ。別に説教とかするつもりとかないから安心しろよ」

「……ふう〜やれやれ冗談ならもう少し面白くして欲しいものだな」
一応、緊張していたのだろう。俺が何もしないとさっきまでの警戒態勢を解いてリラククスし始めた

「全く、久し振りの再開だったのにどうしてまたあんな事をしたんだ？」

「なに、久し振りに一刀に会ったら、桃香様が華琳と全く同じ質問をするものでな、ついやってしまった所存だ」

星はフツツと笑いながら「許してくれ」と言ってきた。まるで俺が許してくれのを確信しているみたいに

……確かに前からいろいろ悪戯を仕掛けられたが相変わらず憎めない奴だと思い、結局は許してしまうばかりだったからな

(まあ一回だけ本気でブチギレたことがあるけど……)

「そういえば、風や凜はどうしてる？お前と一緒に劉備の所にいるのか？」

「いえ、あの二人とは半年ぐらい前に別れてな。風いわく「まだまだ旅を続けたいのですよ」とか言っていたのでおそらくまだ旅の途中なのだろう」

「そつか……お前に久し振りに会ったからあの二人にも会いたかったんだけどな」

昔のことを少し思い出し、感傷に耽って暫くこの荒野の乾いた風を感じている最中、星は思い出したかのように……

「そういえば前から気になっていたのだが、なぜ一刀。お主が軍を率いている？華琳はまだ病が直っておらぬのか？」

……華琳の事を聞いてきた

「ああ、そういえばお前は知らなかったよな……華琳は亡くなったよ……一年前のあの日の後にすぐにな……」

「！？……そ、そつか……すまなかった一刀、無神経な事を聞いてしまっ……」

「いや、華琳の情報は出来るだけ外部に漏らさないようにしていたからな。知らないのも無理はないさ」

やはりそれだけでは納得しなかった星は更に言葉を発した

「しかし、一刀、お主は華琳との……」

「頼む星、今はそれ以上は言わないでくれ……」

「……分かった……」

だが、それ以上の事は俺は許さず、それからも会話は続くことはなく、お互いに無言のまま乾いた風をただ浴び、あの日ことを思い出して……いつまでも女々しく己を戒める自分に嫌気をさしながら……

――一刻後、北郷軍陣地――

side：秋蘭

一刀が趙雲を連れて暫くだったが一向に戻ってくる気配がない……嫌な予感余りしなから恐らく無事だと思いが……そう思っている誰かが我が陣営に近付いてきた

「……何者だ？」

「ああ、ええと、私は馬超というんだけど、我が主の馬騰から北郷へ手紙を渡してくれって頼まれたから来たんだけど今、大丈夫か

「？」

(?!……あの馬騰から一刀への手紙だと……まさか畏なのか？……いや、今は連合を組んでいるんだそれは有り得ないな)

「それはわざわざすまん馬超殿、今、ウチの一刀はここを留守にして今はいない」

「あちゃ〜来る時間、間違えたな……じゃあ……」

そこまで馬超が言いかけると後ろから足音がするので振り向くと一刀と趙雲が二人で戻ってきた

「……いや、どうやら戻ってきたようだ」

「遅くなってすまなかったな秋蘭……あれ、お前は確か馬超だった？ウチに何か用か？」

「……ああ良かった。このまま待たなきゃいけないと思ったよ……えっとお前が北郷だよな？」

「ああ、そうだけど、俺に何の用だ？」

「なんでも馬騰殿からの手紙を一刀宛てに届けに来たそうだ」

私がそこまで言うと、馬超は持ってきた手紙を一刀に渡し、受け取った本人はそのまま受け取りさっそくこの場で手紙を読見始めた

「馬騰さんからか……！？これは……星、お前も読んで見る」

「私も見てもいいのか？一刀」

「いいから、読めば分かるさ」

一刀が手紙に目を通した後、少し固い顔をして、すぐに趙雲へと手紙を渡し、読んで見るように促し、それを読んだ趙雲の表情も固い表情に変わっていく……

「どう思うっ？」

「そうですね……まああの馬騰殿の言うことだ。恐らく真実だとは思いますが……」

「……星、お前はもう戻れ。劉備達も心配しているはずだ。それにこのことは劉備達には言うなよ？」

「……分かったが一刀。お主、独りで抱え込むつもりじゃないだろうな？」

趙雲の鋭い眼光が一刀を捕らえる……

「もちろん大丈夫だ。時が来たらお前にもしっかり働いて貰うさ」

……だが一刀は趙雲の眼光を居に介さず、何時も通りの顔で言った

「！……ふ、そうかなら私はその時まで酒でも飲んで待っていますかな」

一瞬、趙雲は面食らった顔をしたものの、直ぐ元に戻り、軽く微笑んだ後、冗談を言いながら私達の元を去っていった。そして一刀は

苦笑した後、馬超の方を向き、手紙の事を聞き始めた

「馬超、お前はここの手紙を読んだのか？」

「いや、母様から「お前は絶対に読むな！」と言われたからな。まあなんにせよ用件はそれだけだからな、そろそろ戻らせて貰うぜ」

馬超はそれだけ伝えると、自分の陣に戻るべく、趙雲同様この場を去った

「そうか、流石は馬騰さんだな。俺の考え方を良く分かっているな……秋蘭、すぐに皆を集める。軍議を開く」

「それは良いが、急にどうした？」

私が一刀に質問すると、一刀は「馬騰さんからの手紙で確信した事がある」とだけ答えて軍議を行っていた天幕に入っていった

(……時々、本当に一刀が何を考えているか分からなくて不安になる……だがやはり私にはもう一刀しか……)

「……とりあえず、姉者や尻達を集めるか」

そうして個々の天幕に皆に召集をかけ始めた

董卓軍の内情

――戦場、？水関付近――

side：秋蘭

昨日の軍議から一夜明けた今日、私達は劉備達の策を実行するため、水関近くの荒野で陣を構え、合図を待っていた頃、不意に姉者が質問してきた

「なあ秋蘭、一刀は一体どうしたのだ？何だかいつものあいつじゃなかったような気がするんだが……」

姉者が疑問に思っている通り、昨日の軍議が始まった頃から今にいたるまで一刀の表情はずっと張り詰めているような、妙な緊張感を出していた

「……すまん姉者。私もよく分からんだ……あそこまで思い詰めた顔をした一刀は私も見たことないのでな」

姉者は一言「そうか」といい、今行われている劉備軍と華雄軍の戦場に目を向けようとした時にそばで控えていた凧が話に入ってきた

「あの秋蘭様、私なら一度だけ今の一刀様の顔を見たことがあります」

「！……いつ見たんだ？」

「私が初めて一刀様に出会った時です……あの頃の私は親友を失っ

た悲しみに復讐心に捕らわれていました……ですが、そんな私を一刀様は見捨てず、自分と同じように堕ちてはいけなさと仰った時の顔に似ていましたので……」

（！……自分と同じように堕ちてはいけない？……どういう事だ、一刀は私達に隠していることを凧に言ったのか？）

……私は悔しかった……こんな事を言ったら凧に悪いと思うが、私達姉妹は凧の倍以上の時間、一刀のそばに居た……それなのにこの軍に入って日も浅い、凧には打ち明けた事が何よりも悔しかった……だが、今は待機中なので余り時間も無い、こんな気持ちは自分勝手すぎる……そう思い、この気持ちは押し殺した

「……凧、良ければ一刀がその時、なんて言っただか教えてくれないか？」

先程より少しは冷静になった頭で、凧に質問すると凧は思い出すかのように話し始めた

「一刀様が私に教えて下さったことは「俺は自らの手で守るべき大切な人を殺してしまった……だから復讐に狂い、堕ちてしまいそうなお前を放っておけない」とだけ仰いました」

（己の手で大切な人を殺してしまったと？……まさか……華琳様が亡くなったのは……一刀が……？）

「か、一刀はそれ以外に何か言っただか！？」

「いえ、それ以上はもう話しが繋がらなくて……すみません。」

風は申し訳なさそうに謝ると同時に戦場は急に慌ただしくなり始めた

「どつやら話はここまでのようだ」

「そうですね……」

話しに耽っている間に戦局は劉備軍の将、関羽が華雄を打ち取った事により、華雄軍は敗走。？水関に逃げ始めたことにより、予定通り、撤退する劉備軍と入れ替わるように敵軍を殲滅するため突撃を開始した

「皆の者、敗走する華雄軍を関に入れる前に一気に決着を付けるぞ
！！ 全軍、突撃——！！」

この軍を一刀から任された姉者の一喝により、突撃が開始されたが
……

「姉者、一刀に命じられたことを忘れるなよ？」

「ああ、わかっている！！」

不意に現れた私達に華雄軍は大将の負傷もあつたせい、敵軍全体に動揺が一気に広まり、抵抗の試みようとしていたが、怒涛の勢いで攻める我が軍に華雄軍はなすすべなく崩壊した

これによりシ水関は当初の予定よりも簡単に墜とすことに成功した

――北郷軍、陣地――

「春蘭、秋蘭、凧、大丈夫か？」

「うむ、当然だ！」

「ふ、あの程度の戦で心配はいらんよ」

「はい、こちらに被害は出ることなく皆無事です」

華雄軍への奇襲が終わり、自分の陣へと戻ってきた私達を一刀は心配そうな顔をしながら迎えてくれた

「……一刀、少し心配のし過ぎではないか？あそこまで保険を掛けますとも私達なら……それでも不安なのか？」

「あはは、そうだな……ごめん……それより後ろで騒いでいる奴が華雄か？」

「ああ、お前に頼まれたからわざわざ生け捕りにしてきてやったぞ！」

一刀は苦笑いを浮かべつつ、未だに後ろで「離せ！」「や」「一思いに殺せ！」など騒いでいる華雄に目を向け、一刀は警戒せず近づいていき……

「く……いい加減に……」

「お前は董卓軍の将、華雄で間違いないな？」

華雄の頭を掴み、動きを止めさせてから質問した

「っ……ああ、そうだ！！……何故、生け捕りにした！？こんな事をせずつとも戦場で殺せば良かろう！！」

恐らく華雄という奴は生粋の武人で「我が墓場は戦場だ！」という部類の人間なのだろう

（突進する様子から見て姉者とはほぼ同じ類か……しかし、あれだけの裂傷を腹に持っているのによくまあこれだけ騒げるものだな……）

「いや、董卓軍の将に聞きたいことがあってな。あんまり時間もなしし率直に聞くが、お前や呂布達が慕う董卓は本物か？」

「な！！」

「……？」

「どういう意味だ、一刀？」

一刀は華雄に対してよく分からない質問をしたが、どうやら華雄には思い当たる節があるようで先程よりは抵抗の意志が減り、逆に疑いの色が強まっていた

「……貴様、何故それを……どこでそれを知ったんだ!？」

「……質問に答える。今の董卓は本物か偽物か……どっちだ？」

「く……偽物だ……」

一刀の二度目の問いに華雄はようやく観念したのか落ち着き、苦い顔をしながら呟くように答えた

「やっぱりそうか……じゃあついでにもう一つ聞くがその偽物は名前は”許子遠”という名じゃないか？」

「!?!?……貴様……一体どこまで我らの情報を……」

「まあいろいろとな……だがあいつがか……なら、どうして主じゃない子遠に従ってるんだ？」

「……それは、私達は董卓様を人質に捕られて、ある人物を連れてくれば解放してやると命令された」

今までの話から恐らく一刀はその許子遠という人物をある程度は知っているからそのような質問が出来るのだろう

「それに元々あいつはどうやったか知らんが、何進に相当気に入られていてな、私達がまだ都である程度の自由がきく頃から、いつの間にか何進が連れてきて、それ以降は何進のそばに控えていた。あいつの最初の印象は物静で武官というより文官みたいな奴だったが……」

「………続きはどうした？」

そこで一旦、言葉を区切ると華雄は辛そうな顔をしたが、一刀はそれを無視し、続きを話すように促した

「……靈帝が亡くなり、何進が殺されてからは今まで静かだったあいつが手のひらを返すように性格が一変し、自分に逆らう都の官達を片っ端から殺しまくり、あつという間に朝廷での実権を握ってしまった」

「そして、おまえ達は反抗する前に董卓を人質にされていたわけか……」

そこまで華雄が言うと今度は逆に一刀が質問された

「一つだけ聞いてもいいか？」

「何だ？」

「……貴様があの北郷一刀なのか？」

「確かに俺は北郷一刀だが……何故それを今更聞くんだ？」

流石の一刀も全ては知らないようで未だに縄で縛られている華雄に聞き返した

「……単純な理由だ。許子遠に私達の主、董卓様が人質され、「助けたいならこの連合に参加している北郷一刀と曹孟徳という二人を生け捕りにし、私の前に連れてこい」と命令されたのでな」

だが、続く華雄の説明で予想もしなかった名前が出てきた……曹孟

徳、私達の元主の名前が出されたことで私達姉妹は驚愕したが、一
刀は動じておらず、寧ろ納得している気もした……

「そうか……ならば華雄、俺の軍に降れ、そして協力しろ。そして
ら董卓を救ってやるよ」

華雄の返答に軽く返事をし、少し黙り突然、何かを思いついた顔を
すると皆を驚かせる提案してきた

「……な、何！？いきなりどうして貴様が董卓様を助けることにな
っているんだ！！それに貴様の軍に降れとはなんだ！？」

「一刀。それは確かに華雄の言うとおりだ。何故いきなり……」

「秋蘭、今は何も言わないでくれ……後でワケをちゃんと話すから」

「むう……その言葉、忘れるなよ？」

私が質問すると一刀は私を突き放すように言葉で制した……後半は
耳元で囁かれたが……

「おい、無視をするな！！ どういう意味だと聞いている！！」

「……子遠にとっては北郷一刀という人間は最も憎い存在……つま
り復讐の対象だ。その子遠がこの戦争の原因を生み出したなら少な
からず、俺にも原因があるからな」

「……ならどうして、敗將の私に協力を求める！？こんな自分の力
に過信していた私を……」

「それは簡単な理由さ。都の城に入るには当事者が必要だろ？ それにそんなお前の力でも信じてついてきてくれた部下にその言い方は失礼なんじゃないか？」

一刀が華雄に己の力を信じるように促し、華雄は黙ったままだったが、しばらくした後、少し前までの脆弱な目はなく、その目には力が宿っているように感じた

「……お前は本当に董卓様を救い出せるのか？」

「ああ、必ず救ってみせるさ」

「………いいだろう、お前に我が力を捧げてやる………ただし必ず董卓様を救い出せ！！」

「わかってるさ………よし、じゃあまずは怪我を直して貰わないとな………尻、縄を解いて軍医のところまで連れて行ってやれ」

「はい………それが一刀様のご命令とあらば」

いつものように天幕の外で見張りをしていた尻が一刀に呼ばれ、多少警戒しながらも華雄を軍医のところまで連れて行った後……

「………さてこの場には私と姉者と一刀だけしかいなかった………約束通り話してもらおうか、一刀？」

「………何を話すのだ？」

「姉者には話していなかったからな」

当然、つい先ほどの約束など知らない姉者は意味が分からないように疑問に思っているようにしばらく説明した後、「分かった」とだけいってその場に座った

「じゃあ秋蘭、まずは何から聞きたい？」

「それなら最初はお前と許子遠とかいう奴と……華琳様の関係を教えてくれないか？」

一刀は私の言葉を予想通りという顔をしており、本人は分かっていたのだろう……だがその顔も一瞬で消えていた

「あいつが今、関わっているから話してもいいが、その代わりにこの話を聞いた瞬間から、必ず俺の命令に従うと誓うか？」

その瞬間、一気に天幕の中の空気が張り詰めた……それは随分と久し振りに一刀の覇気を受けたからだった

(二)、これは一刀の覇気……この話はそれだけ私達に覚悟が必要ということか？)

「……一刀……何故、誓う必要があるのだ……そんなに覚悟がいるのか？」

「……そうだな、確かに何も説明していない状態で子遠の事を語っても仕方ないよな。なら前提から話そう……それで決めてくれ」

「……前提？」

「ああ、これを聞いて冷静でいられたら話してやるよ」

「……ええい、さつさと話せ!!」

この居づらい空気をかき消すかのように姉者は自分を奮い立たし、
一刀はそれを受けようやく、話し始めた

「……秋蘭、華琳が亡くなった原因は知ってるよな？」

「ああ、病死だった筈だが……」

「そうだ。じゃあその時の華琳の体の状態を覚えているか？」

私はこの質問には正直あまり答えたくなかった……忘れて訳ではないが、それでも大切な主君が亡くなった状況をあまり思い出したくない……

「……むう、確か全身に打撲と他に幾つかの裂傷が見られたが、何か……!!……」

「一刀!!!これ以上その質問を続けるな、いったい「姉者、少し黙ってくれ!」……秋蘭?」

声を荒げて一刀に詰め寄る姉者を私も同様に声を荒げて遮り、一刀に問いかけた

「一刀……まさかとは思うが……」

「流石だな秋蘭。気付いたか……その通りだよ。直接的には無いにしろ華琳を死に至らしめたあの傷を負わせたのは……今から話す許子遠の仕業だ」

憎しみの連鎖

――北郷軍、陣営――

side：一刀

「華琳を死に至らしめたあの傷を負わせたのは、今から話す許子遠が関係している」

それはこの話の結論であり、前提とも取れる事を二人に伝えた途端、相当強烈な怒気が放たれ、そしてそのまま天幕を出ようとする春蘭を止めたが……

「待て、春蘭。どこに行くつもりだ？」

「……（バシイ！）許子遠とか言うやつがいるところに決まっておろうが！！」

春蘭を止めるために肩を掴んだ手を怒声とともに弾かれた

「……お前が子遠のところに行つてどうするつもりだ……殺すのか？ それとも捕らえて罪を償わせるのか？」

「そんなもの聞かんでも、分かつておろう！！華琳様にあのような傷を負わせた事を後悔させてやる！！」

「今の状態で都に突っ込んでいけばお前諸共、全滅する事ぐらい夏侯將軍なら分かるだろ！？」

もう一度、春蘭の肩を掴み、今度は無理やり俺の方に向かいあわせになるようにして説得したら少し落ち着いたようだが、それでもまだ渋っている

「……だが、このままでは怒りが収まりきれん……だったら一刀、私ひとりで行く……それなら「驕るなあっ！」ぐはあっ!?!……か、か……ずと（ボタン……）」

俺は一人で無謀な復讐を試みようとする春蘭の腹部に拳をいれ、気絶させ静かになった後、小さな呻き声が秋蘭の方から聞こえるので振り向き、俺は驚愕した

「秋蘭、何をやってるんだ!?!」

「ふ、なる程な……これはお前が話したからないわけだ……華琳様やお前は私達がこういう行動を起こすのを予想していたのだろう？だから私達には伝えぬと……」

目の前の秋蘭は顔中に大量の汗を掻きながら、己の右手を護身用に持っていた短刀で刺していた

「ああ、確かにお前の言う通りだけど、そんなことよりも早く手当てをしないと二度と弓が持てなくなるぞ!どうしてこんな馬鹿な真似を……?」

俺は取りあえず近くに置いてあった布切れを秋蘭の手にキツく縛り、衛生兵のいる場所まで連れて行こうとしたがこのまま気絶した春蘭を置いておくことも出来ず、誰かを呼ぼうとしたとき、不意に天幕が捲れた

「まったく、五月蠅いわね！戦の前くらいしず……！？つて……秋蘭、その手……どうしたんですか一刀様！！」

「！桂花か……ちょうどいい時に来てくれた。俺は今から秋蘭を衛生兵のところに連れて行くからお前は気絶してる春蘭が目覚ましても俺が戻るまでこの天幕から絶対に出すなよ……いいな？」

「え、そんないきな……！……いえ、でも力では春蘭に適いませんから荒縄とかで縛ってもいいですか？」

「ああ、どんな手を使っても構わない。要は絶対にこの天幕から出さなきゃ取りあえずなんでもいい……じゃあ行くぞ秋蘭？」

「く、すまない……一刀……」

「……（ニヤリ）はい、任せて下さい」

状況が状況なだけに桂花に任せたのは不安が残るが（武官と文官的な意味で）秋蘭には話さなければいけない事があるので、秋蘭を連れて天幕を出た

――半刻後――

一応、手当てが済んだ後、秋蘭と話の続きをするために俺の天幕へと戻ったが、やはり秋蘭の握力は相当低下しているようで、しばらくの間はとても弓を持てる状態じゃなかった……

「すまんな一刀、後先考えずに……だがこうでもしないと姉者みたいに私も一人でも乗り込んでしまいそうだったからな……」

「……そっか、いや二人のそういう気持ちが出来ない訳じゃない……むしろ共感出来るぐらいだ」

そこで会話は途切れ、しばらくして秋蘭はまた同じ質問をしてきた

「一刀……お前と華琳様は許子遠とは知り合いのようだが、どんな……関係なんだ？」

「……秋蘭、今のお前になら話してもいいがこれに限らず、自分傷つけるような真似は二度とするなよ？」

「うむ、もちろんだ」

自分の右手を軽く振りながら自嘲した笑みを浮かべていた

（まあ、華琳の事を話して、強引だが自分を自制できたから大丈夫だよな……なら……）

「そうだな……なら、俺と華琳が子遠と出会った頃から話そうか……もともと子遠もこの疲弊した大陸を救おうとする目的を持っていったんだ。そしてやり方が華琳と同じ考え方もあってそのせいかな、2

年前以上前の遠征中に子遠にたまたま出会ったんだ。話す内にあつと言う間に意気投合して、真名まで交換するほど華琳も気に入ってな。それからよく会うほど仲が良かったんだよ」

俺が子遠との出会いを話すと、当然秋蘭は不思議そうな顔をしていた

「だが一刀、お前は最初にその子遠が華琳様を傷つけたと言ってたな？……今の話を聞く限り華琳様はそのような人物と衝突はせんとおもうが……」

秋蘭の疑問はもつともだと思ふ。曹孟徳という人物は敵や味方にすら敵しいが一度、心を許した相手には、どんな状況に置いてもいきなり敵対するような関係は築かない

そんな華琳が好意をもった人間から一方的にやられるような状況をつくるとは納得できないという顔を秋蘭はしている

「秋蘭、華琳が居るときに話したよな？ この戦を仕掛けた子遠が最も憎む存在は俺だとそしてその事が恐らくこの戦を招いていると……」

「ああ、確かにお前はそんな事を……だが、それならなぜ華琳様ではなくお前を一番に憎む？」

「それは……確かに華琳とは仲が良かったよ。ただ子遠は敵には容赦ない非情な一面を持っていた。その当時の俺は秋蘭も知ってると思うけど、戦には不向きな甘過ぎる性格だったよな。そこで反りが合わなくて何度も子遠と反発ばかりしていたんだよ」

「つまりそのことが原因だと言うことか？」

「いや、違う……その俺達の喧嘩を唯一、止めてくれた人物が居た

「んだよ……替蓮って奴がな」

「一刀……その聞き慣れない名前の奴が一年前に華琳様もしょっちゅうつぶやいていたんが……何者だ？」

「替蓮の事か……ああそうだな。簡単に言つと俺や華琳の大切な人で子遠にも……」

「どうした。一刀？」

「……いや、話を戻すが子遠が今のよう裏から朝廷を操る真似をした理由も見当がついているんだよ」

「（替蓮という奴の事、うまくはぶらかされてしまったな）……一刀、一体、何が起きたんだ？」

ようやく俺に聞けずにいた真実が聞けると思ったのか秋蘭は手の傷の痛みなど気にせず、俺を急かしてきた

「……今から約一年半ぐらい前の事だ。子遠は多くはないが義勇軍を持っていた。それで少しでも大陸を変えようとして尽力していたが、その方法の根本は朝廷を滅ぼすという過激派の考え方のもと行動していたんだ」

「（確かに昔の一刀では反発してしまうな）」

「けど、あいつの才能が幸か不幸かその行動は早すぎたために真つ先に朝廷に狙われたんだよ……子遠という反乱分子を排除するため村一つを犠牲にしてな」

「な!？」

~~~~~回想~~~~~

その日は雲に覆われて月の光などまったく照らさず文字通り、暗闇に覆われた夜だった……

『一刀か……今更、何しに来た?』

『何だよ冷たいな……別に華琳からの命令でな『優に復讐なんてやらせるな! さつさと止めて二人で帰って来なさい!』ってな』

その当時、華琳は陳留を任されたばかりだったので秋蘭達と一緒に仕事から追われていて、替蓮は用事でその場に居なかった  
その結果、自由に動けるのは俺だけだった

『一刀……お前はこの村を見ても何も感じないのか!?!……あいつらは私の同志のみならず、罪のない村人まで殺したんだぞ!……その人達の無念はどうなる!?!』

俺の言葉に激怒した優は勢いそのまま俺に掴みかかり、近くにあった木に押さえつけ訴えた……その目には微かに涙を流した後のような

ものが見えた

『……だからといって、俺はお前が一人で朝廷に復讐をしに行くというのが気に食わないね。何が『もう私のことはもう忘れてくれ』だ？……そんな事を書かれた手紙一枚で俺や華琳、慧蓮が納得すると思ってるのか？』

『く……そんなことは……お前等には感謝してる。だからこそ、華琳達や……お前を巻き込みたくなかったんだ……』

敵にはあれほどに非情に接するくせに自分の大切な奴になればなるほど、一転して真名の通り優しさをかなりに出してくる  
一人で何でも背負った挙げ句、独断で無茶することある奴だった

『……優、いつか華琳がこの大陸を統一してくれるさ。だからそう言う方法で腐りきった役人を見返してやれば良いんじゃないか？』

『一刀、それは何時の話だ！？この大陸を一つにするには膨大な時間がかかる……それまでお前は私に待てというのか！？』

より一層、押さえつける力が増し自分でもどうしたらいいのかわかっていない優に俺はただ言葉を続けた

『待つぐらいだったらさ……華琳の所に来ないか？』

『……私が華琳の軍にか？』

『ああ、お前の力あればより早く統一出来る筈だ……だから目先の復讐で自分自信を捨てる事なんて止めてくれないか？』

『一刀……それでも……私は今すぐにも奴らに一矢報わないと気が済まないんだ……』

俺を押さえつけていた優の腕は徐々に力が抜けていき、崩れ落ちるようにその場にへたり込んでしまった……

『へえ、隊長に言われて残党を見つけたら殺せと言われて、もういないと思っただが、まだ結構な上物がいたじゃないか』

不意に聞こえた声のする方を見ると雲の隙間から月明かりによって照らされた村の門の前には二百はいるかと思われる朝廷所属らしき軍が村の入り口を塞いでいた

『……一刀、あいつ等は殺してもいいのか？』

優はその軍を見た途端に、その眼だけで人を殺せるような眼光を放っていた

『っ……駄目だ！優。今のお前にあいつ等を任せられない……俺がやる』

『……なに……！お前はあの構えは……止める！”はめこいつ覇滅向”は馬騰の奴に使用を禁止された技だろ！？』

『……大丈夫だ。馬騰さんからは大切な者を守る時にのみ使用を許されているんだよ……今がその時だろ？』

『……！……一刀、お前は どうして』

優の精神が不安定なこの状況で戦いなんかさせるわけには行かない、

だから俺が一人で倒す……筈だった

優の小さな呟きが聞こえたと同時に不意に何かに突き飛ばされ、すぐ後に浮遊間が体を襲った……

『一刀……お前は何時も私の欲しい言葉を言ってくれる……そんなお前だから……』

優の声が遠ざかって次第に聞こえなくなり、後ろからは激しい水音が聞こえて初めて理解した。俺は優に高さがそこそこはある所から川に突き落とされたと

そして俺を落とした優の顔は俺に微笑んだ気がした……

~~~~~現在~~~~~

「次に目を覚ましたときには、随分と流されていて、打ち身がなかなか酷くて動けなかったが、ちょうどその時に助けてくれたのが星だったんだ」

まあ本当は風が発見して星に運んでもらい、手当ては凜がやってくれたけど秋蘭は星以外の二人のことを知らないし、話さなくてもいいかなと思ひ省いた

「なるほどな。昔、お前が一月ほど行方不明だったのはそう言うことだったのか……だが、お前の説明ではどうして、許子遠がお前を憎むようになったのか分からなかったが……」

「もちろん続きは有るさ。その後、俺が陳留に戻って少し経った後、俺と華琳、春蘭と秋蘭の二つに別れて発生した賊討伐に向かったら？」

「あの時の賊討伐か……一刀、その時なにかあったんだ？」

「あの時、秋蘭達の方には本当に賊が発生したんだが、俺や華琳の方は優からの朝廷への反乱軍に参加しないかというものだったんだよ」

「!!な……どういう事だ一刀!?……華琳様は私達を騙していたというのか!？」

秋蘭は複雑な表情をして俺に迫ってきた……恐らく納得仕切れなかったのだろう

「落ち着け、秋蘭。元より俺や華琳はその時は戦うとは思っていなかった。ただ反乱軍への参加拒否と久しぶりに優の顔を見に行くのが目的だったんだ。だから秋蘭達には「言う必要はない」って華琳は言ってたからな。でもあいつに再会したとき気付いたんだ、もう昔のあいつじゃないと」

~~~~~回想~~~~~

俺達は優が指定した場所に向かう途中、慧蓮が住む村に寄り、華琳がついてくるように言うと、即答で「優さんが復讐に走っているなら私も止めるために行きます」ちなみに同じ村に滞在していた星も慧蓮の護衛として着いてくるといい、華琳もその実力を買った事から了承し、そして優が指定した場所に着いた

『断るとはどついう事だ華琳？』

『言葉通りの意味よ。今のこの時期に朝廷に反旗を翻しても何の得もないわ』

『！……そうか、だったら……もう殺すしかないな』

華琳の拒否を受けた優は一瞬、言葉を溜めて自らの剣を華琳に突きつけた

『！……剣を向けるとは私達はもうあなたの中では敵になったのかしら？』

間一髪、華琳は避けることができ、当たりはしなかったが一気に周りの空気が緊張し、お互いの兵の間には一触即発の雰囲気が出てしまった

『……私達の目的知る味方以外の者は全員敵と同じだ……最も華琳なら私の気持ちを含んで賛同してくれると思うけど』

『……変わったわね。あなた……』

『優さん！復讐なんて止めて下さい』

そんな二人のやり取りに我慢できなくなった慧蓮は止めるよう叫んだ  
只でさえ人同士が争うのを嫌う慧蓮は仲間同士で敵対してしまった  
俺達の中で一番心を痛めている……だから必死で止めようとした……

『慧蓮！今更、お前がなんとを言おうと私は変わらない！！この大陸を救うためにはもう朝廷を潰すしかない！！』

優の叫びと共に後ろに控えていた兵隊が一斉に武器を抜き、臨戦態勢に入った

『優、慧蓮の言うとおりだ！こんな所で俺達が殺し合っても意味がないだろ！？』

『……一刀、もう無駄よ。今の優には力付くで気付かせるしかないわ』

俺を止めた華琳が自軍に合図を送ると此方も臨戦態勢に入り、それを見た優は無言で手を下ろし、それがきっかけ、お互いの兵同士が激しくぶつかり合い、戦が始まった

『……どうして、どうしてこうなるんですか！？私はこんなことに……あ……』

『慧蓮、出来るだけお前の気持ちは尊重してあげたいが今は危険だ。一旦引くぞー！』

お互いの軍がぶつかり合う事に納得はいかず、慧蓮は戦の最中、悲  
痛な叫びを上げるもこれ以上は危険と判断した星が強制的に引かせ  
た……

~~~~~現在~~~~~

「その後、戦は数日続いたが俺たちはもともと軍同士の戦を予想し
ていなかったからな。だんだん劣勢になってしまい華琳までもが自
ら、剣を振るう状況まで追い込まれてしまい……俺が駆けついた頃
には華琳はすでに体中に打撲の後があり、優が華琳を見下ろし、う
ずくまっている華琳を蹴り続けていた……俺はそれをみた瞬間、目
の前が真っ暗になって……」

「一刀……そ、それから先は……どうなった？」

恐る恐ると言った感じで秋蘭が先を聞いてきたが、これ以上は……

「……悪いな、秋蘭。それから先はあまり聞かないでくれ」

「！……そうか、無理に話させたみたいですね」

憎しみの連鎖（後書き）

更新が遅れてしまって申し訳ありません。

勝手ではありますが、しばらくの間は前の話を編集しなおそうと思います。編集が終わり次第、次話を投稿する予定ですm（| |）

m

最強の武人（前書き）

しばらくの間、更新を滞らせてしまつて申し訳ありません）・・・；

一応、改変は完了し、前よりは読みやすくなつたような気がしないでもないような気がします……今後もクオリティを高める為に尽力するので今後も宜しく願ひしますm（）（）m

最強の武人

――虎牢関――

side：一刀

秋蘭に少しだけ昔話をして数日が経った現在、俺達は虎牢関を攻略中だ……その最中、俺と共に本陣にいる桂花が不意に質問してきた

「あの、一刀様。本当に二人だけに張遼の捕縛を任せて良かったのですか？」

「ん、桂花が春蘭達の心配なんて珍しいな？」

「い、いえ、私は単に軍全体の損失の心配であって……決して……」

（ふう〜そんなに否定しなくてもいいのに……まったく素直じゃないな）

「冗談だよ。けど、どうしてそう思うんだ？」

「……はい、今の秋蘭は弓を持ってない状態ですし、春蘭は春蘭でいつもの馬鹿みたいな元気が無かったですし……先日、二人に何かしたんですか？」

「……俺はただ二人の覚悟を試しただけだ……それより戦場に集中しろよ桂花？」

「……はい、分かりました」

まだ、納得していないようだが、それ以上は追求せずに今回は前のシ水関ようには油断できない戦場へと目を向けた

「でも、一刀様……もしそのせいで春蘭達を失うことになったら……あなたは……」

「ふ、大丈夫だよ。あの二人はそう簡単にくたばるような奴らじゃないからな」

素直に心配する事が出来ない桂花の頭をポンと軽く乗せ、不安を取り除くように撫で、今は戦場にだけ集中させるように再度、促した

(確かに桂花の言うとおり、もしかしたらこの戦で春蘭と秋蘭を失ってしまうかもしれない……それでも……)

そこまで考えているとそう遠くないの方からこの戦場に響き渡るよく知った二つの悲鳴が聞こえてきた

「今の悲鳴は……あつちか!？」

「か、一刀様!どこに行かれるんですか!？」

静止する桂花を振り切り、俺はなりふり構わず悲鳴がする方向へと飛んでいった

side: 凧

「はあっ!?!」

「うおおー!?!」

「でやああー!?!」

今回、虎牢関攻略を任された私達は一刀様の目的である張遼を捕らえるために策を成すため、遊撃部隊として張遼を董卓軍から孤立させる為に戦闘中だが……

「ああ、もう敵が多すぎるよう「危ないよ季衣!!」(バキイ!)
あ、助かったよ流琉」

「もう、油断しないの……あの凧さん、秋蘭様たち大丈夫なんですか?」

「……正直私も分からない……一刀様がどうして本調子ではない二人に敵将を捕らえるなんて難しい任務も任せたのか?……」

「凧ちゃん! 虎牢関から別の軍が出てきたよ!!」

ようやく会話する余裕が出来るまで敵兵が減ったと思った矢先に虎牢関から”呂”と書かれた軍旗をなびかせながら敵兵も多数出陣し、その強襲のせいで季衣達とははぐれてしまった

「季衣、流琉……くそっ……邪魔だ!!」

(見間違いがなければいけあの旗は……)

「……見つけた」

「お、お前は!?!……」

「……呂奉先」

「!……呂奉先……あの飛將軍、呂布だと……」

私ははぐれた二人を捜していたが出会ったのはあの軍旗の名の持ち主にして最強と名高い呂奉先が私の目の前に姿を表した

(く、できればハズレで欲しかった)

「……よつやく……」

「……え?」

「よつやく……詠が出陣を許してくれた……霞を独りにさせたお前達は……許さない……」

「な!?!?」

呂布の小さな呟きが終わったの同時に一刀様とはまた違った恐ろしい覇気をぶつけられ、私は本能的に理解した(危険すぎる、こいつとは戦っては駄目だ)と……その結果、私の身体からは汗が大量に

流れ、足はガクガクと震え出し、意識すら放棄したい気持ちにさせられる

「か……………はっ……………」

「お前……………これで倒れないだけでも根性がある……………だけど、すぐに楽にしてやる」

意識が保つので精一杯の私に呂布の凶刃が襲いかかってきた

(か、体が言うことを……………きかない！？)

「「凧ちゃん(さん)!!」」

ガギイイイン……………

「む……………」

「大丈夫ですか？」

「もう、急にはぐれちゃうから捜しちゃったよ」

二人が間一髪のところまで呂布の戟を弾き返してくれた

「……………ああ、すまない二人とも正直もう……………」

「話は終わり?……………」

二人の登場に助かったのも束の間、攻撃を弾かれた呂布が再びあの覇気を出してきた……………が三人同時にぶっつけているせいか先ほどより

は恐ろしくなかった

「うっ……何これ……?」

「く……もの凄い覇気です……」

「季衣、流琉、怯んでる暇なんてない!!三人同時に仕掛けるぞ!」

「う、うん!」

「わかりました!」

「……来い」

私達は悪夢を振り払うかのごとく、呂布に三人同時で攻撃を仕掛けたが、当然のように弾かれて一度、距離を取られされた時、離れた場所からとてもよく知る人の叫びが聞こえ、その方向を”一瞬だけ”向いてしまった

「!……さっきの秋蘭様の声……?」

「凧さん!前を見て下さい!」

流琉の叫び声が聞こえて私はハッと、前を向き直したら……

「余所見……危ない……」

目の前に呂布が居た

「しまった!!?」

――

side：秋蘭

二回目の軍議の後、一刀の命を受け、姉者と共に張遼を捕らえるために出陣したが……姉者は私が一刀から聞いたことを同様に話した途端、何故か拗ねてしまい、その間ずっと落ち込んでしまった……そしてその様子を見て、一刀を含め、他の皆はこの状態の姉者を酷く心配していた……そんな事もあって今回の行軍は心配したが……

「さすが噂に聞く夏侯惇、やるやないか！」

「ふ、そういう貴様こそ、その神速の名は本物ではないか……ウオオオオオオオオオオ」

張遼との一騎打ちが始まった途端、いままで沈んでいた姉者は嘘のようにいつも通り戻っていた。

「最高や！自分ホンマに最高やな！ウチの中にあつたころモヤモヤしたもん全部無くなっていくようやあつ！……」

「同感だ！それに一刀以外に私を本気にさせてくれる奴が呂布以外

にいるとはなあー!!」

（今の姉者は張遼を捕らえるとか完全に忘れてるな……姉者と互角に打ち合ってるからそう簡単には死にはしないと思うが……まあ何にせよ姉者が元に戻っただけでも……）

そう思っただけで安心し、それが油断となったのだろう……

「ぐあっ!?!」

「な!……」

「あ、姉者あー!……!」

姉者の左目に矢が刺さっていた。

「姉者!く、だ「誰やあつ!!」ウチらの一騎打ちに水差した奴は!」
「……張遼?」

私が姉者の目を射った奴を捜そうとしたときには神速の異名を持つ張遼の手によってその不屈き者はあつという間に死んだ……

「ぐ、があ……こんなもので私は……」

「姉者、何をやっている!?!」

「ぐあああああ……」

姉者は悲鳴を揚げながら自分の左目ごとを矢を抉りだし……

「ハア……ハア……我が肉体と魂、今は一刀のもの……アイツとの誓いを護るためにも何の断りもなく失うわけにはいかぬ!!」

そのままその目を自分の口に放り込んだ

「ん、んぐ……ぐつ……は!……さて、水を差されたが張遼……また一騎打ちの続きを殺り合おうではないか!」

「ま、待て、姉者。せめてこれを目につけていけ……」

「うむ、すまぬな秋蘭……さあどうした張遼!私はいつでもいいぞ……かかってこい!!」

「な……夏候惇……あんたって奴は不死身かいな?」

「ふん、そんなことなどどうでも良いではないか。来ないならこつちから行くぞ!」

「……はは、ええなあ……やっぱりあんたは最高や夏候惇……その圧倒的な気迫……あんたみたいな修羅と戦えるなんてなあっ!!」

先程まで複雑な表情をしていた張遼だがあの姉者の顔を見て吹っ切れたかのように叫ぶと再び、一騎打ちが再会した

(もう、何も言うまい……今の姉者は間違いなく先程の自分を越えているからな……)

side: 凧

一瞬の油断だった……けどその油断のせいで私を庇った二人は……

「ぐ……がはっ……」

「……うう……ああ……」

「……ハアハア……くっ季衣、流琉……」

「……誰から先に逝く?……」

たったの一人の呂布という武人に常人を遥かに超えた強さを持つ筈の季衣は片手で首を絞められ、流琉は仰向けに倒され片足でその小さな体を押さえられ、そして私は二人が捕らえられている動けない……だから私は決心した

「……頼む、二人を解放してくれ……私はどうなってもいいから……」

「……なら、北郷と曹操を出せ……そしたらお前もこいつらも見逃してやる……」

少し考えた呂布はすぐに有り得ない返答をしてきた

「……!……そ、それは……できない……」

「……ならいい、恋が自分で見つける……だからもうお前等には用はない……」

そう呂布が言うのと踏んでいた流琉と季衣を私に向けて蹴り飛ばし、とっさに二人を抱き留めたが同時に呂布の戟が迫っていた

(く、今の体勢では完全には避けられない……だったら二人だけでも……)

「季衣、流琉……すまない!!……ウオオオオ……!!」

私はまだ意識の遠い二人を味方の軍の方に投げ、迫りくる呂布にただ一撃を与えるためにありつたけの氣を右手込め、殴りかかった……

「……だから、遅い……」

だが、それも届かず、急に体制を変えた呂布の鋭い蹴りを腹部にくらい、あっけなく吹き飛ばされてしまった

「……弱いくせにしぶとい……だけど、今度こそ死ね……」

(……く……全力を出しても差し違える事すら出来ないなんて……一刀様……あなたに助けて頂いた命を無駄に……すみません……)

ガギイイイーン……

「おい、大丈夫か。風？」

「……ハアハア、か、一刀様……？」

私が覚悟を決め、死が迫っているときに……今度は一刀様が私を救ってくれた……

「ここにくる途中に季衣と流琉が飛ばされて来たから慌てて駆けつけたんだが、お前達三人がやられるなんて……なあ、もしかしてお前が呂布か？」

「……………（コクッ）」

一刀様の黒羽によって距離とられた呂布は一刀様が頷いた瞬間、すぐ襲ってきたが……

ギイーン！

「！？……………」

「悪いが一軍を引っ張る主として、簡単にやられるわけにはいかないでな」

私の時と同じもしくはそれ以上の速さで斬りつけてきたあの戟を一刀様はいとも簡単に弾き飛ばした

「……………お前さっきの奴らよりもずっと強い……………面倒だから本気出す」

「な、今まで本気じゃなかったのか！？」

「本気を出すと疲れる……………けど時間掛かる方がもっと疲れる……………だ

から「恋、撤退するわよ!!」……詠？」

呂布が戟を構え直した直後に関の方から恐らく呂布の真名を叫ぶ人が現れた

「……どうして？」

「霞が夏侯惇に討ち取られてそのまま、虎牢関に突撃されたの……このままじゃ保たないから一度、引くわよ!!」

「……でも……」

呂布は臨戦態勢を解かぬまま、こちらを見ると一刀様は

「撤退しろよ。その方が助かる」

「……わかった」

そしてそのまま、詠と呼ばれる人物についていき、呂布という驚異は去っていった

「そうか春蘭達はやってくれたのか……はあく良かった」

「あの一刀様……すみません……二度も助けていただいて……」

「ああ、気にしなくていいよ。正直、呂布が引いてくれなきゃ俺も危なかったからな」

「それでも……ありがとうございます」

「！……おっ……」

（私はまだまだ、守るべき主に二度も守られるなんて……）

そんなことを思っている最中に今までの疲労と呂布との戦いの傷で私の意識は闇へと沈んでいった

支えとなる人

――北郷軍の陣営――

side：秋蘭

虎牢関での張遼との一騎打ちの後、無理をした姉者は倒れてしまい、本陣の救護所に運んだが、それから一刻たつても目を覚まさない状態が今も続いている

「はあ……なかなか惇ちゃん、目え覚まさへんなあ……」

「そうだな……」

ずっとこの調子が続き、いつしか私達は互いの事を話し合う事でもう真名を許しあう程になっていた

「霞……姉者はまだ目を覚ます様子がない。だったら先に一刀に会ってみないか？」

「北郷に？……そうやなあ……確かに惇ちゃんには降つたるって言つてもうてるしなあ……ええよ。案内しいや……秋蘭……」

「うむ、ではこっちだ」

返事を返すと霞は軽く「よろしくな」といい、それから念のために姉者の部隊に護衛を頼んで私は霞と共に一刀の元へと向かった

――

side：一刀

呂布との一戦を交えた凧達は生き残りはしたものの季衣と流琉は軽傷だったが凧は決して無事とは言える状況じゃなかった

「っ……」

「……凧ちゃん大丈夫？」

「あ、ああ、大丈夫だ。たいした「嘘をつくなよ凧？（ポン！）――」

小さな呻き声上げた凧を心配した季衣が悲しそうな顔をして覗いたが凧は笑って誤魔化そうとしたけど俺が軽く体を叩いただけで身悶えてしまった

「やっぱりまだ平気じゃないじゃないか」

「……ううー刀様、止めて下さい……」

激痛に耐えながら恨めしそうな顔で凧は俺を見ていた中、いい匂いと共に流琉が料理を運んできた

「あの凧さん、一応、栄養のつくものを作ってきたんですけど……食べられますか？」

「ああ、ありがとう流琉……でも今は……」

「……そ、そうですねそんなに怪我が酷いんじゃない……すみません、下げますね」

体の痛みがまだ続いているせいか、凧は食欲が湧いてないようで遠まわしに「いらない」と断り、流琉は申し訳なさそうな顔をして天幕から出て行くこととしたが……

「流琉ちょっと待った。その料理を貸してくれないかな？」

「え、あっはい、どうぞ……」

「悪いな流琉。ほら、凧……あくん？」

「え！？な、なに言ってるんですか／＼」

「いや、せつかく流琉が凧の為にと思って作ってきてくれたんだ。せめて一口でもいいから食べてやるのが礼儀だろ？」

「だ、だったら自分で食べれますから」「いや、一回断った罰として諦める！」「……／＼いつもズルいです」

「ほら凧、あくんは？」

「うう……あ、あくん／＼（パクッ）」

凧はようやく観念したのか顔を真っ赤にして口を開けて食べてくれた

「あ、あのどうですか?……」

「うん、おいしいよ。ありがとう流琉」

流琉は一言「良かったです」と笑顔で答え、その一口で食欲が湧いたのか流琉の料理のおかげなのかは分からないが、凧はさらに自分で食べ始めていた

「これなら後は季衣と流琉に任せてもいいかな?」

「うん、分かったよ!!」

「はい、任せて下さい」

「凧、ゆっくり休めよ?」

それだけ注意しておき、天幕を出て見るとちょうど秋蘭を見かけた

――

side: 秋蘭

「おゝい、秋蘭。」

霞を一刀に合わせようとしている最中、不意に声のした方を向いたらその本人だった

「なんだ、そんな所に居たのか……会わせたい奴がいるからお前の天幕に行ったが居なかったからな。分からなかったぞ？」

「そりゃ悪かったな……で、後ろに居るお前は？」

「ども……」

「……………」

「……………ども……」

一刀は霞の控えめな挨拶に対して何の言葉も発さずただじっと目を見ていただけだったので二回目も声をかけたが、さすがに引いていた

「お前もしかして、張遼か？」

「！？な、どうしてわかったんや？」

「いや、単純に秋蘭がわざわざ会わせたい人物はお前ぐらいしか思い付かないし、それに春蘭と同じような気がしたしな」

（ふふ、流石は一刀だ……一目で見抜くとはな）

「張遼、お前が秋蘭と共に行動してるってことは俺の軍に降ってくるということでもいいんだな？」

「せや、それが惇ちゃんとの約束やからなあ……ウチは張遼、真名は霞や……まあ堅苦しいのは苦手やから堪忍してや？」

「ああ、別にいいよ。俺の事は一刀で構わないからさ……よろしくな霞？」

「おう、此方こそよろしく頼むわ」

「そういえば秋蘭。春蘭はどうした？さっきから姿を見かけないんだが？」

「ああ、姉者なら……その、少々怪我をしてな。今は寝てるのだが……」

それを聞いた瞬間、さっきまで冷静だった一刀の顔は一気に青ざめていき、私に問い詰めた

「な、怪我って……春蘭はどこに居るんだ!？」

「姉者は救護所の一番奥の天幕だ。まだ寝てるかもしれんが……」

「分かった……すまない霞。今度、またちゃんとした時間を作るからな」

それだけ言い残すと一刀は私が指示した天幕へと走り去り、私の隣にいる霞は満足そうな笑みを浮かべていた

「一刀はええ主やな……秋蘭」

「当然だ」

――北郷軍陣営、救護所――

side：一刀

「春蘭！無事か！？……つておわっ！！」

秋蘭が教えてくれた天幕へ着いて入った瞬間、いきなり何か飛んできた……とつさの判断で避けられはしたが……

（いきなりなんでこんな箱が飛んで来たんだ？……）

そして再び、入ろうとしたが何故か幕が捲れず、代わりに春蘭の声が聞こえてきた

「……外にいるのは一刀だろ？」

「ああそうだ……春蘭、お前が怪我したからと聞いたから来たんだけど開けてくれないかな？」

「！？だ、駄目だ！！」

「……あゝもしかして着替え中だったか？」

「……違う！！」

「……だったら入ってもいいだろ？」「だからそれは駄目だと言った
だろうがあっ!？」「……なんで駄目なんだよ？」

話しのは途中、何回か強制的に入ろうとしたがそのたびに春蘭から
拒否され、埒が空かないので俺はしばらくおとなしくすることにした

「それは……もう私はお前に会わず顔はもうない……」

「はあ？いきなり斜め上をいく返事だな。どっという意味だよ？」

「言葉通りの意味だ!！」

「……それは俺のところから去るといふことなのか？」

「去りません……ただこれからはお前のそばではなく、

影から一兵卒としてお前を支えるつもりだ……だからもう私の事な
ど……うう……」

いつものように言葉には力は入っておらず、ただ淡々と紡がれるだ
けだった……

(春蘭の奴、今まで落ち込んでいたのもこれが原因だったのか?)

「そうか……残念だよ。春蘭……」

「……………」

何も言わない春蘭が居る天幕に背を向いて俺は歩き出し、ある程度
離れた所で足を止め……

「二こら辺でいいかな？」

一気に頑固者がいる天幕のへと突っ込んで行った

side：春蘭

「そうか……残念だよ。春蘭……」

「……………」

さっきまでしつこく幕を引っ張って入ろうしていた一刀はその言葉を最後に無理やり入っては来ず、ただ遠ざかる足音だけが聞こえた

「はは、これで良かったんだ……これで一刀にこんな醜い顔を見せないで済む……うう……っ……………」

そう思い出したら不意に涙が止まらなくなり、私は自分の左目があった場所を触ったがそこには涙はなかった

（やっぱり、こんな顔は見せられない……一刀の温もりがないのは寂しいがこれで良かったはずだ……後は秋蘭や季衣達の説得をどうするかだな）

私は少し考えたが直ぐに嫌になり備え付けの寝台に寝ようとした時、外からこちらに走ってくる足音に気づいた

「この足音は季衣か？……まあ二人だったら別にかまない「オラア
アー！！」って……か、一刀！？」

季衣と思い、ただ背を向けていたら明らかに一刀の声やし、慌てて
振り返ったが既に一刀はこの天幕に突っ込んでいた……

「！……春蘭その目はどうした！？」

「！？な……」

私はハツとし、直ぐに後ろを向こうとしたが一刀に頭を抑えられそ
れも出来なくなっていた

「春蘭？」

「う……この目は……張遼との一騎打ちの最中に流れ矢に当た
って……お前にだけは知られなくなかった……こんな醜い傷を負っ
たことを「春蘭！！（ギョツ）」か、一刀……？」

「何を失って言うんだよ？……お前は何も失っていないさ。春蘭は
ちゃんと俺の腕に今居るだろ？」

「一刀……お前はこんな醜く無様な私をまだそばに置いてくれると
言うのか？」

「当たり前だろ。お前は間違いなく俺の大切な人だよ」

「一刀……うう……うわああああん」

その一刀の言葉で私は忘れようとしていた華琳様と私、二人で過ご

した最後の日を思い出させてくれた

~~~~~回想~~~~~

その日は長引いた雨を止め、久々の快晴だった。私は毎日のように華琳様の看病をしていた頃のこと

『春蘭、今日はいいい天気ね。』

『そうですね……あの華琳様？』

『なに、春蘭？』

『華琳様はその……か、一刀の事をどう想っているのですか！？』

『！ふふっ……嫉妬しているのかしら春蘭？』

それを聞いた華琳様の顔は私を見て少し笑い、完全に楽しんでいる時の顔になっていた

『い、いえ……ただ私は……その……はい／＼／』

『そうね。好きよ一刀の事は……愛してると言っても良いわね』

『……やはりそうですか……』

『……ねえ春蘭？私も貴女に一つ質問していいかしら？』

『は、はい、なんなりとお聞き下さい』！

『さつき貴女は嫉妬してると言ったわね？』

『……は、はい』

『でもそれってどっちにかしら？』

『え、どういう意味ですか？』

『だから、嫉妬したのは一刀に？それとも私にという意味よ？』

『！！？／／……そ、それはもちろん……』

”一刀”と即答しようとしたが何故かその言葉は出てこなく、喉に詰まっているような感じがして私は上手く言葉に出来なかった

(……え……どっちに？……そんなもの一刀に……決まっているのか？……)

『クスクス、そんなに真剣に悩まなくてもいいわよ……でもね春蘭』

『……何ですか？』

『貴女がいつか深い悲しみに陥った時にそばで支えてくれた人を大事になさい……それがきつと春蘭にとって本当に愛すべき人の筈だから』

~~~~~回想終了~~~~~

(そうか……華琳様が言っていたのはこつこつ気持ちのことか……なら……)

「一刀……好きだ!!」

side:一刀

「はっ?いきなり何を言ってた春蘭?」

しばらくの間、泣き続け俺の胸にしがみついていた春蘭が突然、意を決した顔をして俺を見上げると告白?……をしてくた

「だから、私はお前の事を愛していると言ったのだ//」

……沈黙

(ええええええー!!?ちよつと待て、突然過ぎるだろ!?春蘭が俺の事を愛している?……有り得ねえっ!こいつそんな事は華琳と秋蘭にしか言えなかつた筈じゃ……)

「か、一刀……やはり今更……迷惑か？」

沈黙の間、俺は心の中で叫びながら悶絶していた時に春蘭は不安に思ったのか上目使い&涙目で俺を見ていた

「……………」

「……………うう……………一刀？」

一回下を向き、もう一度俺を見直した……その目はまるで捨てられた子犬のような雰囲気を出し……俺はあっさりと陥落した

(ふ、もういいや……桂花の時と同じだ……受け入れてやるよ！)

「春蘭、これからも宜しくな？」

「！……………ま、任せておけ、今から私はお前の剣だからな！！」

蔓延の笑みで春蘭は華琳の剣から正式に俺の剣になるといい、その直後、天幕の外で悶えている秋蘭が確認出来たがほっとくことにした

――数日後――

虎牢関での戦が終わった後、すぐに都を攻めるために袁紹軍を筆頭に進軍したがなかなか成果は上げられず、一旦退却し、主要な将で軍議が開いた結果、一日を六分割にし、一軍ずつ攻めるという方針に決定した

「一刀、急に私を呼び出すとは……まだ夜ではないぞ？」

「星、からかうの止めてくれ。今回お前を呼んだのは俺と霞と共に都に潜入する為に呼んだんだよ」

それを聞いた星の顔は楽しそうな顔から一気に真剣な顔に変わっていった

「ほほう、ついあの子遠を潰しに行くのか。」

「いや、それも確かにあるんだが……まずは本物の董卓の救出が先だ。子遠は後でいい」

「ふ、お前らしいな……それでどうやってあの落陽に潜入していくつもりだ？」

「ああ、それは華雄が成功するかしないかで変わってくる」

（出来ればお前にはそこにいてほしくない……優）

俺は再開したいと気持ちとは別の相反することを思いながらただその時をまっていた

洛陽潜入

――洛陽内部――

side：一刀

洛陽に潜入するために手筈通り、華雄が董卓軍の軍師である賈馱を説得することに成功し、春蘭達に軍をまかせ、俺達は子遠が居るといっ城に潜入することができた

「とりあえずここまででは気づかれずに通りに潜入できたが……霞、ここから先は道案内頼めるか？」

「おう、任じとき。月を早よう助けんといかんからな……」

先ほどから霞は董卓の安否が不安で気持ちだけが先走っている様子で、いつものように落ち着いてはいなく、ずっとそわそわしている

……

「焦んなよ霞。ちゃんと董卓は助けるさ。それにお前がそんな様子じゃいざ戦う時にも力が入らないだろ？」

「……そうやな、ウチがこんなところで焦ったって意味あらへんかな。おおきに一刀。（さすが春蘭が慕うことだけはあんなあゝ）」

「……どうしたんだ急に笑って？」

「いや、なんでもあらへんよ」

先ほどは違い、気持ちが落ち着いた霞は城の中の董卓が幽閉されるといふ場所を目指し、進み始めたが……もちろん道中の安全が保証されている訳もなく、優の息がかかっている兵に出くわすも相手に悲鳴をあげる隙も与えず瞬殺する……

「しかし、よくまああやつはここまで大胆な真似ができたものだな」

「ああ、正直俺も一年間何の情報も入ってこなかったから死んでいたばかりかと思ってたしな……」

一年前の戦の後、優を退けた俺と星は負傷した華琳達の治療に専念するためにその後は追わずに居たので、それから先の経緯は知らなかった

「……………!……………ここや、この階段を下れば牢獄や……………多分ここに月がおるはずや」

話をしているうちに一人、黙々と進んでいく霞は董卓が幽閉されている牢獄の場所に着き、その霞を筆頭に下っていったが、以下にも重要人物を収容していると言わんばかり兵が監視をしていた

(一、二、三……………全部で十六か……………霞達を確実に縛り付ける為の監視か……………)

「一刀、どうするつもりや……………いくらウチらがそこらの一般兵に劣らんといても月を人質に取られたら手も足もだせへんで……………」

「それに見たところ入口はここだけのようだし……………さてどうする一刀?」

星の言うとおり、この監禁場はざっと見た感じ入口は俺たちの所だけで長方形の道の左右には牢屋がいくつもあり、どこに董卓がいるからも分らず、加えて監視兵も十六と結構な数がある条件はこちらが不利だ

「……一応、策はあるけどかなりの博打になるけどそれでもいいか霞?……」

とりあえず思いついた策を二人に小声で伝えたと、二人は驚いたよ
うだが……

「……一刀、信じてるで……はあっ!!」

霞は俺を見てフツと笑うとそのまま、近くにいた兵を堰月刀を使い斬り捨て、異変に気付き近付いたてきた三人の兵も流れるように続けざまに切り捨てたした

「凄いな張遼は……同じ堰月刀を使う愛紗の剛撃とは違った洗練された技……ふふ、これが終わったら是非とも手合わせを願いたいものだな」

間近で霞の技を見た星はやはり武人としての血が騒ぐのか、凄まじい勢いで監視兵を次々と瞬殺していく姿はまさに神速の名に恥じない戦い方に星は魅せられていた……
だが残りの兵が四人程になったとき、裏から新たに十七人目の兵が現れ、その隣には銀色の髪をした小柄な女性が首元に剣を突きつけられていた

「ゆ、月!!!??」

「し、霞さん……私の事なんかほっといてくれても……良かったのに……」

「アホ抜かすな！ウチらが月の事をほっとけるわけないやろ！？」

「霞さん……ありがとうございます……」

「霞！感動の再開を邪魔して悪いが他の兵の足音が結構近付いているから逃げるぞ？」

「おう！月、しっかり捕まっときいや！」

「え、ひゃああ！？」

霞は董卓に向けてニヤツと笑うと董卓をおんぶし、そのままこちらの入り口に向かってきて俺と星はもう時間稼ぎは不要とばかりに今まで手加減を止め、来た道を今度は堂々と突っ切っていった

――半刻後――

あれから休むことなく敵を斬り伏せながら走りつづけ、城の出口を目指したが出口が近づくに連れ敵兵の数はどんどん肥大していった

「くそつ、まだこんなに兵がいたんか……出口が後少しやのに（それにもこのままじゃ月を傷つけてまう）」

「張遼！」

「なんや趙雲！？」

「今から私が出口まで退路を開く！！お前等は逃げた方が良い」

「！……………けどウチが逃げてもうたら「董卓の無事が最優先だろ霞？」
一刀……………」

星の提案に霞は驚いてすぐに否定をしたがその言葉は俺が遮り、董卓を安全な場所に逃がすように促した。そして星は俺の言葉に呼応するかのよう出口までの退路を開いていた

「分かった……………月を安全な場所に連れ戻らすぐに戻ってくからな。
それまで死ぬんやないで！」

霞はそのまま堰月刀を振り、近くにいた兵を斬るとすぐさま星の援助の元、脱出に成功した

「ふう……………行つたか」

「……………一刀、行くのだろうか？」

「ああ、元々俺はそれが目的だったからな……………おい貴様。許子遠はどこにいる？」

「ひつ……………きよ、許攸様は……………この上の玉座の間に……………だ、だから助け（グギャ）……………」

あらかた敵兵は殲滅し、情報を得るためにわざと生かした兵の首を
掴み、

恐怖に駆られた兵はすぐに子遠の居場所を吐き、命乞いをしてきた
が、無視して首の骨を折った

「容赦が無くなつたな一刀？」

「敵だろうが味方だろうが自らの主をあつさりと売る時点でこの世
界で生きる価値はないよ……それより子遠だ」

――洛陽、市街地――

side：秋蘭

一刀が元董卓軍の華雄を使って董卓軍の軍事、賈馱の説得に成功し
たことにより、結果思ったより早く、都に入ることができた

「むう、妙だな……」

「？……なにが妙なのだ秋蘭？」

「いや、一刀の話では華雄とは街で合流するはずなんだが華雄どこ

るか人氣が全くしないのはどうかと思つてな……」

姉者も含め、周りの皆もその異変に気付いたようだ……私は周りの兵に近辺を探索するように命を出し、様子を見ることにした

「どうだ、なにか手掛かりはあつたか流琉？」

「いえ、他の兵の皆さんもない見たいです……」

「そうか……」

がそれに気付いても確証が持てるわけでもなく、ただ時間ばかりが過ぎて行き、それから一刻ぐらいたった頃

「！姉者、誰かが近付いてくる……どうやら霞のようだが」

「霞だと？……あいつは確か一刀と共にあの城に突入してた筈じゃ無かつたのか？」

姉者の言うとおり一刀は霞と趙雲を引き連れ、桂花の制止を無視して突入して行つた筈だった

（予定より早く終わったのか……いや、それではなぜ一刀がいない？）

「……はあくようやっと春蘭達に会えたわ……ほら月、立てるか？」

「あ、はい……あ、あの霞さん。この人達は？」

霞の背中から出てきたのは銀色の髪をした弱々しい少女だった。見

た感じそこそこいいものを着ているようだが所々、汚れが目立ち、すこし痩せすぎているような感じもとれる……

「霞、誰だ。そいつは？」

「ああ、この子がウチの元主で正真正銘、本物の董卓や」

「え、あ……字は仲穎と申します……ここに来るまでに霞さんから聞きました。私なんかを助け出して頂いてありがとうございます……」

「お礼は一刀に行ってくれ。一刀が言わなければ誤解したままだったからな」

「よし、秋蘭。月の事を見とってくれや一刀達の助太刀せんとかかんからな」

霞は自分の得物、堰月刀を持ち直すと来た道に戻ろうとしていたのを桂花が止めた

「ちよつと霞！……まさかあんた一刀様を囮にして自分達だけ逃げたんじゃ無いでしょうね？」

「落ち着け桂花。説明してくれるか霞？」

「……それを提案したんは一刀達やけど結果は桂花の言うとおりや……だからウチはもう一度、あの場所へ行く……止めても無駄やで？」

「フツ、まさか止める気などはない……その代わり私達姉妹も連れ

ていけ……それでいい霞？」

「ちょっと待ちや。二人とも怪我は大丈夫なんか？……」

「フン、それなら問題無い。私は一刀の剣だ！！主のそばに剣が無くてどうする！」

「うむ、姉者の言うとおりだ」

「……まったくホンマにあんたら姉妹には適わへんわ……じゃあない……流琉、月の事頼むで」

それだけ言い切ると霞は「はあ」と溜め息をついて、私達の先頭に立ち、城に続く道を走って行った

因みに後ろから桂花が文句を言っていたが無視するこなしたことはいだらう

ただ守るために

――洛陽、玉座の間――

side：華雄

「私に刃向かう気か？……華雄に賈馱」

私はこの戦を引き起こした張本人、許子遠の目の前に立ちほだかり、自らの得物を向けていた
本来は一刀の命によって詠……賈馱を説得し、戦火になる前に洛陽の民の安全確保の後には北郷軍の参戦を待つのみだった
だが、詠を説得する際に紛れ込んでいた子遠の兵に見られていたように、子遠の所に連れて行かれたが、詠の合図で周りの兵を私が切り捨てた

「当然だ！私の武はお前の為に存在している訳ではない！」

「直に連合軍もここに来るわ。そうならばあんたもお終いな」

その私達の急な反乱が可笑しかったのか子遠は鼻で笑うと「忘れたのか」と言わんばかりに

「なら董卓が今から死ぬぞ？」

「やれるものならやってみせろ」

「……（なんだあの自信は？）」

そう言うと子遠は近くの兵に伝令を送ろうとしたようだが、逆に慌てた様子の兵が出てきて、怯えたように話し始めた

「も、申し訳在りません。許攸様！！た、たった今、董卓に逃げられました！！」

「ふ、どうやら一刀の奴は成功したようだな」

子遠はその話を聞いて特に気にしていないかのように

「……………そうか、なら……………」

ザシユ……………

「「！？」」

「あ、が……………」

「もう、洛陽には用はない」

返り血も浴びる事無く、子遠は先ほど斬り殺した兵を蹴り飛ばすと私に目掛けて斬り込んできた

ガギイイイン！！

「ぐっ！？……………」

「どうした華雄？腰に力が入ってないな？」

とっさの反射でなんとか防御は間に合ったが不意だったために腕と

足に衝撃が残ってしまいその隙を突かれてしまった

「華雄、避けて!!」

「く、ぐはあ!!」

詠が叫んだ時にはもう遅く、子遠の蹴りは私の無防備な腹を蹴り抜いた

「うああ……」

「いつにも増して弱い華雄。お前の実力はその程度だったか？」

(つ、強い……不意とはいえ、この私が完全に力負けをするとは……)

「ま、まだ……!がはっ……」

(まずい……さっきの衝撃で傷口が……)

「華雄、あんた最初から怪我を……」

「……私も舐められたものだ。怪我を負っていいにも関わらず、私に挑んできたは」

私の傷口が開いたのを見て興が冷めたのか構えていた武器を降ろし、子遠は冷え切った目で私達を見下していた

「くっ……何故だ?何故、それほどの武を持ちながらこんな意味のない戦を起こした!？」

「……意味はある。私の目的はこの腐りきった朝廷を潰し、内側からこの乱世を終わらせる事だ……まあお前達には理解出来ないだろうがな」

当然と言わんばかりに子遠は自らの願望を主張することで私の問に答えた

「狂ってる……霊帝が亡くなる前のは分かり合えたと思っただのに」

詠が見下している子遠に睨み、訴えて、唇を噛みしめていたそしてそれを聞いた子遠は何かを思い出したかのように

「分かり合えた……か……確か前にもそんな事を私に言った奴もいたな。だが、所詮、人は本当の意味で分かりあえることなど……不可能だ」

「!?!」

(……なんだ?……一瞬、子遠の目が……)

「……無駄話が過ぎたようだ……もうお前等には用はない……まずは賈馱、お前からだ」

その言葉を合図に子遠は詠を睨み、そのまま斬りつけた

――洛陽、城内――

side：一刀

「どつやらあの扉ようだぞ。一刀」

霞と董卓を送り出した俺達は敵兵を振り払い、ようやく子遠がいるという玉座の間へと着いた

星は簡単に主の所在を吐いた兵を斬り、いくつものある扉の一つを指して言ってきた

「よし、だったら久々の友との再開だ。派手に突っ込むか？」

「！……ふ、ふはははは」

軽く冗談混じりに言ってみたが星は何故か高笑いしてしまった

「ど、どうした……いきなり笑い出して？」

「いや、すまぬな。最初に再開した時は昔と違ってえらく静かだったからな。結構変わったなと思ったが……どつやら根元は変わらないようにで安心しただけだ」

「そうか？俺自信は何も変わってないと思うが……」

俺は訳が分からないか思っていると星は俺の頭を掴み、お互いの

でこ同士がぶつかる手前まで引き寄せ、俺の目をじっと見て

「いや前言撤回しよう、目は変わったな。その目を見てると華琳や慧蓮と同じ、上に立つ者の覚悟を感じ取れる……その部分は紛れもなく以前のお主にはなかったものだな」

星はそれだけ確認すると俺の頭を離した

「……さて、無駄話はこれくらいにしてさっさと突入するぞ」

「……ああ、そうだな」

星の言葉を合図に俺はその扉を蹴り飛ばすと予想外の光景が目に入ってきた

「だ、誰よ!？」

「!か、一刀か?……ぐああ!！」

「……一刀だと?」

そこには華雄が緑髪の娘を庇い、優の剣をその身で受け止めていた。そして優は俺の姿を確認すると、華雄に突き刺していた剣で斬り捨てた

「華雄!？」

「……自ら危険を侵してまで何をしに来た一刀?そんなに私と殺し合いたいのか?」

「違う。優、お前を止めに来た……これ以上はお前の為だけに戦を長引かせるわけにはいかない。悪いが今度は一年前のように逃がしはしない」

「逃がさないか……ならやってみせてみる……一刀」

俺はその言葉と同時にすぐさま自身が出せる最高の速度で優に向かい斬りつけようとし、向こうも剣を振りかぶったとき

ギーンー

「!?……」

何者かに攻撃を弾かれ、その反動で後退した俺はその正体を確認したとき驚愕した

「ほう……まさかお前が私の盾にまでなってくれるとはな」

「……な、馬鹿な!？」

「ど、どうしてあんたが子遠なんかを庇って」

「……これは意外な奴が出てきたな」

そして皆も俺と同じように驚愕し、同時に絶望感に襲われた者もいた

「今……子遠を死なせるわけにはいかない……」

俺の攻撃を弾いたのは董卓軍の将である八ズの呂布だった

「恋……!どうしてあんたがそんな奴の味方してるのよ!？」

「……………」

「呂布、さつさとそいつらを始末しろ……そうしたら陳宮は返してやる」

「……………」

どうやら呂布は人質を取られてるみたいでまともに返事をする事も出来ず、変わりに俺の方を見てあの時以上の覇気を俺にぶつけて来た

「く……なんて覇気だ」

「一刀!今回は共闘を……………」

星は俺の隣に立ち、いつでも戦える体勢に入ったが俺はそれを制した

「いや、お前は華雄達を守っていてくれ」

「一刀、いくらなんで無謀だ……一人だと死ぬ「大丈夫だ」……………!
!お主まさか……………」

俺がそう告げると星は当然の事ながら反論したが、途中で俺の意図に気付いてくれ、それ以上は何も言わず、変わりに睨んで華雄達のそばに行った

「さて、話は終わったし、さつさと殺り合おうか……………呂布?」

「……………殺す」

呂布は呟くとすぐさま戟を恐ろしい速さで振りかぶってきた
俺は反射的に黒羽で受け流そうとしたが桁違いの速さと重さで完全
には流せず、吹き飛ばされてしまった

「っ、なんて奴だ……（上手く吹き飛ばされなければ、剣ごとぶつ
た斬られていたな）……しょうがない、さっさとやるか」

俺はそういうと、全身に気を張り巡らせ、そして開放した

――洛陽、城内――

side：秋蘭

「くそ、どんだけこの城の中に自分の兵を潜り込ませとるんや！」

私達は城に潜入した途端、多くの敵兵に囲まれてしまい、全滅する
のにかなりの時間を有してしまった

「ふん、こんな雑兵どもで根をあげるなど霞もまだまだだな」

その姉者の一言で一瞬、霞はピクツと反応したが体力の無駄だと思
ったのか反論はしなかった

「まあ姉者もそういつてやるな。霞は私達よりも前に戦っていたしな」

「うう、しゅら〜ん……」

「それより、一刀達はどこにいるのか分かるか霞？」

いつものようにふてくされる姉者はほっとき、私は少し疲れた様子の霞に一刀の所在を聞いてみた

「多分、子遠が居る王座のところに言ってるはずや……何回かそう言つてたからな……」

「秋蘭、霞！あそこにまだ残党がいる。行くぞー！」

「って……待てやー！そんなんほつと……はあ〜行つてもうたわ」

姉者はまだ遠く居る五、六程の敵兵目掛けて突っ込んでいき、同時に霞からは深い溜め息が洩れていた

「……何だこの袋は？」

仕方なく私達は既に敵兵を片付けた姉者のそばに駆け寄ったが、そこには不思議そうな顔した姉者が一つの袋を見つめていた

「どつした姉者？そんな袋を見つめていて？」

「いや、こいつ等は私と殺り合っていたにも関わらず「この袋だけは死守しろー！」とか叫んで居たんで（ゴソゴソッ）ニヤウー！！？」

姉者が不思議に思ったことを話している最中、急に謎の袋が動き出し、姉者は見事に声が裏返ってしまった

「ぷっ……あはははは、しゅ、春蘭……声がめっちゃ裏返ってたで」

「／／……く、袋如きが私を愚弄しおってたた斬ってくれるわ！」

そう言うと姉者は未だに動いてる袋に向かって剣を振り下ろそうとしたが

「まあ待て、姉者。取り敢えず斬るのは止めてこの袋を開けるぞ……恐らく人が入っている筈だ」

「な、何？……そうなのか霞？」

「くく……常識的に考えて袋が動く訳あらへんしな」

（まだ、笑っていたのか……まあ確かに先ほどの姉者は可愛かったから気持ち分かるがな）

そう思いながら袋の中を引っ張り出すと中からは小柄な娘がおり、口には猿ぐつわを噛まされていた

私はうー、うーと騒ぐ娘の猿ぐつわを外してやった

「ぶはあ……苦しかったのです……どこの誰だか存じませぬが取り敢えず、助けてくれてありがとうございます」

「いや、助けたのはたまたまだ……それより体は大丈夫か？」

一通り、体を見たが特に目立った外傷はなく、ちゃんと喋れている様子から大丈夫そうだ

「おう、やっぱり人が居たんやな……って……ねねやないか!？」

「この声は……霞なのですか!？」

どうやら二人は知り合いのようで私達姉妹そっちのけで抱き合ってた(正確にはねねと呼ばれる娘が一方的に)

「……ハッ!こんなところで霞と抱き合ってる場合じゃ無いのです!…霞、ねねを今すぐ恋殿の所に連れて行って欲しいのです!…」

「いや、ねねが恋に合いたい気持ち!このままでは恋殿は子遠の言いなりのままなのです!」は、なんやて?」

そしてその娘から詳しい話を聞いた私達は一刀達が危険と思い、すぐさま子遠が居るであろう王座の間へと急いだ

犠牲（前書き）

途中、この携帯で変換出来なかった部分はカタカナになっています。
申し訳ないです（ ; ）

犠牲

――洛陽、玉座の間――

side：星

「しょうがない……さっさとやるか」

呂布と数手交えた一刀はこのまま闘っても勝ち目はないと悟ったのか、距離をとったまま目を瞑りあの状態へと入っていった
そんな様子の一刀を見て、二人は心配してきた

「ハア……ハア……貴様、一刀を助けなくていいのか？あの様子だと……半刻も持つまい」

「そうよ……恋の仲間だったから分かるけどあいつは特別なの！だからひとりなんて無茶よ!？」

確かに華雄達の言うとおり、あの呂布という奴はとんでもない武の持ち主のようだ

(いくら一刀とはいえ、長くは持つまい……だが、あいつには)

「それこそお前たちも一刀をよく知らぬだろう?……まああれを見れば自ずとわかるだろうがな」

そう言うと二人は一刀と呂布を死合いを見ると途端に驚いた表情をした

「え……どういこと？」

「ま、まともに殺り合ってるだど？」

ギーン！ギーン！ギイーン！

激しく火花を飛ばしせながらお互いの武器をぶつかり合わせるその
一刀と呂布の殺し合いは紛れもなく武の頂点だった

「恋の相手をまとも出来る人間が居たなんて……」

「互角……いや一刀が少し上回っている……これなら「それは違う」
な、何だと子遠！？」

その死合いに見とれてつい零れた華雄の呟きを子遠は見逃さなかった

(！……やはり、あやつは知っていたか……あの技の最大の弱点を)

「……違つとはどうい意味よ！？」

「あの技の使用中は時間が経てば経つほど、自らの体が崩壊する自己
犠牲の技と言つ意味だ」

「それつてつまり……」

先ほどまで安堵していた賈馱は急に不安になり二人の死合いをもう
一度よく見たとき(ガギイーン！)これまで最も強い金属音が
鳴り響き、両者は三度、距離をとつた

「……強い……本気を出しても倒せない……」

「っ……はは……まいったな……これだけやっても倒せないのはしんどいな」

「ちよっ、あんた大丈夫なの!？」

「?……ああ、賈馱か……まあまだなんとかかな？」

賈馱が動揺するのも無理はなかった

まだ少ししか殺り合っていないにも関わらず、今の一刀は全身汗だくで辛そうな呼吸を繰り返していた

「一刀……私が代わろうか？」

「ふ……冗談じゃない……はあっ!！」

そのまま、一刀はさらに力を込め、呂布に向かっていったが

「!……さつきより軽い」

「っ、まだだ!」

対する呂布はまだいけるようで一刀の斬撃を受け止めると素早く戟を振りきるが一刀はあの残撃を受け流し、再びお互いの得物の打ち合いが再開したが、その速さは武人の私ですら霞むぐらいの速さだった

「ちっ、あいつの言うとおり、このままでは一刀に勝ち目はないかもしれないな……」

「……やっぱりあの技のせいなの？」

「ああ、確かに良い勝負をしているように見えるが、一刀はその自己犠牲の技を使い、ようやく呂布と同等に戦えている……」

「……だったらどうすんのよ？」

「一時の希望もすぐに消えたかのごとく、不安な声を漏らした賈馱に私は……」

「一刀が命懸けである呂布を止めてくれている……ならばその隙に私が子遠を討ち取ればいいだけだ」

私は龍牙を握り締め、ただ二人の死合い傍観している子遠に奇襲を仕掛けた……が

「！……させない」

「な！急にはや……うおっ!？」

「何！……ぐあっ」

一刀の悲鳴が聞こえた瞬間、呂布は私に向かって一刀を投げ飛ばす事によって奇襲を阻止された

「……お前、殺す」

「くっ……星！！」

すかさず呂布の追撃が迫っていたが一刀が私を吹き飛ばし、身を挺

して私を庇い、扉の方向へと吹っ飛ばされた

「……………!!」

……………

side：秋蘭

「……………!!」

私達が陳宮の案内で玉座の間についたとき、趙雲の悲鳴が木霊した

「な、今の声は趙雲じゃ「春蘭、前を見いや!」は、前?……………うわっ!?」

ぼすつとくぐこもった音と共に何故か、一刀が姉者の方へ飛んできた

「いたた……………な、なんだこれは……………って一刀!??」

「ハア……………ハア……………おう、春蘭……………か。悪いな……………」

姉者のそばには酷く疲労した一刀が横たわっており、そばに駆け寄ったとき

「恋殿————!!」

「!……ねね」

「何っ!?!」

陳宮が呂布を見付けると先ほどの趙雲よりも大きな声で叫んで、自分の無事を知らせ陳宮が抱きついた

「霞、月は無事なの!?!」

「おお、詠か。安心しいや月は無事やで。信頼の出来る奴に匿つてもろつとる」

「そつ……良かったわ」

一方で董卓の無事を心配し、霞から安否を聞くと心から安堵したようにそれは華雄も同じようだった

「さて、子遠……これで形成逆転だ……もう降伏しろ」

(!……子遠だと、どいつだ!?!)

私は子遠という名に反応し、その方向を見ると

「……………」

ただ無言で立ち尽くしている姉者や関羽と同じように黒い髪をした女が居た

「優、星の言つとおり、これ以上は無駄だ……ハア、もう降参しろ」

「もう……お前の言いなりにはならない」

「観念しいや子遠……ウチらの主を苦しめた罰はたっぷりと受けて貰うで！」

皆が此方をにらみ続けている子遠にようやく姉者は気付いたようであつた。口走つたのだらう

「あれが子遠だと……あいつが華琳様を殺した奴なのか？」

「!?!?……何、華琳が死んでいるだと……どういう意味だ」

今まで降伏には何の反応を示さなかったがふと漏れた姉者の言葉にだけは反応した

「……ああ、一年前のあの時の戦の後にな」

「……なるほど華琳はすでに死んでいたのか。通りでお前の名は聞いても華琳の名は聞かないわけだ」

「貴様つ!! 華琳様を殺しておいてよくもそんな事が言えたものだな!! 貴様はこの夏候惇が討ち取ってくれるわ!!」

子遠の馬鹿にしたような態度に姉者は怒り、今すぐにも討ち取るうと斬り込める体勢に入ったとき

「私が華琳を殺した?……何を勘違いをしている。あの人に華琳が

死んだというなら殺したのは……一刀だ」

「なん……だと？」

続く子遠の言葉で逆に姉者は立ち尽くしてしまった

「ば、馬鹿な、そんなことは……!？」

(……一刀が嘘をついているとでも言うのか……そんな筈はない！
あいつが私達相手に嘘をつくなど)

「別にお前等がどう思うが勝手だが、それよりも呂布にはここから
出て行って貰おう」

そういうと子遠は呂布を目掛けて一直線に向かったが、あっけなく
呂布に弾き飛ばされた……が

「甘い……」

「こ、この放せなのです!？」

「ねね!！」

子遠は呂布に吹き飛ばされるのを逆に利用し、華雄や陳宮など後方
に下がっていた戦えない者の場所に上手く飛ばされ、再び、陳宮を
人質に取った

「ねねを放せ……」

「一つ言うが今更、人質を取って何になる……それで状況は何も変

わらないぞ」

「さっきも言った筈だ……呂布にはここから出て行ってもらおうと」

次の子遠の行動は私達の予想を大きく上回っていた

「ねねー……!?」

捕らえていた陳宮を窓の外へと投げ飛ばし、奴の予想通りなのか後に続くように呂布も同様に窓の外に飛び出し、二人とも城から落ちていった

「そんな……ここつて結構高さがあるのよ……」

呂布の叫びの後、僅かな間、私ですら言葉を失い、一人の眩きとほぼ同時に玉座の間に一刀の音が響いた

「優、何でお前はそこまでしてなにがしたいんだ!?!」

「一刀……今更、そんな事を私に聞いてどうする?」

ギイイーン――

「ぐっ……」

「一刀!?!きさ」手を出すな春蘭!これは俺達の問題だ!?!」か、一刀……?」

部屋に響き渡る剣の音、一刀は子遠の剣を受け止め、姉者が助太刀にしようとしたが一刀に拒否された

「俺達の問題」か……確かに私はあの時からずっとお前の事が許せなかった」

「ゆ、許せなかっただと？」

「お前は慧蓮の事を任されていたにも関わらず自分勝手に暴走し……結局、お前を護るために慧蓮は犠牲になった」

「ぐっ……だったらどうして一年間も姿を見せなかった。俺を許せないなら暗殺なりいくらでもやりようは合っただろ!？」

「刀と子遠は鏢迫り合いをしながら話し、お互いに全ての感情を吐き出しているように感じた」

「……慧蓮がお前に斬られた後、私に何を伝えたかお前は覚えているか？」

「っ……それは……」

「……あいつは私に妹の飛慧ひすいと国を皆で共に支えてくれと……」

「!?!……まさかお前、今まで匈奴に居たのか？」

「……ああ、半年間、私は慧蓮の為に匈奴に赴き、飛慧を支えた……そして私はあいつの国を護るために朝廷を潰す必要があったからこそこんな戦を仕掛け、お前や華琳に……」

二人の意地とも取れる鏢迫り合いの中、ほんの一瞬だけが子遠の悲しそうな顔が見えた気がした

「（そうか、だから馬騰さんは優が黒幕だと知っていたのか）……
優、この戦は飛替達と話し合った決めた事なのか？」

「ああ、飛替はお前と華琳を捕らえてここに連れて来てくれと言われた」

「……そうか」

「それに一刀、お前が私の事をどう思ったが知らないが、朝廷を滅ぼすこと自体は私自身の望んだ道だ……それでもお前が立ちはだかると言うなら一年前の決着を……」

長い鏢迫り合いの最中、不意に子遠は自ら一刀と距離をとり、二人は再び武器を構え直し、そして同時に仕掛た

――――

side：一刀

「……決着を……一刀」

優とは最初に出逢った時、優しい奴だと思った。だからすぐに気が合うと思っただけと共に過ごし、話を何回も交わす内に俺とは根本的な違いがあった……そのせいか華琳と優はお互いに真名を交換しあうまでの仲になっても俺は優の考えを認める事が出来ず、俺は子遠とあいつは北郷と親しくなれなかった

そんな関係のまま、遂に華琳から「意地を張らずに仲良くしなさい！！」と怒鳴られ俺と優から馬を取り上げ、その辺の森に捨てられた……そんな時だ。慧蓮に出会ったのは……あいつの存在が俺達の関係をよくしてくれた……

（今はこうして優と対峙しているせいか、昔のことを思い出すな……）

「そうだな。もう、戦がどうとか難しい事を考えるの止めた。この喧嘩、次の一撃で終わりだ」

「……そうしよう」

その優の言葉を最後に俺達は重なり合うようにお互いの得物を突き立てた

――

side:???

冷たい……それに……痛い……なんでこんなことに……

「……うう……」

「……大丈夫」

どうしてこんなことになったんだろう……？……恋はただ楽しく……
……過ごしたかっただけなのに……力はあるのに……どうして……

「……ハアハア……苦しいです……恋……殿」

「ねね、もう少し我慢して……絶対に恋が助ける」

「はい……なのです」

ねねをこんな怪我を負わせた……あいつだけは許せない……あいつ
さえここに来なければ……ねねはこんな目にあわなかった筈なのに
……あいつが来たから……けど、今はねねの怪我を治すのが先……
だからそれまでは……殺さない……

「かならず……恋が殺す」

終わりの始まり

――玉座の間――

side：秋蘭

「ぐっ……………」

「……………がはっ！！」

ドサッ……………」

結果として一刀と子遠との一騎打ちは相打ちの結果となり、一刀は肩に傷を子遠は腹部に傷を負い、そして二人同時に倒れた

「一刀、しっかりしろ!？」

「ちよっ…ハアツ…春蘭…ハアツ、痛う……………」

「お、落ち着け姉者、怪我人をそんなに揺すつては駄目だ」

姉者は一刀が倒れる前に受け止め、私も慌てて駆け寄ったが、苦しそくに痛みに堪えていて、言った私自身も落ち着いてなどいなかった

「そのの二人！今の一刀にあまり触るな。恐らく体中の痛みが走っている筈だ……………触れば余計に痛むはずだ」

「……………趙雲、お前は分かるのか？一刀の具合が？」

「ああ、だが安心しろ。一日も安静しておれば直に動けるようになる……全く無茶をしておって」

趙雲は私達の不安を感じたのか、柔らかな笑みを浮かべて大丈夫だと言った。最後の方は聞こえなかったが……

「子遠……ようやくお前から受けた仕打ちを返せそうや。苦しませるには逝かせやるわ」

「……………」

一方で霞は仰向けに倒れている子遠に一言話した後、堰月刀を振り下ろそうとしていた

「っ……………待ってくれ霞!!」

「なっ!?!」

「……………」

霞が振り下ろしかけた堰月刀は一刀の静止の声で子遠の首本で止まった

「一刀、もしかしてお前、子遠を助けるとか言つつもりやないやろうな?」

霞のドスの聞いた声はこいつを助けることを絶対に許さないと聞いた強固なる意志を感じ取れた

「いや、そうじゃない……………ただ最後に確認したいことがあってな。

く……悪いけど春蘭、俺を支えておいてくれるか？」

「お、おう」

霞の気持ちを汲んだ一刀は姉者に支えてもらいながら子遠の側まで行き、そして話しかけた

「……優、お前はさっき慧蓮の約束で匈奴に居た言ったな？」

「……ああ、それがどうした？」

「飛替は俺の事をどう言ってた？」

「お前の事か？……」

~~~~~優の回想~~~~~

Side:優

『優姉……それって嘘だよな?』

『……本当だ。経過はどうあれ、結果、慧蓮を殺したのは……一刀だ』

本当は余り打ち明けたくは無かった。まだ精神的に成熟してないこの子にはこの事実が残酷すぎた

『どうして……』

『……飛慧?』

『どうして、華琳や一兄と戦かすにいなんかしたの!? 優姉がそんなことをしなきゃ蓮姉だって死なずに済んだはずだよなえっ!?!?』

飛慧は私の胸倉を掴むと小さな体とは思えない力を発揮した

『く……それは私も戦を仕掛ける気なんか無かったただの脅して済ませるつもりだったが周りのもの……ぐはあっ!?!?』

『言い訳なんか聞きたくないよ……せっかく一兄と蓮姉が一緒のなれて……うっうっ』

私は飛慧に殴り飛ばされ、慌て飛慧を見たら泣いていた

(無理もない……本当の兄のように一刀を慕っていた飛慧だ……やはり一刀や慧蓮の言うとおり、私は間違っていたのか?)

『ごめん、しばらく一人で考えさせて……部屋は蓮姉の使っているから』



それだけ言うと飛彗はしばらく、ふさぎ込み、その間に私は慧蓮との最後の約束、そして華琳の決意を思い返し、自分のことを見つめなおす時間には十分だった

-----

『ごめんね優姉……こんな夜遅くに呼んじやって』

『いや、構わない。それより話とはなんだ？』

しばらくしたある夜、部屋に入ると飛彗は窓際で月を見ながら私にポツポツと話しかけてきた

『……優姉、私ねもう決めたんだ』

少しばかり声色を低くして淡々と言葉をつぶやいていく飛彗

『決めたって……何をだ？』

『うん、私は蓮姉の後を継ぐよ。そして……』

『!?!?』

ゆっくりと私の方へと振り返り、こう言った

『私と蓮姉を裏切った一兄を……殺してやるんだ』

~~~~~

Side: 一刀

優に質問すると一瞬だけ顔を強ばらせ、何かを考えたのか……

「一刀、飛彗は以前のお前だ。復讐で周りが見えなくなってしまうている……私は救えなかった。だからお前に……ぐ、がはっ!?!?」

「優!?!……お前、まさか……」

話の最中に大量の吐血をし、息も絶え絶えになっていた

「ふふ……気にするな。この血は元からだ」

「……何時からなんだ?」

「ぐ……二年前、慧蓮を拐った後、奴等の毒をもらってな。それが
らずっとこの調子だ……」

優は仰向けのまま、淡々と言葉を紡いでいき、俺は絶句した

「お前、それで焦っていたのか……自分に先が無いことを知ってあ
んな無茶を……」

「……………ああ……………だがな一刀」

ゆっくりと俺の方を向き、昔と同じ強い眼で俺にこう言った

「……………できればお前の言ってくれた通り、華琳と共にいきたかった
……………！？」ほっほっ」

(優、お前はそこまで華琳の事を……………)

「ハアハア……………ここまでか……………張遼、董卓にすまないと、ハアツ……
言っておいてくれ……………それに一刀……………一年前の事は……………ハア、ハア……
…悪かった」

それだけ言うと優は静かに眠りについた

「やっぱりお前も変わってなかったんだな……………霞、優の身体は持つ
ていくいいよな？」

「……………勝手にしいや」

「ふ、ありがとう……な……………」

「か、一刀!？」

さすがに限界のようで俺は体中から力が抜け、薄れゆく意識の中で最後に聞こえたのは春蘭の声だった

――

目をあけたとき目の前には心配そうな桂花の顔が見えた

「あ、一刀様。体は大丈夫ですか？」

「……桂花か……っ、俺が寝てからどのくらい経ってる？」

「はい、あれからだいたい半日程です……それよりまた無茶をしましたね。春蘭から背負われてきた一刀様を見たときは焦りましたから……」

当の本人の言うとおり、桂花の目には微かに涙の後が残っていた

「春蘭達はどこに行った？」

「……春蘭と秋蘭はつい先程、洛陽に到着したエン紹を含む合連合へ状況の説明の軍議に、流琉と季衣は兵の管理で霞は呂布を探しに行くと言って出て行ったままです」

「そうか、桂花、悪いが董卓を連れてきてくれないか？」

「董卓ですか……はい、分かりました」

桂花は了解するとそのまま天幕を出ていき、少しした後すぐに董卓と賈馱を連れて戻ってきた

「あ、あの……なんででしょうか？」

「えっと、そんなに怯えなくていいんだけど……？」

「うう、す、すみません……」

「こら！あんたあんまり月を苛めんじやないわよ……！」

「いや、別に苛めてるわけじゃないんだけど……」

賈馱の勘違いだが、自分の党首である董卓を守るために俺に突っかかってきたせいで最近、ますます（色んな意味で）酷くなった桂花が黙っているはずもなく

「ちょっとあんた！一刀様になんて口を聞いてんのよ！？ちょっとは自分の立場をわきまえたらどうなの？」

「はあ？そつちこそ何言ってるの？ボクはこの男が月を誑かそうしたから守ってるだけじゃない……そんな事も分らないの？」

「一刀様がそんな女を誑かしてるっですって！？今の聞き捨てならないわ。あんたみたいな君主絶対至上主義の癩癩玉に言われる筋合いはないわよ！！」

「それはあんたも同じでしょうが！！」

「あ、あの詠ちゃん……私は別に……」

「ほら桂花も落ち着けて……俺は気に……」

いい加減、拉致が空きそうにないので俺は董卓とほぼ同じタイミン
グで止めに入ったが……

「「うっさい！！外野は……はっ！！」」

本当は仲がいいんじゃないかと思うぐらいに息がピッタリの二人だ
つたが、今回は互いに言ってる相手が悪かった

「うっ……詠ちゃん……酷い……」

「ち、違つこのよ月。ボクはあいつに言っつて月じゃなくて……えと、
その……」

「ほう、桂花……いい度胸してるな？」

「ひい！？も、もうし訳ありません！！お許しを――」

「ダメだ……こつちへ来い桂花？」

……結果、董卓はただでさえ弱っていた精神が賈馱の一言で崩壊して泣き始め、それを賈馱は必死で慰め、俺は桂花を捕まえ懲罰を与えていた

――半刻後――

「大丈夫か董卓？」

「はい、お見苦しい所を見せてしまつてごめんなさい」

「（うう……いつもの威力じゃなかった）」

結局、事態の収集に時間が無駄にかかってしまったがこれでようやく本題に入ることが出来た

「で、率直に聞くけど、これからどうする？今まで通り賈馱は別だが董卓は董卓として生きていく事は出来ないぞ？」

「え……どうしてですか？」

「賈馱は分かっているとと思うけど、真偽はどうであれ、世間にはもう董卓は極悪人という印象が根強く広まってしまった……もし、ここ以外で董卓を名乗れば朝敵として捕らえられる……もしくは殺されるかだ」

「……そんな……それじゃあ私はどうすれば……」

（シヨックだろうな。いきなりもう世間では生きて行くことが出来ないと言われて……ましてや自分に全く非がないのにこんな状況になっちゃったのは）

「だからさ霞や華雄も俺の軍に居るし、俺が面倒見てやるよ」

「え……いいんですか……？」

「ああ、もとよりそれが霞達が降る唯一の条件だったから……その代わり董卓と言つ名は捨てて貰うけどな？」

「……………」

「ゆ、月、別にこんな奴の所に居なくたってボクが守ってあげるから……ね？」

俯き、自分の身の振り方が分からないであろう董卓に賈馱は慰めるが、やがて答えが出たのか……

「せめて……せめて真名だけは残しても良いですか？」

「ああ、それくらいは構わないよ」

「……でしたら、私の真名は月と申します……あの……その……よろしく願います」

「おう、俺の事は一刀でいいよ。よろしくな月」

「はい、一刀様」

と月はようやく笑い、和やかな雰囲気になりかけたが

「ちょっと月、何いきなり言ってるの！？なんでこんな奴なんかに……」

「詠ちゃん、一刀様のことをこんな奴なんて言ったら駄目だよ。これから私達はお世話に成るんだから」

「！！ううゝ月が真名を許したから一応、真名は許すけど……別にあなたのことは認めた訳じゃないんだからー！！」

そういうと賈馱…もとい詠は強引に月の手を取り、天幕を出て行ってしまった

「な、何なのよあの女。やっぱり許せないわ！」

「同じ軍師同士だし仲良くやれよ桂花？」

「……善処します」

こうして大陸の運命を左右する序章の連合は解散し、これから本格

的な群雄割拠の時代へと入ろうとしていることにまだ俺は気づいて
なかった

――数日後、陳留――

あの戦から数日たった今、秋蘭と共に華琳への報告も兼ねて帰郷し
た事を告げた帰り道、近くの泉に寄っていた

「一刀、前から聞きたかったのだが、なぜあの丘から離れたこの泉
に華琳様の絶がここに？」

「華琳からの最後の願いさ……いつか話したと思うけど、ここには
慧蓮って奴が眠っている場所なんだ……俺や華琳、そして優にとっ
て大事な奴だ。だから華琳はその証しとして絶を墓標代わりにした
んだ……」

俺はその隣にある優の得物である紅狗こうくを見た……その後、袁紹に気
づかれないように優の身体をこちらの陣営に運び、今は親友同士だ
った慧蓮の隣で眠っている

（優……お前が最後に頼んだ「飛慧を救ってくれ」と言ったよな？
……俺は正直、飛慧には合わせる顔がない……けど最後にお前が俺

を信用してくれたその約束だけは絶対守る……)

「だから、お前は安心して華琳と慧蓮と仲直りでもして待っていてくれ……」

「一刀、そろそろ帰らんと桂花がうるさいぞ？」

「ああ、そうだな」

(……必ず、あの時の誓いと共にを果たして見せる)

終わりの始まり（後書き）

さて反董卓連合編が終わった訳ですが……長く更新を滞らせてすみません f ^ | ^ ;

取り敢えず次回からは拠点フェイズをいれながら話を進めていきいと計画中です。

これからも宜しくお願いします m | | m

休日というもの（前書き）

長らく更新を止めてしまっして申し訳ありません（ T T ）
ようやく身辺の状況が落ち着いてたので待たせてしまった方々には
再開お詫びします m（——） m

休日というもの

――陳留、市街地――

side：人和

あの黄巾党が解散し、私達はまた一からやり直すことに決め、昔と同じように地道に活動を続けていたそんなある日……

「よお、人和」

「え、一刀さん？」

今日は何時もの定時報告の日。普段なら連絡役の凧さんのはずだけど、目の前には何故か私たちの興業主であり一国の主でもある一刀さんが居た……

「どうしたのよ人和。ちゃっちゃと報告終わら……って一刀じゃない！久し振りね。元気にしてた？」

「お前は相変わらず元気そうだな地和」

一刀さんを見るまではダルそうだったちい姉さんだったけど、今では会場に出ている時と同じくらいはしゃいでいた

「ねえねえ私達、これから街に買い物に行こうとしてたんだけど一刀も勿論、来るわよね？」

「ちょっとちい姉さん。一刀さんは仮にもこの国の主なのよ。そん

な暇あるわけ……」「別にいいよ」「え？」

「やったじゃあ今すぐ……きゃっ!？」

ちい姉さんが一刀さんの腕を掴んで事務所を飛び出ようとしたけど、
一刀さんが微動だにせず、倒れてしまったちい姉さんに一刀さんは
……

「ただし、定時報告が終わったらな」

と笑顔で言った

――陳留・市街地――

「ねえ〜どう似合う一刀？」

「さっきから姉さんばかり一刀を独占してズルいわよ!!! 一刀、
ちいはどうなの!？」

「……ああ、似合ってるよ二人とも」

結局、報告が終るや否や、何時から聞いていたのか天姉さんが一刀
さんを連れ拐い? 街へと飛び出してしまった

「はあく姉さん達、いい加減したらどうなの? 一刀さんが困ってる

でしょ？」

「え〜だって〜久々に一刀に会えたんだし、このくらいはね」

「そうそうたまにはこうやって羽も伸ばさないとくたびれるじゃない？」

そういいながら再び、服選びに姉さん達は没頭し始めた

「……二人はいつも羽伸ばしてはつかのくせに……きゃあっ!？」

「ほらほらせつかく一刀が居るんだし人和もうんとお洒落しなさい
!?!」

「わ、私はいい……」

「だめだめ〜女の子は好きな男の前では可愛くしなきゃ〜(ボソッ
」

「// //!?!」

そう耳元で天和姉さんに呟かれ、私はもう抵抗は出来なくなり、そのまま試着室に連れ込まれた

「というわけで一刀、しばらくそこで待ってなさいよ!」

「あ、ああ分かった……」

これから二刻ほどは弄られるとも分かっているながら……

――――

side：一刀

「……………遅いな」

あれから店の外でかなりの時間を待ったが一向に天和達が出て来ることはなかった

（なんかえらく嫉妬した地和の声がえらくこだましてが……………忘れよう）

「そこのお兄さん、少し時間いいかな？」

「……………」

「ちよつと完全無視は酷いよ！」

「……………あ、ああ俺にか？何の用だ？」

俺がぼうつと空を見上げていると綺麗な顔立ちした少女が俺にか声をかけていた

（……………声の感じ、見た目からして風くらいかな？……………）

「別に大したことじゃないけどね……………お兄さんは北郷一刀で間違い

ないかな？」

「……お前、どうして俺がそいつだと言い切れる？」

「……………ふふふ……………」

(何者だ……………こいつは……………?)

「だって、街の人に聞いたら皆、お兄さんの事を指してたよ？」

「え、ああ、そうか……………でなんの用だ？」

だが、少女の返答が思っていたのよりもずっと単純な理由だった為、俺は拍子抜けしてしまった

「ええと、最初にお城に行ったら「北郷様は街へ出掛けている」って言われたからアp……………じゃなくてただ話を聞きたかったただだよ

……………(あの英雄”北郷”のね)「

そういうと少女は俺の隣に並び、壁に寄りかかった

「……………でも案外早く見付かってよかったよ……………それで聞きたいんだけど、北郷さんはなんか夢とかあるの？」

「唐突だな……………」

「いいから答えてよ。どうせ暇なんでしょ？」

「……………まあな……………確かにあるにはあるけど夢というか約束に近いかな……………」

「ふうん……（凄い眼をしてるなあ、この人は）」

そう言うとズイッと俺に顔を近付け、不思議そうに俺を見た

「でも見ず知らずの私にもちゃんと答えてくるれんだね」

少女はその真紅の眼で俺の眼をじっと見つめていた

「……さっきのお前の眼をが真剣だったからな」

俺はそれに対して誤魔化さずに答えた

「やっぱり流石は私が尊敬する偉人だよ」

「俺が偉人なんて大袈裟過ぎやしないか？」

だが、俺の返事を聞いた少女は「そんなことないよ」と否定した

「まあいいや。話せて良かったよ……ありがとね、北郷さん。それじゃあまたね」

「……ああ、またな……」

別れの言葉と共に少女はあっという間に去って行った

（……結局なにが聞きたかったんだ？）

「一刀くお待たせ」

「今度はばっちり決めてきたわよ!!」

「あ、あの変じゃない……ですか?」

そう考えている内に天和達は着替えが終わったようで、店の中から出てきたが……

「……………」

「むう〜反応してくれないんだ?」

「やっぱり私の言うとおり、隣の服が一刀の好みだったんじゃない?」

「（また始まった……はあく全く姉さん達も私を弄る時だけは協力するんだから……でも……）」

「……………可愛い……………うん?」

「……………!!?」

ふと無意識にさっきの少女に対する素直な感想が洩れてしまっていた

「も、もう一刀ったら、最初からそう言いなさいよ!!?」

「（一刀さんってそういう事も言うんだ）……………」

「いや〜ん、一刀に褒められちゃった〜」

（多少調べてみるか……それにしてもなんで天和達はこんなに上機

嫌なんだろうつか？)

「……………某飲食店……………」

「……………一刀、おかわり」

「全然足りないわよ！…もっと持ってきなさい！…！」

「……………」

(お、重い……………)

あの後、さつき無意識に可愛いと言った言葉は天和達に向けたものではないと知った三人は激怒し、散々、文句を言ったあげく、服を全て奢らされて今はただ無言でひたすら焼売を頬張り続けていた

「あのさ三人共……………そろそろやめたほうが良くないか」

そう俺がいうたびに……………

「……………」

物凄い視線で睨まれた

(俺はこの視線を知っている……………よく華琳や風が俺に対して向けていた目だ……………俺がなにをしたっていうんだ……………)

そして結局この日は朝まで付き合わされ、城に帰ったら帰ったで
秋蘭と桂花と詠にこっぴどく辱まで叱られたのは言つまでもない

思い出と想ひ心(前書き)

今回も短くてすみません)・〇・:(

想い出と想う心

――陳留、北郷の部屋――

「失礼します。ご主人様、朝のお茶をお持ちました……あれ？」

「ん、どうしたの月？」

「ご主人様がないよ。詠ちゃん……」

「え……」

――陳留、郊外――

side : 一刀

最近になってよく昔の……華琳こと夢に見るようになり、時折こつやって感傷浸るようになっていた

(あいつに再会してからか……本当に女々しいな。俺は)

そして今日は当時、まだ俺が春蘭とまともに相手にならなかった頃、少しでも早く強くなりたくて無茶をした日のことを思い出していた

『はあ、はあ……頭がくらくらすんな。ちょっとやり過ぎたかもし

んねえ……』

陳留が見渡せる丘の上で仰向けに寝て、休憩がてらに青空を見ていたとき

『また無茶な鍛練したわね。一刀……』

いつの間にか華琳が木の幹に寄りかかり、呆れた顔で俺を見ていた

『華琳か……はは悪い、情けない姿見せちまって』

そう言った俺は無理に起きて華琳の隣に座った

『別に寝転がったままでも良かったのに……』

『いいんだよ俺がそうしたいから』

『まったくあれほど限界まで鍛練するなど注意したのに……これはお仕置きが必要かしら?』

ギロリと華琳の視線が容赦なく俺に突き刺さる

『わ、悪かったっていつてるだろう。な?』

『問答無用』

『ぎゃあああああ!?!?』

盛大にシバかれてしまい、俺は一時的に意識を失った

『……………ん……………あれ？』

次に俺が目を覚ました時には辺りは既に日が沈みかけていた

(それにしても妙に寝心地がいいような)

『ようやく起きたわね』

『……………ああ、って華琳サン…ナニシテルンデスカ？』

『何って膝枕よ』

そう、妙に寝心地が良いと思ったら俺は華琳に膝枕をされていた

『ど、どうして？』

『細やかなる褒美よ。どうせ一刀の事だもの私の為に強くなるようにしてたんでしょ？』

普段の華琳では絶対見せることのない笑顔を見せられ、俺はドキッとした

『うっ／＼／……………ああ、そうだよ。もう華琳から庇って貰うような情けない真似はしたくないから』

『一刀……貴方って本当に馬鹿ね』

『なっ、バカって言い方はないだろ！』

抗議しようとして起き上がろうとしたら華琳に頭を捕まれ、また膝に寝らされてしまった

『まだ寝てなさい！……いい一刀。貴方は才能はある方よ……それも春蘭並みのね。だからこそ逆に焦らないでじっくりと鍛え上げなさい。はつきり言っただ今の修行は意味がないわよ』

『……いきなり言われても、わかんねえよ』

そう戸惑っていた俺に華琳はまた笑うと

『私が明日から直々に指導あげるわよ』

『……い、いいのか？』

『ええ、将来的に春蘭並みの武将が手に入ると思えば安い投資だわ』

『そっか、じゃあ宜しく頼むよ……師匠って呼んだ方がいいか？』

『別に普段通りでいいわよ（ただし、やるからには徹底的にだけどね）』

思えばこの時、何も疑わずに返事をしてしまったせいで、これから約二年間、俺は地獄を味わう事とは知るよしもなかった

『分かったなら今日はもう休みなさい。明日から早速始めるから』

『おう……よつと』

俺は返事と同時に立ち上がり歩き出したが、何故か華琳が一向に立ち上がって来ない。それどころか「あ、うっ……」といううめき声まで聞こえてきた

「……も、もしかして華琳、膝枕のし過ぎで足が痺れたとか？」

俺が恐る恐る聞いてみると華琳は次第に真っ赤になり

「……っ／＼ええ、そうよ！何時もドジばかりで情けい姿を見せている貴方が私の為にそんなにポロポロになるまで本当に馬鹿ねと思いつつもそういうところは正直カッコいいとかいつの間にか寝てしまったそんな貴方の寝顔を見てたらもの凄く可愛いからついより近くで眺めたいとかそんなことはこれっぽっちも思っていないだからね！！」

高速言語で見事に混乱していた

『ほら、華琳』

『はあはあ……それ、何のつもりなの一刀？』

『乗れよ。動けないんだろ？』

『な！？／＼い、嫌よ！！』

盛大な拒否の後、最後まで華琳は乗ってくなかった……けど……

――――

「やっぱりここにいたわね。あんた」

そういつもの丘で想い耽っていると、突然後ろから聞こえた声で俺は現実に取り戻された

「詠……？」

―――数刻前―――

side:詠

あの反連合の戦から一月が経ち、私達、元董卓軍は北郷軍に引き込まれた。

霞と華雄はその実績から将にボクは一応、軍師として迎えられたが領主である月は現在……

「へうへせつかく、ご主人様の為にお茶を煎れてきたのに……」

（どうしてボクの月があんな奴の女給なんかやってんのよ……）

そんなことを話している内に練兵場に着いたけど、居るのは春蘭、
凧、霞の三人だけで今は春蘭と凧が試合をしていた

「ん、どないしたんや月に詠。こないな所まで来て？」

「えつとご主人様を捜しに来たのですが……どうやらない見たい
ですね」

私や月は軽く周りを見渡したが、どうやらないみたいだ

「一刀なら今朝、ここで軽く鍛練した後、どっか行ってたで」

「そうですか……ありがとうございます。霞さん」

「多分、方向からして外に行っただと思うから、今、街の警備やつと
る華雄に聞いてみいや」

霞の助言を聞き、今度は街へと月が向かおうとしたが

「月、私ちよつと用事を思い出したから……」

「え……あつそつか、詠ちゃんやんは文官の仕事もしてるもんね。ごめ
んね無理に付き合わせちゃったりして」

「ううん、謝らないで月」

私はそれだけ言うと、月に内緒で街へと出掛けた

（もしかしてあいつ……”また”彼処にいるんじゃないでしょうね）

——現刻——

そして案の定、あいつは居た……

「詠……?」

あいつにとって最愛の人物、曹孟徳が眠る丘の上に……

未来予知

—————

S i d e : 一 刀

あれから数刻がたった。俺は自分の部屋に戻り、今日の事を思い返していた

—————

『詠、話ってなんだ？』

急に現れたかと思えば、突然話をしたいと言ってきた

『……あんたはさ、今もそこに眠っている”曹操の約束”を果たそうと思っているの？』

『!?!?……俺はお前にその話はしたことがなかった筈だけど』

『だから言ったでしょ、あんたのことなら何でもお見通しだとね？』

意味深にフフと詠は笑い……そして

『例えばあんたの部屋にある棚の二段目の細工を外すとピ—————
《諸事情により表示できません》!?!?』

『なっ!?!?止める—————!?!?』

(ば、馬鹿な！？何故俺のトップシークレットを！?)

証明するかのごとく容赦なく暴露された

『それに××××××××ムグ！?』

『もう分かったから、それ以上は黙ってくれ……』

そのままほっとくとより暴露されそうな気がしたので慌てて詠の口を押さえた

(あ、ありえねえ……それこそ誰にも言っていなかったのに)

『ムグツムグー……!』

『あ、悪い。大丈夫か?』

と思考耽っている間もずっと詠の口を押さえっぱなしにしてたため息がでなかつたようだ

『ハアハア……こ、これでわかったかしら?』

『ああ、ただどどうしてお前はそんなことまで知ってるんだ?仮に俺の部屋を掃除していてもそこまでは把握できない筈だ』

『……(やっぱり、あんたはいつもの通りなのね)』

だが、詠は答えずただ黙り、なにかを決心したかのように

『あんたは曹操との約束である大陸を一つにする事を思ってるでし

よ？
『

『……ああ、そうだよ』

『なら、その曹操の約束なら諦めなさい』

『！？ちょっと待て。お前にそんな事を言われる筋合いはない！！』

その詠の一言で俺は一気に熱くなってしまった

『そうね。確かにあんたの言うことは最もだわ。でもね……私だつて理由もなしにこんな馬鹿げたことは言わないわよ』

『理由？……』

『ええ、だからもう曹操との約束なんて忘れて、あんたらしく過すすといいわ』

『っ！！』

俺は沸点は低くないほうだと思っていたが、その言葉は俺をキレさせるのに十分すぎた

『あまりふざけるなよ詠？いくらお前でも言っていることと悪いことがある』

『……やっぱりこの程度じゃ』

返事はなくボソボソと詠は呟き続けていた

『どうやって俺と華琳の事を知ったのかは知らないが、月をあれほど慕っているお前なら解る筈だろ?』

『だからこそよ。これからあんたは曹操とのその下らないやくそく（バシンー!）うっ』

気がついたら俺は詠の頬を全力で叩いていた。その結果、詠は派手に倒れてしまい眼鏡も飛散してしまっただが俺は気にせず

『立てよ詠……どうして俺にそこまでしてお前は俺に諦めさせたいんだ。言え、命令だ』

『……あ、あんたと私は同じで友の為なら平気で命を張れる……だからこそこの先起こる大戦で……』

『!?!?お前……』

顔を上げた詠を見て、驚愕した

『その約束という呪縛に縛られ、あんたが死ぬからよ……』

その瞬間、上がっていたはずの熱が一気に冷めた

「俺が死ぬ……か。あいつには未来が見えているのか？」

あり得ないと自分で思い、俺はそのまま、布団に身体を預けて倒れた

で)
(……ただあいつあの時、泣いてたな。それもあんなに傷付いた顔

「……結局、詠は俺に何を言いたかったんだ？」

トントン……

しばらく考えていたら不意にドアをノックする音が聞こえた

(この気配は……月か?)

「入っていいぞ」

「失礼します。ご主人様……あの少しお時間よろしいでしょうか？」

俺は起き上がり、入ってきた月を見たが

「ああ、どうしたんだ？」

何時もの穏やかな雰囲気ではなく、珍しく怒っていた

「無礼を承知で申し上げます……ご主人様、詠ちゃんに何をしましたんですか!？」

「……詠がどうかしたのか!？」

「とぼけないでください！詠ちゃん、部屋に戻ってきたときから泣いていて、理由を聞いたら”あいつが”と言ったんです。詠ちゃんがあいつって言うのはご主人様しかいないから」

「それで俺のところに来たわけか……」

少し叫んで落ち着いたのか月はさっきよりは穏やかな声で

「何があつたんですか？私がない間に」

「いや、それが俺もよく分からないんだけど……」

とりあえず月に今日の詠とのことを話して見たら、月は妙に納得した感じになり

「という訳なんだが……」

「もしかしたら詠ちゃん。また……」

「また、何か心当たりでもあるのか？」

「実は詠ちゃんは私が領主になった頃から未来予知的な部分を多く見せるようになったんです」

それから月は昔、涼州にいた頃から連合が組まれる前までの事を話してくれた

「……だから詠ちゃんはすんなりご主人様に協力したのかも知れませんがね」

「連合の時か？」

「詠ちゃんは一、二倍、警戒心が強くて簡単には人を信用しないんです。でもご主人様にはすぐに協力したのもその」

「未来予知で俺達を見極めていたと？」

「……はい」

確かに月の言うことは嘘を言ってるようには聞こえなかった所かむしろ真実味が強かったが

（だったらどうしてあいつは華琳の事を知っていた？それにどうしてあの時、泣いたんだ？）

詠は暴力だけで泣くようなやからではない。だからこそその疑問だ

「なににせよ詳しく詠から聞くしかないな……」

そう思った矢先、今度は別の足音が俺の部屋に近づいてた

「大変です一刀様、袁紹が動き出しました！」

桂花が息を散らしてで報告してきた

――玉座の間――

袁紹が攻めてきたという報告を受けた俺達は現在、緊急会議を開いていた

「それで袁紹軍の戦力はどの位だ？」

「うむ、現在確認出来るだけでも袁、文、顔の三つ敵の主戦力、合計三万と情報がある」

秋蘭は特に慌てず、ただ得られた情報を淡々と俺に伝えてくれた

「それで報告にあった城の兵力はどのくらいなのだ？」

「だいたい七百と言ったところね」

「はあ！？それではまともに戦えんではないか！？」

桂花が城の戦力を春蘭に伝えると春蘭話して早速動き出そうとしたが

「落ち着け、春蘭！」

「（ゴン！）痛っ、な、何をするんだ一刀？」

とりあえず痛がる春蘭は無視した

「桂花、今からだど、どれくらい兵を出せる？」

「いくらなんでも敵の動きが急ですから、敵の行軍速度、城の距離からして二万ぐらいしか……」

「ちっ、少ないな。だが言ってもしょうがないそれで」

準備をと言おうとしたとき秋蘭が遮り

「それがな一刀、向こうの指揮官が兵の要らないと言ってきてるのだが」

とんでもないことを伝えてきた

「無茶だ。いくらなんでも三万と七百では」

春蘭は納得せず否定したが、俺は一つ気になり秋蘭に聞いてみた

「……秋蘭、その城の指揮官の名は？」

「あ、ああ、確か程？と郭嘉だった筈だが……」

「！そっか、なら桂花。兵は送らなくていいぞ」

「か、一刀様！？」

「なに言ってるんだ一刀！？」

「秋蘭、そいつらには袁紹が帰った後、ここに来るように伝えておけ」

「む……承知した」

だが、仲間思いの春蘭は当然納得せず

「待て一刀。そいつらが無事にここに来れるという確証は無かろう？」

「春蘭、それに皆もよく聞け、これに関しては兵を勝手に動かすな。これは命令だ」

それだけ言うと俺は玉座の間を後にした

「一刀……くっ」

「……とある城……」

「向こうから返事が来たわよ。増援は送らない代わりに、城まで会いに来いって」

「了解しましたーと返しておいてください」

「これで生き残ることができれば……」

「ようやく約束を果たせそうですね」

強き意志、疲弊する心

――陳留、城内――

「どうしても止める気が霞？」

「当たり前や、一刀の言うことたこともう忘れたんか？」

「ならいくぞ――！」

――

side:一刀

あの会議のあと、俺は普段通り政務へと励んでいた

「おい一刀、本当に援軍を送らなくていいのか？」

いつものように秋蘭が新たな資料を持ってきて、それと同時に今回の件を掘り返してきたが

「だから大丈夫だって言ってるだろう。あいつらが増援は要らないって言ったらそれでいいんだよ」

「……む、随分とその程イクと郭嘉を買ってるんだな？」

何故か少し不機嫌になった秋蘭はさらに質問してきた

「まあ、あいつらの凄さは俺はよく知ってるからな。だからあんま心配しなくていいさ」

「お前がそう言うなら……」

とだけ秋蘭は言うつと部屋を去っていったが、それと入れ替わるように

「一刀様、大変です！！春蘭様が兵を……」

凧が入ってきて、春蘭が兵を引き連れあの城に向かおうとしている最中だと報告してきてくれた

「はあゝあのバカ……すぐに案内してくれ凧」

「はい！！」

(全くたまには大人しくしといてくれよ。春蘭)

—————

「せやあつ！！」

「はああああ—————！！」

「おい、何、殺りあってんだ二人とも？」

「か、一刀！？」

俺が声をあらげて止めにはいると春蘭は丁寧に返事をして、それによって隙が生まれた

「今ええとこなんやから、邪魔すんなや一刀!!」

「ぐあっ!?!」

当然、そんな隙を霞が見逃すわけもなくそれによって春蘭は武器を弾き飛ばされた

「ウチの勝ちやな」

「な、今のは「黙れ春蘭!」ギャ……な、何をするんだ一刀!?!」

「それで何をしてたんだ二人とも?」

素直に敗けを認めようとしない春蘭に活を入れ、とりあえずその場を落ち着かせた

「……一刀、私はただあの袁紹ごとき華琳様から受け継いだこの地を汚されることが許せんのだ……だから」

「だから俺の言い付けを無視して兵を勝手に動かしたと?」

「そつだ。それにこれはお前を思えばこそだ。だからお前の命令に背き頸をはねられようが私は後悔しない!!」

春蘭の後悔しないという言葉は俺を動かすのに十分だった

「……分かったよ春蘭。出撃していいぞ」

「一刀!!」

「ただし、兵はお前の最精鋭の三百までな」

「な、一刀!?自分まで何言つとんねん!？」

「そうです。無茶すぎます!!」

「向こうの兵と合わせて大体、千になる。後は春蘭の決死の覚悟が埋めてくれるぞ」

「……………」

当然、事情を知らない霞と凧は反論してきたが、春蘭は

「どうなんだ春蘭？」

「…………お前がそこまで私の力を信じてくれるのなら私は突き進むのみだ!!」

「駄目です。春蘭様!？」

「私同様の覚悟が有るものだけ続け!!ただし城門を三百を越えた時点でその者達は置いていく……………出撃!!」

凧達の制止も聞かず、春蘭は早々に出撃していった

「一刀、酷すぎや!いくら春蘭かてたかが千で三万は無茶やで!？」

「いいんだよ。どうせもう終わってると思うし」

「は？それってどういう意味や？」

「ま、次の夜明けまでには分かるだろうさ」

結局、軍義の時と同じようにつやむやのままで終わってしまった

――城内、とある一室――

side：詠

「ハア、何でこうなっちゃったんだろう」

あいつと話して数刻が経った頃……ボクは焦ってついケンカしたことを後悔していた

（別に一刀とケンカをしたかった訳じゃない……ただボクは）

そう思うとまた目が熱くなってくる

（……いつからだろう無駄だとわかっていてもこんなに必死に抗い続けてるのは？）

そう自問自答してみるが答えは当然帰って来るはずもない

「……こんなところで寝てる場合じゃないのに」

(やっぱり不幸から逃げられないのかな？ボクは)

今日はもう動く気は起きず、ただ嫌なことを忘れるように眠るだけだった

ガチャ……

その時、不意に扉を開ける音がしたけど、どうせ月だと思い、そのまま寝ようと思ったけど

「詠、ちよつといいか？」

「!?!?」

部屋に入ってきたのは月ではなく一刀だった

「かず……な、何の用よ!?!」

「いや、あの後さ月からお前の事を聞いてさ、もう一度ちゃんと話すべきだと思ってここにきた」

顔を見なくても分かる。このときの一刀の声は真剣そのものだったことが

「……………もう”あの時”の用にボクの話を最後まで否定せずに聞いてくれる?」

「ああ、俺はお前の話を最後まで聞く」

こんな展開は初めてだった。だからボクは我慢できなかったのだろ
う

「……………う……………う……………」

「詠？」

それから少しの間、ボクはみっともなく泣いてしまい、いきなりで
初めは戸惑っていた一刀だが

「うう……………！」

不意に優しく抱きしめてくれた

(あ、久しぶりね。こいつの温もりに触れるのは……………)

—————

「……………ありがと、もう平気よ」

「そっか、だったらもう大丈夫だな」

そういつてボクから離れようとするけど

ギュッ……………

「え、詠さん？」

あまりに久しい温もりをまだ手放したくなかったから離さなかった

「もうしばらく味あわせなさいよ（本当に久しぶりなんだから）……」

カチャ……

そうやって調子に乗ったのが不味かった

「詠ちゃん、私ね……詠ちゃん……とご主人様？」

「ゆ、月!?!」

突然、部屋に入ってきた月が見た光景はボクが一刀の胸に顔を当てていて、互いに抱きしめあつてる光景だった

「……………」

「……………えっと、月?」

「へ、へう!?!?」
「ごめんなさい!?!」

そういつて月は脱兎のごとく部屋から走り去ってしまった

「えっと、どうすんだ詠?」

「……………/ノノノ、どうもごうも追いかけるわよ!?!」

（……………やっぱり不幸なのは免れないのかもしれない……………）

――城壁付近――

side：一刀

どこかへ走り去ってしまった月を手分けして探していると城壁の上で見慣れた顔を見掛けた

(……あれは季衣と流琉か?)

そういえば賊討伐に出ていた二人には話してなかったなと思い城壁の上へと行ってみた

――

「一刀様の馬鹿……」

「季衣、もうずっとそればかり言ってるよ」

「だってあれほど春蘭様は一刀様の事を思ってるのに一刀様は春蘭を死に行かせるなんて」

「大丈夫だよ季衣。だって私は春蘭様が殺されたって死ぬように思えないもの」

「そうだけども」

(なるほど、こりゃ重症だな季衣のやつも)

流石にこれ以上の盗み聞きもなんだし、俺は季衣と流琉の前に出て
いった

「季衣、流琉。ここにいたんだな？」

「「か、一刀様!？」」

案の定、二人は最初こそは驚いたが、すぐに季衣は俺に詰めより

「どうして春蘭様にあんな無茶な命令をしたの!？」

「き、季衣……」

季衣は涙目になって抗議した時、ちょうど城外にあるものが見えた

「別に無茶な命令じゃないよ。それよりそろそろ城門を開ける準備
をしときな」

「え、それってどういう……!」

俺が城外を見るように促すと季衣はみるみる表情が変わっていった

「ほら、ちょうど帰還してきたぞ」

そこには出発前と変わらなかった春蘭の姿が見えていた

side:詠

「はあ、はあ……ようやく見つけたわよ月!？」

「え、詠ちゃん……ご、ごめんね」

月はいきなり謝りだした

「ど、どうして謝るのよ?」

「だ、だって詠ちゃんがご主人様の事をあんなに好きとは思わなくて、それで……」

そして顔を真っ赤にしてとんでもないことを言い放った

「ご主人様と愛し合ってる最中に邪魔してごめんなさい……」

「はい?」

そしてまた真っ赤になって走り去る月

「……ふ、不幸よおおお——————」

何故かそう叫ばずにはいられなかった

二つの再会（前書き）

少し更新遅れてすみません

二つの再会

――城内――

side：一刀

「春蘭様〜〜〜!!」

「お、おお季衣か……」

無事、帰還した春蘭が城に入るや否や、季衣が抱きついていて

「無事でよかったですよ……て、あれ、春蘭様は闘っていないんですか？」

「ああ……まあな」

抱きつきっぱなしの季衣は春蘭の鎧が汚れてないのに気付いた

「だから、言っただろ。ぞうえ「お兄さ〜ん!!」「ぐはあ!?!?……」

「こ、こら風。一刀殿に失礼でしょう?」

場の雰囲気ので気を抜いてた俺に突然、抱きつかれた(タックルを食らわされた)

「……稟ちゃんは嬉しくないんですか?久しぶりにお兄さんに再開できて?」

「そ、それは／＼／＼……………」

「取り敢えず風。退いてくれな——」

依然として抱きつかれたままだったが不意に後ろから悪寒がし

「一刀！お前という男はああ——！」

「ま、待て春蘭。落ち着いて俺の話を……………」

「うるさい、取り敢えず斬る——！」

「どうしてお前は俺の「この馬鹿×××——！」ぐはあっ——？」

取り敢えず斬りかかってきた春蘭の上段斬りを手首を掴むことで防いだ。だが、別の方向から来た奇襲には対応できずに吹っ飛ばされた

「あんたは私が真剣に悩んでそれでも不幸な目にあい続けているというのに、なにイチャついてんのよ——！」

そして倒れた俺を激しく踏み続ける詠に

「い、痛い痛い、止めてくれ詠「覚悟しろ、一刀！」…………しゅ、春蘭？」

理不尽の塊、春蘭も加わり、二人はしばらく無抵抗の俺を攻め続けた

――二刻後、玉座の間――

あれからいろいろあったが、何とかその場を落ち着かせることができ、ようやく本題に入れるようになった

「……取り敢えず、説明してくれるか？何故、増援がいらなかったかを」

「はいはい」

そうやって気の抜けた返事をした彼女の名は程？。真名は風といい、あの城の指導者の内の一人だ

「……えつとですねー、相手は数万の兵を有する袁紹軍だったので。指揮官が派手好きの文醜さんですから、あんなの千にも満たない私たちなんか相手にしたくないだろうと思ったわけです」

「……なるほど」

春蘭は風の説明に珍しく理解してるようで何度も頷いていた

「ですが、もしお兄さんが増援したなら向こうがケンカを売られたと思いますよねー？」

「あの袁紹達のことです。売られたケンカは絶対に買います。そう

なつたらこちらは全滅してしまいます」

「へえよくわかつているじゃない。あのろくでなしの連中の性格を」

風の説明に付け加えたのは郭嘉。真名は稟といい、彼女も先の風同様に指導者

「という訳だよ。春蘭」

「むゝだが、もし袁紹がその城に総攻撃を仕掛けてきたらお前らはどうしたのだ？」

「そしたら確実に逃げ切れなくて死んでたでしょうね」

「ですが軍全体から見ると城一つと兵七百の損失だけですみます。だから……」

と、突然、凜の説明を聞いていたら言葉が止まり、何故か顔を真っ赤にしていた

「大丈夫か、稟？」

「……………ぷはっ」

そしていきなり鼻血を吹き出した

「お、おいどうした!？」

「だれでもいい、医者を呼べ!」

「ボクが呼んできますー!!」

「あ、大丈夫ですよー。ほら、稟ちゃん、とんとんしますよ?とんとん」

と、俺を含め、皆がパニックつてると、一人だけ落ち着いてる風が慣れた手付きでぐったりして倒れてる稟に治療をし始めた

「はうう……す、すまん」

「あの、持病か何かを持っているんですか?」

「いいえ。稟ちゃんの場合は「ほら稟。顔に鼻血が付いてるぞ?」

あ、駄目ですよーお兄さん!？」

たまたま近くにあった手拭いで稟の鼻血を拭き取ろうとしたら、風の制止が入ったが

「か、一刀殿に顔を……あ、いけません……そこ、顔じゃ……
……ぷっは……」

時すでに遅し、俺は盛大に鼻血をぶちまけられ、着替えを余儀なくされた

(久々に二人に再会して、なんも変わんないな?とか思ってたら稟の身に何が起きたんだ?)

――半刻後――

「つまりですね、この稟ちゃんは一年以上前からお兄さんのことが好きになっていたんですが、自身の妄想癖のせいで好きになりすぎてしまっただけです」

「結果、一刀の事を考えるとああなったということか」

「そういうわけです」

俺が戻って来るとどうやらちょうど説明をし始めていて、おおよその事情は理解できた

「なんつつか、大変だなお前も？」

「うぐ……す、すみません……」

本当に申し訳ないと稟は再度、謝り、風の隣に戻っていった

「それでだいぶ話は逸れたけど結局、二人は増援が要らなかつたんだらう？」

「……はい、もし攻めこまれた時には城に火を放ち、逃走を計ろうと考えてました」

「でも、増援で兵が増えちゃうと逆に動きづらくなっちゃうんですがねー」

「と言うことだよ春蘭」

「うう……まあ分かった」

しばらく春蘭は考えていたようだけど、やがて諦め、ちよつど報告を受けた秋蘭が伝えてきた

「一刀、さつき報告で袁紹達は引き上げたそうだ。それにこちらの損害はなく、地形を確認されたぐらいだ」

「そつか、よくやってくれたな。風、稟」

「ありがとうございますー」

「いえ、当然のことです」

依然として对象的な二人だった

「なら、皆も二人の実力が分かったと思うし、これから風と稟は城に戻らないで俺の軍師として扱うからな」

「か、一刀様!?!」

と、言ったらある意味予想通り、桂花が驚いていた

「いや、別に桂花が要らないというわけじゃなくて、最近、軍もかなり大きくなつたし、複数の戦局を指揮できる人材は必須だ。桂花

なら一番、理解してるだろ？」

「私はいくつの戦局でも支えれます」

「そうやって無理して自ら滅んだ軍師は一体、何人いるんでしょうねー？」

「く……知った風な口を……」

俺や風に止められて尚も引き下がらない桂花

「それに桂花。最近、よく眠れてないだろ？俺はお前にそうなって欲しくない」

「で、でも一刀様」

今まで、軍師の仕事を一人でこなしてきた桂花は詠に仕事を譲るときも渋っていた奴だ。これ以上は桂花なりに譲れないものがあるのだらう

（今まで期待されなかった故の反動なんだろうが、それで壊れちゃ意味ないしな……）

「風、凜。今日から仕事は出来るか？」

「当然です！！」

「もちろんですー」

二人は全く渋らず即答してくれた

「だったら、今日から早速、やってくれないか。それで最終的に判断したい」

「「御意！（です）」」

「それと詠。お前は補佐についてやってくれ」

「それはいいけど、そいつはどっすんのよ」

詠が指を指したのは俺の腕の中でもがいてる桂花

「ああ、こいつには休みも兼ねて俺が言い聞かせとくから」

「一晩かけてな、と桂花だけに聞こえるようにいい、俺は真っ赤になった桂花を連れて出ていった」

「――数日後――」

その後、二人は晴れて俺の軍師になることができ、今は二人を連れである場所へと訪れていた

「……着いたぞ」

「ここがそうなんですか？」

「……ああ、ここに華林は眠っているよ」

「」……「」

どうして二人をこの場所に連れてきたかという話は昨日に遡る

~~~~~

『華林に会いたい?』

『はい』

その日は三人同じ部屋で政務をこなしていたとき、ふと稟が質問してきた

(ああ、やっぱり聞いてきたか……まあ隠すつもりもなかったし……)

『……分かったよ。華林には会わせる。ただしその前に知ってほしい事が『華林ちゃんが亡くなったことですか?』!?……知っていたのか?』

『やっぱりそうなんです……思ってた通りです』

風と稟は二人して想像が確信へと変わったみたいだ

『……なんで分かったんだ?』

『簡単ですよ。風はこうみえて観察が得意でして、お兄さんの軍もよく観察してましたが、華林ちゃん性格や癖などいろいろ知ってる風達は違和感を感じたのです。』

『それで風に一刀殿の軍に違和感を感じるので調べて下さいと言われたのでいろいろな角度から見た結果。華林殿らしくないと……』

『まあ、ほとんど推定ですけどね。』

それを聞いた俺は改めて二人には叶わないなと思った

『……そっかだったら、早い方がいいな……明日、そこに連れていってやるよ。』

こうしてかつて華林の友達であった二人をあの場所に連れていくことにした

~~~~~

「……………」

「……………」

二人はずっと黙ったままでしばらく沈黙が漂っていたが……不意に稟がそれを破った

「……華林殿。貴女は酷い人ですね。あれだけ私に期待させておいて、一人で勝手に逝ってしまわれるなんて」

「稟ちゃん……別に泣いてもいいのですよ？」

「……う……だ、誰が……」

俺は二人に声をかけようとしたけど、なんにも言葉が思い浮かばず、ただ悲痛な二人の背中を見ているだけだった

決別の夜（前書き）

また、更新が大幅に遅れて申し訳ありません。

決別の夜

――劉備軍、陣営――

side：愛紗

先日、国境付近に迫ってきた袁術軍を排除すべく、出陣した我らは予想以上の苦戦を強いられたが何とかしのぐことができた

「おつかれさま、愛紗ちゃん」

「ありがとうございます」

我が主、桃香様に出迎えられて本陣へと戻り、ほんの少しの休息を取っていると天幕が開いた

「お疲れ様です、愛紗さんのおかげで袁術軍の第一波を退けることができた筈です」

「大軍が来たって報告を受けたから、心配だったけどこれなら何とかかなりそうだね」

「……ですが、次は袁術軍の本隊と孫策さんの軍が来る筈です」

「孫策軍か……手強いな」

「はい、ですがこの孫策さんを突破することができれば我が勝利は見えてきます……それに策も一手用意しましたし」

「一手？」

朱里はすぐにそれについて軍義をしたいのと言うと私の天幕から出ようとしたとき、外から別の者が入ってきた

「ここに居られたか、桃香様、朱里！」

「どうした星。そんなに慌てて？」

珍しく息を切らした星が次に言った言葉は私達を驚愕させた

「はあはあ、どうしたこうもない！袁紹が攻めてきた！！」

「え、袁紹さんが！？」

「あ、あれ？袁紹さんって確か北郷さんの所にいつてなかったっけ？」

その報告を受けた朱里や桃香様は動揺した

「星、それなら城はどうなっておる！？」

「城の者なら大丈夫だ。それと連中はまだ国境を越えたばかりだ。城では伯珪殿が雛里とともに籠城の準備をしているが……正直、勝ち目は見えそうに無いがな」

「どうしよう、朱里ちゃん……」

「と、ともかく、今の進軍を退けたから、夢亜さんと鈴々ちゃんを呼ぶ戻してそれから作戦を練り直さないと……」

あの袁術相手に見えてきた勝利はもろくも崩れ去ろうとしていた

――陳留、城内――

side：一刀

風と稟を部屋に別れた後、俺は自分の部屋に戻り、ただ寝ていた

「……………」

『お兄さんは華琳ちゃんとの背中を追うとして華琳ちゃんに成りきるうとしてるみたいですが、なんでそんな無理をしてるんですかー』

『一刀殿。貴方と華琳殿と何の約束を交わしたか知りませんが、一刀殿には一刀殿の良さがあるはずですよ』

思い出すのは再開した二人の友の言葉ばかりでその言葉は俺を悩ま

せるのに十分だった

(俺は今までそうやって生きてきた……けど、それは全部)

「くそ……」

そう思っている時に不意に部屋のドアが開いた

「あの、一刀様。急を要する事態起きてまして……今、大丈夫ですか？」

「ん、ああ、大丈夫だ。それよりなんだ用ってのは？」

「はい、実は劉備からの使者が来まして……」

「劉備からの使者？」

——劉備軍、陣地——

side: 愛紗

袁術軍が引くと同時に前線で戦っていた鈴々と夢亜を戻し、袁術と袁紹に対する軍議を開いていた

「……袁術も本気で来る様子か」

「はい、明らかに袁術軍の動きが先ほどよりも活発になってきてますし、おそらくは袁紹さんが少なからずかわってるせいかと……」

「それにさっきの戦いで兵のみんなも疲れてるし、さっきよりの大軍を今の人数だけで、戦うとなるとちよつと厳しいかな？」

朱里の後に発言した彼女は東成夢亜とうせいむあといい、私たちが旗揚げ当初に出会ったが本人の希望で大陸を回りたいと言ってしばらく会ってなかったが、先日、我が軍に戻ってきた

「それに城のこともある。今は伯珪殿と雛里がいるとはいえ、城の兵だけではあの大军である袁紹は防ぐことは難しいだろう」

「……………」

「朱里ちゃん。何か打開策とかないの？」

「あるにはあるのですが……やっぱり駄目です！この策を実行すれば、きっと沢山の犠牲が出ちゃう上に皆さんも……」

「しかし、この窮地。乗り越えるためには多少の犠牲は……」

「星！お前……まさか」

「しかしな、愛紗よ。こうなってしまった以上はもう仕方あるまい」

「そ、それは……」

星の当然過ぎる返答に私は、なにも言えなくなってしまった

「朱里よ。その策私に預けてくれないか？私が実行して見せよう」

「星さん……」

「私なら大丈夫だ。お前らは桃香様を守らねばならぬしな。だが渡し一人ならどうとでもなる……」

星の決意に私や朱里、夢亜は受け取ってやろうと思っていたが、桃香様だけは違った

「駄目だよそんなの……駄目に決まっているよ……！」

「しかしな、桃香様。他に生き残る策が無い以上、こうするしか……」

「……あるよ。ひとつだけ」

「まさか降伏とか言わないよね。桃香？」

「ううん。降参なんて考えてないよ。袁紹さんのやりかたは絶対に間違ってるから……」

「だったら何があると言つのです？」

「朱里ちゃん、前に言ってたよね……」

「はい、何ですか？」

そして朱里ですら考えもつかない策が実行されることになった

――陳留、玉座の間――

side：秋蘭

大分、夜も更けていた頃、緊急会議と言って一刀とよばれた私たちは寝ていたところを桂花に叩き起こされた

「みんな悪いな、こんな時間に」

「……で何の用だ？」

若干、寝起きで不機嫌気味だったが一刀の真剣な雰囲気をつ捉えた皆はすぐにその空気も変わった

「ああ、集まってもらったの他にもない。桂花」

「先ほど早馬で、徐州から国境を越える許可を求めるものが輩が来たわ」

「まあ、俺らが説明するより本人からの説明がいい……入って良いぞ」

「……は」

それは予想外の人物が現れた

「……な、関羽？」

「まあ、ほとんど知ってると思うけど、自己紹介してもらおうか」

「我が名は関雲長。徐州を治める劉玄德が家臣にして、その大業を支える者」

「なんで関羽がこないなとこに……」

「私たちのところに来たということは救援でも求めに来たというのか？」

「春蘭にしては惜しいけど少し違うな。説明してくれないか愛紗？」

姉者が私にしてはなんだー！！と言ってたが一刀は軽く流すと関

羽が続いて説明し始めた

「私は、北郷殿の領地の通行許可を求めに参りました」

「ああ、そついうことですかー」

「……通行許可とはなんと無謀なことを実行するものですね」

「つまり、どついうことなのだ？」

軍師連中や察しの良い者は気づいたようだが、それ以外の姉者などはまったく気づいていなかった

「要するにですねー袁紹さんや袁術さんと正面からぶつかるより、風達の領地を越えたほうが危険は少ないという判断をしたというわけですよー」

「風の言つとおりだ。でも愛紗は正直、この案に納得してないみたいだな。そんな相手に返事をする気になれないから……劉備に直接会いに行こうと思ってる」

そして国境付近に待機してるといふ劉備に会うために行軍の準備が始まった

「なんだ。結局みんな着いてくるのかよ」

「当然だ。私はお前の剣だぞ。剣がそばに無くてどうする」

「ふ、まあそうだな」

夜通しで行われた行軍だが、結局いつもと同じ速度で準備が終わり、そして当然のように行われた

（まあ、それが一刀の人望が成せる業か……）

「……感謝します。一刀殿」

「それはうまく事がすんだらの話だがな」

「え、それはどういう？」

「一刀様！先鋒からの連絡で劉備軍を発見できました……どうしますか？」

と、桂花からの連絡が届き、間もなくして劉備の牙門旗が見えてきた

（本当に国境付近に滞在してるとは、無謀すぎるな

「なら、愛紗。劉備の元に案内にしてくれ。それと春蘭と秋蘭に季

衣、流琉それに稟は俺とともに同行し、残りは桂花を中心に待機だ」

「ま、待つてください！いくらなんでも危険すぎます……もし毘だつたら」

「大丈夫だつて、まったく心配性だな」

とすかさず桂花が止めに入ったが一刀はそれを軽く流すと劉備軍のところへと向かっていった

「――劉備軍、陣営――」

関羽に案内され、劉備軍の陣営を歩いて行くところには前と変わらぬどこか気の抜けた顔をした劉備が待っていた

「お久しぶりです北郷さん」

「久しぶりだな。連合のとき以来だな」

「はい、あの時はありがとうございました」

「それで今度は同盟も組んでない相手の領地を通りたいという無謀な事をいつてきたもんだな？」

一刀が劉備にとっては痛い部分を突かれてその本人も申し訳なさそうな顔をしている

「……まったくお前の行動にはいつも驚かされるよ」

「すみません。普通ありえないことをやっている自覚はあります……でもみんなが無事に生き残るためにはこれしかなかったんです」

「皆が全員生き残るためにこんな無謀を実行するか……いいよ。俺の領地を通っても」

そして誰もが普通拒否するであろう事を一刀はあっさり許可し、周りの者を驚かせた

「え、本当ですか！！」

「一刀様。まだ劉備からは何も聞いておりませんが……」

「聞かなくても分かるさ、劉備の考えはな」

「ありがとうございます。北郷さん」

「ただし、街道はこちらで指定し、監視もつける……すぐに不審な行動を取ればちゃんと死んでもらうからな」

条件までつけて交渉がこのまま終わるかと思われたが

「それから通行料は……愛紗でいいよ」

「え……それって」

あまりにも早すぎる一刀の決断には将の引き渡しという条件があった

「何を不思議そうな顔をしているんだ。行商人だって通行料ぐらい払うだろ？それと一緒にじゃないか」

「で、でもそれだと……」

「劉備、お前の望みは全員が無事に生き残ることだろ？経過はどうあれ結果、たった一人の将の身柄でお前の望みは帰られるんだぞ」

「桃香様……」

他の劉備軍のみなは不安そうな表情を浮かべて劉備を見渡していたが、すぐに答えが出たらしく一刀を見ると

「北郷さん。ありがとうございます……でも、ごめんなさい」

「……理由は？」

「私にとって愛紗ちゃんは大事な妹です。それに他のみんなも大事な家族なんです……今回の作戦はそんなかけがえの無い、みんなを誰一人欠けさせないために実行したんです。だから愛紗ちゃんがいなくなるんじゃ、意味無いんです……本当にごめんなさい」

劉備は頭を下げ、諸葛亮にもう一度、経路の候補を洗い出してもらっていた

(さすが人徳の王と世間から呼ばれることだけはある……この様子だと一刀は了承するだろうな)

おおかたこの予想は外れはしなかったと思っていたが、それは違った

「なあ、劉備」

「はい、なんですか？」

「甘えるのもいい加減にしろ!!」

その瞬間、過去にも聞いたことの無いくらいの怒鳴り声を一刀は出していた

「たかが将一人のために全軍を犠牲にするだと……あまりふざけたことを言っただけじゃないぞ？」

「え、えつとあの……なんで……」

私は一刀の様子を見てなんとなく言いたいことがわかったが、当の劉備本人は何で攻められているのかわかっていないようだった

「どうやら、わからないみたいだな……もういい、お前と話をしてもこれ以上は意味がない。おい、愛紗」

「あ、はい、なんででしょうか？」

突然、一刀に呼ばれた関羽は最初は戸惑っていたようだが、すぐに警戒気味に返事を返した

「お前に二つ選択肢をやる。このままここに残り劉備達とともに死ぬか、俺の軍に降り、劉備を生き残らせるか……どちらか好きなほうを選べ」

「「!」」

「な、一刀!お前何を言ってるんだ!？」

「少し、黙ってる春蘭。俺は愛紗と話してるんだ」

劉備軍が驚愕する中、姉者が止めに入ったが一刀はそれを無視し、関羽だけを見ていた

「……私は……」

「あ、愛紗ちゃん？」

そういつと関羽は劉備の方を向き、そのまま黙っていたが、しばらくしてこちらに向きなおした

「私は桃香様を信じます……だからその時までにはあなたの元でこの武を振るいましょう」

「愛紗ちゃん。何を言ってるの!？」

それは想像していなかったのか劉備は混乱していたが、関羽は気にせず、言葉を続けた

「桃香様。私はあなたがこの先の乱世を生き残り、そして私を迎え

に来てくれるその日に賭けます……だから今は生きてください」

「そんな……駄目……だよ……そんなの……」

そのまま、崩れ落ちる劉備を後ろに控えていた金色の髪をした女が抱きとめていた

「愛紗。本当にそれでいいの？」

「ああ、構わない……夢亜。それまで……として鈴々や他の皆と共に桃香様を支えてやってくれないか？」

「……うん、わかったよ」

関羽はその女に後を託すように言った後、涙目の張飛が訴えてきた

「愛紗、どうして……そ、そんなにあっさりと決めるのだ？」

「さつきも言っただろ？鈴々。私は桃香様を信じていると」

ひとしきり張飛の頭を撫でると、劉備の陣営から背を向け、それはまるで決別を意味しているようだった

「ま、まって愛紗ちゃん！？どうして離れる必要があるの！？私のどこが駄目なのか言ってくれた直すから……行かないでよ。愛紗ちゃん」

だが、やはりというべきか劉備はそれでも納得いかずに食い下がり、それに対して私も無意識に怒りを覚え始めた

(劉備はわかってないのか？信じる主の元を離れる家臣の気持ちを……)

「桃香様。分かってください……今はここで争っては生き残れませ
ん。だから……」

「でも!」

「もういい……」

「私は、うつ!」

「な、一刀殿!」

「桃香を離せ!」

「おい、それ以上は振ると死ぬぞ」

「くっ……」

それまで終始、無言だった一刀は小さくつぶやいた後、しつこい劉備を組み倒し、周りの将は一触即発の空気になり、そしてあの時の以来、聞かなかった一切の感情を捨てた冷たい声で

「劉備、お前は弱いな……よくその弱さでここまでこれたもんだ」

「っ……わ、私は」

「愛紗を返して欲しかったから俺と対等になってから奪いに来いよ……対等でもない奴が、公平に話を聞いてもらえらると思つなよ……」

負け犬が……」

「！！……ううっ……」

「跡で街道の指定をする。もうこれ以上は意味無いな……帰るぞ」

劉備はつい耐え切れなくなったのか涙を流し始め、そして私達は無言で帰り始める一刀に着いていくしかなかった

side: 夢亜

北郷一刀達が去って結構な時間が過ぎていたがまだ私達はその場に居た

「大丈夫だよ。私がそばに居るから……ね？」

「……………」

桃香には決して小さくない傷が心に付いてしまった……でも、もう私達は前に進むしかない。だから

「私が導くから桃香を……でも、今だけは泣いてもいいから明日からまたがんばる？」

「……………（コクリ）」

私が導くんだ。愛紗の代わりとして、天の御使いとして……

消え去った儂い記憶（前書き）

い なんかもう一部のキャラが原作っぽくない気がするのはご了承ください

消え去った儂い記憶

—————

side：愛紗

「……圧倒的過ぎる……これが北郷軍か」

桃香様の元を離れ、一刀殿の元に来て、すぐに始まった袁紹との戦が始まったが……

「久しぶりだな。袁紹？」

「……くうう、この私がこんな野蛮な者達にいいい」

開始早々、そう時間もたたぬうちに北郷軍の勝利で終結してしまった

「聞く耳もたずか……まあいい、お前には少し頭を冷やしてもらおう……牢にぶち込んでおけ」

「はっ！！」

「は、離しなさい！！あなた方のようなああああー！！」

近くに居た一刀殿の兵士が騒ぐ袁紹を無理やり連行していった

「一刀、周辺の村で食料が大量に略奪されている。村人いわく、近くの洞窟に持っていかれた痕跡があるとのことだ」

「なら、風の部隊と獣専門の季衣と流琉にその洞窟を調査を任せるとして伝えてくれ」

「うむ、了解した」

そしてその後、一刀殿は私の方を向き

「愛紗。後で俺の部屋に来てくれ。確認したいことがあるからな」

「あ、は、はあ……………」

いきなり、呼ばれたので拍子抜けし、多少、間抜けな返事となってしまうた

「か、一刀様。危険です！そんな敵軍から来たば「はいはい」桂ちゃん。お兄さんの邪魔したら駄目ですよ」むぐぐ……！！」

そしてやはりというべきか、一刀殿を溺愛しまくっている桂花殿（真名は次の日の紹介にすぐに交換した）が反対したが、風どのがそれを阻止した

（相変わらずだな……………だが、もし桃香様がそのようにおっしゃったから私とて……………桃香様か……………）

ふとそう思うと、ずいぶん前のことのように感慨深く思ってしまった自分が怖くなった

（……………まだここに来て二月しかたっていないというのに）

そして日に日に私の不安は広がっていった

――城内、一刀の部屋――

その日の夜、私は一刀殿に呼ばれたので、訪れたのだが……

「あの、なんですかこれは？」

無骨な話し合いだけだと私は思い、いざ一刀殿の部屋に入った瞬間、毒気を抜く光景があった

「いや、別に何か適当につまみながらと思って月と詠に準備してもらったんだが……いらなかったか？」

そこには小皿に盛られた一品物が多数広がっており、中には酒らしき飲み物をちやほや見えた

「そ、そうではなくてはですね……いえ、やっぱりいいです」

「まあ、立ち話もなんだし、適当に座ってくれ」

「はい……それで話というのは？」

「一刀殿は自分で酒をついで飲んでおられ、本当にまじめな話か？と疑ってしまう光景だった」

「ああ、話ね……いや単純に最近、元気がないなと思ってな、ちょっと気になったからさ」

「見抜いておられましたか」

「まあ、これでも一国を束ねる主だからな。自分の元に就いてる将の変化ぐらいすぐに分かるさ」

だが、話が始まってみると中身は存外、真面目だった……ただ、相変わらず酒を飲み、態度には疑問が残ったが

「……私は怖いのです」

「怖いって何が？」

「桃香様を始め、他の臣下の皆も本当に私にとって大事な仲間だったはずなのですが……この北郷軍に降り、貴方達と触れ合うたびにこの軍も悪くないと思ってしまう自分が居るのです」

「……………」

「そしてそんなことを思った夜、夢を見たのです。私が貴方をご主人様と呼び、共に戦乱の世を生き抜く夢を……………」

それを言うことやはり予想していなかったようで一刀殿は驚いた表情

をしていた

「でも、たかが夢だろ？」

「最初は夢かと思いましたが、日が経つに連れ、普通の記憶のよう
にいるんな事を思い出すかのごとく鮮明に残っているのです」

「……………」

「……………私はそんな自分が恐ろしい、そしてどうして私はあの時、あ
まり悩まずにこの軍に降るとすぐに決めてしまったのか……………それは
本当に、もしくはこことは違う別の世界で……………」

「愛紗」

「なんで……………ひゃっ!? な、何をするんですか!?!?」

一刀殿に呼ばれ、そむけていた顔を向けなおすと同時に酒をぶつ掛
けられてしまった

「そのふざけた夢がお前の本当の気持ちか？」

「ノノノノノノノノ、私はふざけてるつもりなのだ」「ほらよ」「むぐ
ぐ……………!」

さらに一刀は怯んでる私に酒を飲ませ……………思考が……………

「ひっく……………わ、わたしはあまー」

そこで私の意識は闇に堕ちた

――

side: 詠

「全く馬鹿じゃないの！？相手の性質も見極めず一気飲みなんてさせて」

「それは本当に反省してる……」

こいつに夜、料理を用意してくれと頼まれ、月が最後に仕上げた物持っていったら、愛紗が完全に潰れ、オロオロしていたこいつに出くわし取り合えず、一発殴って今に至る

「へうゝもう、こんなしちゃ駄目ですよって言ったばかりなのに」

因みにこれが初めてではなく、先日の宴でも同様に潰した。その時の被害者は風と凧だけだね

「なんでまたやっちゃったんですか？」

「いや、愛紗があまりにも馬鹿な発言したんでそれで……」

「馬鹿な発言？それって何よ」

「……言えない」

「言えない……ね……まあいいわ。取り合えず、あんたは潰れた愛紗を部屋に戻してきなさい。掃除はやつとくから」

「ああ、すまん……」

そう言つて愛紗を抱え、部屋を出ていき、月は愛紗の着替えをさせるために着いていった

「記憶はあるけど、自覚なしか……はあ〜」

一つだけ一刀に嘘をついた。本当は愛紗の話は聞いていた

(ボクと同じ境遇だと思つたけど、どうやら思い違いみたいね……あの時の一刀みたいかな?)

でも、すぐにあり得ないと思つた。何故なら、あの時の一刀と今の自分が異常なだけだと

「今度こそつて約束したのに嘘つきね……あいつは」

皆が全てを忘れても、自分だけ全てを覚えていて、それが永劫に続く苦しみを理解できる人なんているだろうか

(もし、愛紗が本当に全てを思い出してボクと同じようになったら、きっとボク以上に苦しむと思う)

「だって、ボクが知る限り三回も一刀を殺してるものね……」

そういう意味では絶対に苦しむと思っから思い出して欲しくなかった

side: 愛紗

(なんだろう、声が聞こえる……そうか、いつもの夢か……)

最近はいつものことなので私はその夢に抵抗することなく、身をゆだねた

る私の凶刃を一刀殿は体で受けるしかなかった

『はあはあ……やはりムリだったか』

『ふふふ、あはははは』

(な、なんだ。この夢は……)

私は狂ったように笑うとそのまま、凶刃は一刀殿の首へと向かっていった

.....

不意に世界が暗転し、今度もさつきと同じ昔のようだが先ほどと違い、燃えてはいなかった

『もう、降伏してください。私は貴方を殺したくない』

『悪いな関羽。お前にはお前の信念があるように俺にも譲れない信念がある……降伏させたいなら俺の信念をぶっ壊してみろ!!』

その言葉を皮切りに一刀殿の刃が襲い掛かったが、その刃はやはり脆弱だった

『くっ、駄目です。もうすぐ私達の本隊が突入します……そうなれば『なめるなあああ!!』!?!?』

その私の言葉に侮辱されたと思った一刀殿の攻撃はひどく鋭いものだった……

シュツともものすごく、あっさりとした音の後、聞こえたのは体を切り裂かれ、倒れる一刀殿の音のみだった

『はは……やるしかなかったんだ……やるしか……』

私はその場に立ち尽くし、静かに涙を流していた

.....

そしてまた夢が途切れ、今度は山の中の風景が私の目に映り、ひざには傷ついた一刀殿が居た

『はあはあ、ごめんな愛紗。こんな頼りない主で……』

『な、何を言うのです！！そんなことはありません。ご主人様は私にとつて……うう』

その様子を見ていると段々と回りの状況が把握できてきた。もう目の前の一刀殿は助からない。毒をもらっている

『じほっ！？』

『ご、ご主人様。しっかりして下さい！！死んでは駄目です……貴方が死んだらどれだけの人が悲しむと思っているんですか！？』

『……愛紗……俺さ……お前に言いたいことがあったんだ……がはっ、はあはあ』

『もうしゃべらないでください……すぐに医者……』

苦しそうな息を一刀殿は吐きながらなおもしゃべろうとする

『初めて、会ったときにさ、愛紗は右も左も分からなかった俺を助けてくれたよな。多分その時から愛紗に惹かれてたと思うんだ』

『ご主人様……？』

『好きだ。愛紗のことが……はは、こんなに時、ようやく言えるなんてな……じほっじほっ』

そのまま、一刀殿は静かに目を閉じた

『本当に卑怯です……貴方という人は』

(どういう関係なんだ……私と一刀殿は……)

.....

そしてまた途切れ、別の光景が入っていった

『もう一度だけ聞く、劉備をどこに居る。白帝城には居ないようだが？』

『は、とつくに逃げたさ。もうお前らには手の届かない場所になる。目の前にちらついて見えづらいが、どうやら一刀殿は捕らえられ、その前には孫権が立っていた』

『ふざけるな!! さっさと劉備の居る場所に案内しろ!!』

『ぐ……なんでお前はそうまでして桃香にこだわる?』

縛られてる一刀殿の首をつかみあげる孫権

『こだわるだど?……こだわるわよ。劉備が姉さまを殺したから……』

…劉備軍の重臣であるお前が知らないとは言わせない』

『!?!?……初耳だな。そんな作り話』

『……ちっ……』

苛立ち紛れに一刀殿を吹き飛ばし、元の位置に戻った

『もういい、北郷一刀。お前に選択肢をやる。好きなほうを選ぶといい』

そう孫権が言った瞬間、不意に誰かに吹き飛ばされ、倒れこみ、ようやく私の置かれた状況に気がついた

『う……むうう……』

『あ、愛紗!!』

猿轡を噛まされ、両手両足を縛られていた

『討たれたんじゃないのか?』

『利用価値があるから生かしてただけよ……さあ、選びなさい北郷一刀。関羽を見捨て、劉備を生かすか。関羽を助け、劉備を差し出すか』

『!?!?……そ、そんなこと』

普通ならこんな敵に捕らえられた将を選ぶより、主の方を選ぶに決まっているはずだが、一刀殿は答ええない

『どころやら、情報は本当のようだな。関羽とお前が恋仲で一時、そのために劉備とも争った事も』

『く……』

『むうう……ぐうう……』

衝撃だった。この世界では私と一刀殿の関係が

(おかしな夢だ……そんなことある筈が)

だが、そう否定するも目の前の状況があまりにも現実的過ぎて目を背けることができなかった

『答えないなら、劉備を選ぶということか』ま、待て!!』……どうした?』

『ほ、本当に愛紗を助けてくれるのか?』

『ふふ、ええ劉備の居場所を教え、これ以上、乱世に介入しないならね』

『むっ、くうううー』

分かる。この別の私が言っていることが私には……でも、そんな気持ちを裏切るかのように

『……俺は』

その一刀殿の答えは絶望に等しいものだった

.....

「はっ！？こいつは……」

「わ、びっくりした」

「詠……か。どうしたんだ私は」

「一刀に酒を飲まされ、ぶっ倒れて今まで寝てたのよ。覚えていなかったの？」

「いや……そうか……」

（今回は長かった……それに……いや、止めておこう）

その先のことを知ってしまったら、今の自分を失くしてしまうよう
で止めることにした……それ以上は考えるのを

side: 凧

「ここか、賊が居るといっ洞窟は」

とりあえず、その洞窟に斥候を送り、様子を見ることにした

「見た感じ、そこまで大きな洞窟ではないようですね」

「これならこの前より時間はかからないね」

「でも、妙ですね。こんな場所にわざわざ本拠地を構えるのでしょうか？」

「報告には賊ではなく、猛獣かもしれないと報告があったからな」

依然として洞窟の周りの中は不気味すぎるほど静かで経験上、賊が居るならこんなに静かではなかった

(これなら猛獣の可能性が高いかもしれない……)

考えていた二つの可能性にどのように転ぼうが即座に対応できるように軍を構え始めた時、その静けさは消え去った

ぎゃああつあああつああああー……

「な、なに今の悲鳴は!？」

皆、突然の仲間の悲鳴で浮き足立っていた

「落ち着け! 一体、中で何があった?」

「はあぜえぜえ……た、大変です。楽進様!」

今まで、中の様子を確認していた斥候の一人が必死の形相で戻ってきて、息を途切れさせながらもその様子を皆に伝えようとしていた

「な、中に奴が…あぐ!？」

「気をつける。敵は人で飛び道具を持つてるぞ!！」

その言葉を皮切りに皆は構えて敵を待ったが、いつまでたってもその攻撃がくることがなかった

「お、おかしいですね。もう何かしらの攻撃があってもいいはずなのに」

「どうするの凧ちゃん？」

二人も一軍の将だが、やはり若く経験不足のせいか、突然のこの事態をどう対応すればいいのか分からないようだ

「いい、私が調べてくる」

まったくの事態の全容がつかめないこの状況を打開するため、自ら単身で洞窟に乗り込もうとしたとき、洞窟から出てくる影が私目掛けて突進してきた

「く、だぁー!」

とっさに防御し、その突進してきた者を吹き飛ばして、その姿を確認したときに全員が絶句した

「お前は……」

「……………」

「呂布、生きていたのか!？」

「ようやく……見つけた……北郷軍」

託された者の役目（前書き）

上手く表現しようと思いき直していたらもう一週間近く……
それでも表現できてるか心配ですが、どうぞ

託された者の役目

――陳留、城内――

Side：一刀

愛紗と話した（漬した）その次の日、俺は風に呼ばれてその当人の部屋に訪れていた

「珍しいな。お前が俺を呼ぶなんて」

「申し訳ないのです……もしかしてお楽しみのお邪魔でしたか？」

「違う……なあ俺ってそんなにケダモノに見えるのか？」

風は椅子に腰掛けていて、おそらく俺が来る前まで政務をやっていたのか机は散らかっていた

ちなみに俺が自分自身をケダモノと思うのは前の宴の時に酔いすぎた俺が少々……その翌日、秋蘭や詠にボロクソ言われたからである

「くふふ、まあ、いいではないですか。実際ケダモノでしたし」

「相変わらず意地悪だな……もしかして俺に相手されなく寂しかったのか？」

いつもどおり冗談を言う風に俺も同じように冗談を言い頭を撫で回し、そのまま風のベットに腰をかけた

「うっうそれもちよつとありますけど、今日は別件なのです」

髪の乱れを直しし、俺の隣に座った後、珍しく真剣な顔になると一冊の本をどこからか取り出した

「それは？」

「一昨日、城の書庫を整理してたら出てきました」

俺はその本に見覚えがあつた……が、あえて知らない振りをした

(可能性は低いだろつが、もし、風が本当の意味を読み取れてないなら隠した方がいいからな)

「それで、それ読んだのか？」

「……読みましたけど、読んでも意味分かんないですよ。だから単にただの落書きと思いました……けど」

「けど？」

風は首をかしげながら本をペラペラとめくり、最後あたりのページを開くと

「文字の癖とかから気になっちゃいますよ。最後まで見てましたら、気がついたんですよ。これ華琳ちゃんがお兄さんに向けた本と」

「そつか、やっぱり気がついてたか」

風は「これが証拠ですよ」といいながらページをめくり返して、文

字を抽出した文章を俺に見せた

「……お前、もしかしてさっきまでこれ書いてたのか？」

「何分、このままでは読みにくかったですし」

風の書いたそれを俺は受け取ると、華琳が俺にしかわからないように暗号化したものだというのに

（さすが風だな。よく一字一句、間違えずに訳したものだな）

「まあ、気づきはしたんですけど、全部解読して読み取るのに、かなりかかったちゃいました」華琳ちゃん、頭いいですから」

「いや、元の解読方法を知らなかった風がたったの一日で全部の文章を解読するのはすごいぞ」

そうやって今度は愛でるように頭をなで、膝の上に乗せると風は気持ちよさそうに目を細めた

「んん〜……でもお兄さん？」

「なんだ。いやだったか？」

「いえいえ気持ちいいですけど、風は思うのです。どうしてもお兄さんにとって大切な華琳ちゃんの本をあんな分かりづらい場所に置いていたんですか？」

さっきまで聡明だった風の表情がその話だけではどうしても分からなといったキョトンとした顔で俺を見つめていた

「……………」

「お兄さん、黙ってちゃわかんないですよ？」

俺が黙ったままだったので心配そうに聞きなおした……………だから、はぐらかすのを止めた

（風も華琳や慧蓮を知る大事な仲間だからな……………）

「俺さ、その本見たの華琳が亡くなってすぐなんだよな……………」

Side: 凧

「はぁーーーーー!!」

「ーーーーじゃま……」

呂布との攻防が始まって、だいぶ経っていたが前と違って無様に負けてはいなく、ある程度拮抗していた

「……なんで死なない？」

「はぁはぁ、それは自分に聞いたらどうだ？」

この短期間であの呂布と拮抗しているのには理由があった
なぜなら今の呂布には前のような覇気はなく、自らの得物も持っておらず、加えてその姿は少し？せており弱っていた

「……こんな、ことで……」

「ぐっ……」

だが、弱ってる上に素手で戦っているにもかかわらず、普通に重い一撃を繰り出せる呂布はやはり凄まじい

(だが、前よりは格段に遅く軽い。これなら)

「まだまだ。今度こそくらえ!!」

「!?!?……う……」

私は呂布の突きをくらいながら、お返しとばかりに顎に殴り返した

「っ……いつも……邪魔ばかりする……」

「対して効いてないのか？」

さっきの顎への攻撃は確かに当たり、常人には辛いはずだが、呂布本人はさほど効いてないようだった

「いいかげんに……死ね!!」

「だったらやってみろー！ー！ー！ー!!」

呂布の突進にあわせるように私も飛び出し、氣を纏った拳を突き出した

Side：一刀

「…………お兄さん」

風は俺の話真剣に聞き、そしてそもそも俺の膝から退くと俺の後ろに回り

「それを責任に思うことはないと思うのですよ……………」

そのまま、包み込むように抱きしめられた

「風……………」

「前にも言っただはずですが、お兄さんはお兄さんです。無理してそれは誤解だよ……………え？」

「俺はどちらかという迷ってたんだ」

「迷っていたとは？」

風は体勢を変えず、俺もその状態まま、話を続けた

「二人がここに帰ってくる少し前にな、詠に言われたんだ”このまま曹操の約束を守ること俺が死ぬ”ってな」

「お兄さんが…………死ぬ？そんな不確定で根拠のないことをあの詠ち

やんがですか？」

風が不思議に思うことは無理もなかった。詠は限りなく現実主義だ。その詠が未来なんて不確定なものを信じるはずがないとそう風は思っていた

「ああ、そのことに関してはなぜか頑固になるくせに理由を聞くとはぐらかされるんだよな」

「……でもそんなの気にしなけばいいじゃないですか」

「そういうわけにもいかないんだよな……」

(あの詠の涙を見たらとても……)

だが、それを風には言わずに心の中にしまっておいた

「でもさ、その後、お前らに言われて考えさせられた。このままでもいいはずがないってな」

どんなときでも俺を見捨てくれなかった風はいつものように黙って聞いてくれていた

「それでこの前、その本を読み直して気がついたんだ」

「……」

「華琳が俺に伝えようとしたのは自分の背中を追え、じゃなくてもっと根本的なモノだってな？」

俺が振り返り、風の顔を見て笑うと、風はやっぱり困惑した顔をしていた

「根本的なモノとは何なのですか？」

「あいつは俺にあの本、一冊なんか書ききれないほどの沢山のものを俺に託すためにきっかけとしてあれを書き残してくれたと気がついたんだよ」

「華琳ちゃんがお兄さんに残したものですか……」

「ああ、それであいつが俺に本当にやってほしいこともわかったからな」

置いてあった本を手にとってペラペラとめくりながら、前とは違う確かな意思を持って

「それが……」

Side: 凧

そのまま、私と呂布の拳が重なり合いそうになったとき、不意に誰かの剣戟が私達の間に見れた

「! ? 誰」

「……霞さんに華雄さん」

間に割って入ったのは霞さんと華雄さんだった

二人はお互いに背中合わせで私達の拳を止めていた

「凧! 何を一人で無茶しとんねん。前にどんな目にあつたのか忘れたんか! ?」

「久しぶりだな呂布よ。ずいぶんとお前は? せたようだが」

「霞、華雄……なんで邪魔した?」

戦いを中断された呂布は同僚であるはずの二人に敵に向ける覇気を二人にぶつけ、反射的に私達は距離をとったが、やがて霞さんが困った顔をした

「なんやその力のない覇気は？それによつみたらぼろぼろやないか」

「というかどうしてお前はこんなところに居るんだ？」

「……………」

二人は思い思いの言葉を呂布に質問していたがどれも反応を示さなかつた

「凧さん。大丈夫ですか？」

「流琉か。ああ、大丈夫だが季衣はどうした？」

呂布という予想外の敵が現れたために二人に援軍を呼んできてもらっていた

「季衣なら一刀様達を呼んできてもらってます。ただ、たまたま市街で警邏をしていた二人が話を聞くなり飛んで言ったので……………」

「……………な、なるほど」

ずっと仲間である呂布を探していた霞さん達にだからその光景は容易に想像できた

「大体、ねねはどうしたんや？」

「！！？……………」

いままで無言を貫いていた呂布だが、その問いだけには反応を示した

「……………ね……………」

「なんていったんだ。よく聞こえんぞ？」

華雄さんの催促の言葉を受けた呂布はとてつもなく冷たく鋭い眼光で叫んだ

「ねねは死んだ！！お前らが余計なことをしたせいで……………！！！」

涙を流しながら、叫びながら私目掛けてさっきとはまるで違う速さで向かってきた

「ウアアアアア……………！！！」

「ちいつ、華雄！」

「おう！」

まるで暴れる猛獣のように叫び、猛攻している呂布。その叫び声ももはや獣そのものだった

「があああああ……………」

「な、なにをそんなにこの軍をお前は憎んでいるんだ？」

「ううう、ねねが死んだのもこいつらが来たせいだ！！こいつらが余計なことをしなければねねはあんなことに……………」

~~~~~ 呂布の回想 ~~~~~

Side：呂布

ねねをかばって落ちたあの日からずっと時間が経ったけど、ねねの怪我はぜんぜん治っていなかった

「はあはあ………」

「まだ苦しいの……ねね？」

昼間は大丈夫なのに、夜になるとねねは苦しそうに息をしていた  
可愛そう……でも恋は何もしてあげれない

「はあはあ……うう……すうすう………」

「……ねね」

しばらくするといるんな人たちから教えてもらった薬草が効いて、  
寝るけどぜんぜんよくならない  
ずっとこんな辛い日が続いていた

.....

けどしばらくしたらねねの状態がもっと酷くなって

「.....うう.....」ほっほっほっ!」

「ねね!??」

たまに血を吐いて苦しんでいた.....でも恋はねねを看病してやる!!  
としかできなかった

.....

「ねね、」飯できたから食べて」

でもねねはちいさく首を横に振って

「恋どの……ごめんなさいなのです……今は」

だんだんとねねはご飯を食べなくなってきた……たまに食べれてもすぐに吐き出す

「……」

恋には護る力は持ってもねねを助ける力なんて何一つ持っていないな  
かった

~~~~~

Side: 凧

「苦しかった。恋にはみんなを護る力がある月は教えてくれた……」

「……」

その場に居る全員はただ、涙を流しながら訴える呂布の話の聞くことしかできなかった

「でもねねも助けることができなかった！みんな死んだ……恋をずつと信じてくれた月も北郷に殺された……」

「な、ちょいまちや恋！それは違うで月は……」

即座に霞さんが月が死んだという呂布の言葉に反応し、否定しようとしたが

「それに月が殺されたのに平然としているお前らも憎い！！」

「く……上等やぁー……！！」

霞さんの言葉を遮ってなおも訴える呂布の姿に沸点が低い霞さんがブチ切れた

まず飛び掛ってきた呂布を霞さんが片手で呂布の服をつかんで地面にたたき倒そうと仕掛けた

「……」

「な！？っ……」

だが、即座に霞さんの腕をつかみ、空中で体勢を整えながら逆に霞さんを吹き飛ばし、さらに追撃を仕掛け始めていた

「ちっ……」

吹き飛ばされた霞さんは両手を地につけ、それを軸に外傷なく体勢を立て直し、そのまま足払いで反撃

そして普段なら避けられただろうが弱っている呂布は倒れ、霞さんと

華雄さんによって両手をつかまれ、捕らえる事ができた

「離せえー！ー！！」

「大人しくしてろ！！」

「恋はこんなところで止まれない……ねねの敵をとるまでは」

呂布のその憎しみは本当にその友を大切にしていたと涙を見ればわかる……それはかつての私と通ずるものがあった

「恋、本当にねねはお前にそんなことをしてくれって頼んだのか」

「……ねねは恋に幸せになってくれと言われた……けど……」

それまで言つと呂布は力なく頂垂れ、一見見ると諦めたように見えただが

「もう……恋には何も残っていない……だからどうなってもいい！！」

叫び、霞さんと華雄さんを振り払い、弾き飛ばすと先ほどと同じように私に向かってきた

「さっきから聞いてるとお前は無責任だな呂布！！」

「しるわい」

再び、私と呂布がぶつかったが先ほどと違って呂布の力は上がっていた

(くっ……なんて力だ。さっきまでの比じゃない)

ただ、相手が素手なのが幸いし、上手く立ち回り、いったん距離をとることにした

「凧、すまん話してもうた」

「わ、私も手伝います」

呂布の様子の変化に反応した三人は私をかばうように集まったが

「申し訳ないですが、ここは私一人でやらせてください」

「ま、待て、お前は何を言ってるんだ?」

「無茶ですよ。凧さん!」

「流琉の言うとおりや。死に行くようなもんやで!」

当然、三人からはなぜという疑問の声飛び交った

「無茶なのは分かっていますが、私は今の呂布を許せることができないんです」

「許せないことやと?」

「ええ、少しだけ時間を下さい」

私はそれだけ言うと、目を閉じ、そして意識を開放したと同時にあ

の時の一刀様の言葉を思い返していた

~~~~~ 凧の回想 ~~~~~

『はあはあ………』

『凧、ちょっと来てくれるか?』

『あ、は、はい!』

その日はいつもの様に一刀様と朝の鍛錬をしていたが、まだ終わる前に呼びかけられた

『な、なんででしょうか?』

私はどこか悪いところがあったのかと思っていたが

『だいぶ、凧も体が仕上がってきたから、あの技を教えようと思っ  
てな』

『あの技?』

『ああ、凧にはこの技を扱う資格があるよ』

そういうと一刀様は目を閉じ、その瞬間、一刀様の纏う覇気がまったく異質な物となった

『これが今からお前に教える秘技”覇滅向”だ』

とてつもない波動を放っており、自然と足が震えていた

『す、すごい』

『氣を操るお前なら分かると思うが、この技は発動させただけでとてつもない力を得ることができると同時に危険もある』

一刀様は発動を止めると、これが一番、重要といって

『危険………どういうことですか？』

『簡単な話だよ。無理な力に犠牲が付き物だ』

『それは死ぬって事ですか？』

『ああ、使い続けるとな』

途端に私は怖くなった。さっきまでは少し浮かれていたが”死ぬ”という言葉にあの時の事を連想させた

『怖い凧？』



「……」

練習では使ったが実践では初めて開放した……そして直後に今まで無言で立っていた呂布がこちらに向かってきたが

(遅く見える……これなら)

「はっ!!」

「!?!?あぐつー」

普通に動いただけでこの速さと力の強さに霞さん達や呂布、そしてなにより私自身が一番、驚いていた

(なんて力だ。こんなにあっさりと……)

だが、さすがに呂布と言ったところで私の拳を受けて、吹き飛ばされながらもすぐに体勢を立て直していたが、警戒されていた

「……く、どうしてお前は恋の邪魔をする?」

「それはお前が亡くなった親友の想いを無駄にしているからだ!」

返答同時に今度は私から呂布に向かっていき、突きを数発叩き込んだが、簡単に避けられてしまった

「お前、強くなってる……もう油断しない」

密着している状態から呂布は拳というよりもはや、飢えた獣のよ

うに爪を立てて、切り裂いてきた

「ちっ」

そのまま、攻撃を仕掛けてもよかったが本能的に危険と感じ、距離を置くことにした瞬間

「!!!??」

「呂布、お前が自暴自棄になる気持ちは共感できるが、お前の話が本当ならなぜ友の願いを叶えてやらない？」

「……もう恋は幸せにはなれない……ねねが友達が居ない世界なんて……」

呂布のその言葉で私はもう諦めた……実力行使をするしかない

「だったら、お前を倒してお前を信じ、お前に託したその友の言葉の本当の意味を教えてやる！」

そして言葉の終了と同時に二人して三度、同時に攻撃を仕掛けた

「恋はもう好きにする……だから北郷軍は殺す!!」

「復讐は誰にもさせない。それがたとえ敵でも友の想いを受け取り、無駄にするような奴には負けない!!」

ドゥン……!!……

「うあ!??」

お互いに仕掛けた突きは呂布の拳は空を切り、私の拳だけが一方的に呂布の顔面を殴り飛ばした

「ぶ、どうして……」

吹き飛ばされた呂布は不思議そうに私を睨み返していた

「お前は友の言葉を無駄にしている……本当にお前の幸せを思って逝った友の言葉ならちゃんと受け止めてやる事……」

「それが託された者の役目だ」



## 憎悪の闇（前書き）

今回は短いですが、ちょうど区切りがよかったのでこうなりました

注）残酷描写あり……今更ですが



## 憎悪の闇

――城内――

Side：一刀

「託された者の役目ですか……」

風は俺のその言葉にえらく感心したようで満足そうな顔した

「ご機嫌だな風？」

「はい、それはもう……お兄さん中に華琳ちゃんを感じ取れましたので」

くふふと笑うと風はベットから降りて机の上からもう一枚の紙を取り出した

「そついえばお兄さん？」

「どうした風？」

「その本の仕掛けを解いたらこんな紙がありましたよ？」

「はあ、仕掛け？」

その仕掛けのことは俺は知らなかった

「え、知らなかったんですか？」

「……恥ずかしながら、というかそんな仕掛けどこにあったんだ？」  
風はやれやれと言いそんな顔を見ると本を俺から取り上げ、本を止めている紐を丁寧に解いていき、完全に紐が解かれると本の表紙に隙間ができていた

「どうやってたらこんな仕掛け分かるんだ？」

「本にあまり触れないお兄さんは分からないでしょうけど、本来そんな簡単に解ける紐の結び方をしている本なんて存在しないのですよ」

たとえばこれですと風が別の本の紐を解こうとするが華琳の本とは違い、びくともしなかった

「なるほど……でその紙をちょっと貸してくれないか？」

「はい」

風から紙を手渡され、相変わらず達筆な文章を読んでいくうちにその内容には信じられないことが書いてあった

「お兄さん？なにが書いてあったんですか？」

俺の様子が明らかに変化したのを感じた風が聞いてきた

「風、悪いがこのことは他言無用で頼む。確認しなくちゃいけないことができた」

そこまで言つと俺は秋蘭に話をつけるために部屋を出て行くつもりだが

「一刀様。大変だよ！」

「！？季衣、なにが大変なんだ？」

季衣が突然、俺の部屋に突入し、とにかく大変と叫んでいた

「呂布がいたの！！」

「なっ呂布だつて！？」

—————

Side: 風

「うぐ……はあはあ……」

「もう止めにしないか……呂布」

あれから幾度となく私と呂布はぶつかりそのたびに私が弾き飛ばしていたがお互いにそろそろ限界だった

（っ……体中が悲鳴を上げている……これがこの力の代償か）

「まだ、恋は戦える……キライな者は居なくなればいい」

ゴォツという呂布の衰えを見せない速さと力の重さの攻撃は鈍り始めた私には効果的だった

「……ククク」

「ぐあっ……くそっ猛虎襲撃—————」

一、二発目は避けれたが三発目でモロに腹部に突きを食らってしまったが負けじと私も反撃し、呂布を大きく吹っ飛ばした……が

「……………フ」

明らかに決まっていたはずなのだが、空中で体勢を整えた呂布は無言で口元を歪めながらただ私を見つめていた

「っ……」

その姿を見たおもわずたじろいでしまい、それが致命的な隙となった

「……隙」

もちろんその隙を呂布が見逃すはずもなく、だんだん強くなっていく呂布が迫ってきた

ガッ……

「恋、もうこれ以上は無駄や月がまっところとところに帰ろつや」

「月が待っている場所……」

霞さんが割って入ってきて呂布を止めていてくれた

「その場所は霞……」

「なんや？」

「地獄？」

その言葉を呂布が言った瞬間、とてつもなく巨大な覇気が呂布を包み、反射的に霞さんはその場を離れた

「……もう恋はいらぬ、死ねと言つこと……霞？」

呂布の言葉は聞き取りづらくなっていたが、霞さんにはしっかり聞こえていたようだ

「な、ち、違うで……月は今、一刀の……」「言い訳なんていらない  
!」「うぐ……」

「霞!?!なにをしているお前は!?!」

「月と恋とねねを裏切った霞なんか殺してやる……」

そついうと霞さん首を掴んでいる右手に力を込め始めた

「……ぐががが……れ、れん……が……」

「やめるー……」

同僚を苦しめている呂布に華雄さんが咆哮とともに得物を振りかざし突進していったが

呂布はそれをなんとも思わず、力を込めた右腕を使わずに脚だけで華雄さんをあしらった

「く……いくぞ流琉!!」

「はい!」

もちろん、私達も傍観せずに入替わるようにして同時に攻撃を仕掛け、さすがにこの攻撃は読めなかったのか霞さんを解放し、呂布は距離をとった

「邪魔……」

再び、呂布と対峙して一つ気がついたことがある。あの眼は先ほどの呂布と違い、本物の猛獣の眼をしていた

「呎、気づいてると思うが今の恋はもとの強さにもどつとる」

「ええ、ですから私がさらに開放して突っ込みますか援護をお願いします」

そついうと痛む身体に鞭を入れながら再び開放し、突進した

まずは先制攻撃を仕掛けようとして勢いを押せた突きを繰り出したが気がつくとも呂布は目の前には居なかった

「ぐ……」

「なにぃ……」

「キヤッ……」

動きを止めた瞬間、背後からの声で後ろを振り向くといつの間にか呂布がおり、霞さん、華雄さん、流琉はうずくまっていた

「遅い……」

なにかをつぶやいたかと思うと、次の瞬間には呂布は目の前に迫っており、防御をする暇もなく一撃、二撃と顔にもらい

自分の身体が空を舞ったかと感じたときにはもう十発以上の突きや蹴りを食らっており、最後に一刀両断するように踵落しを打ち込まれ、

三人が倒れている場所へと吹き飛ばされた

「……………」

「う、ごほつごほつ……みんな……」

開放してなかった最低でも気を失っていたらとうとうという傷も技のおかげで私は大事にはなつてなかったが  
他の三人は違い、もう虫の息だった

「……………」

ザッザッとゆっくりと近づいてくる呂布

(くそっ……とにかく三人を護らないと……)

相変わらず身体は痛むがそれでも私は再度、呂布に向かっていった  
があまりにも実力が違いすぎて  
あっけなく返り討ちにされてしまった

「うぐあっ!?!……………うう……………」

(くそつくそっ……こんなんじゃ駄目だ……あの時と一緒だ……)

誰かを護ろうとしてもいつも無力な自分が居る。結局、親友は助けられず、いつも一刀様に護ってもらう……  
そんな自分が嫌だから必死に修行して、認めてもらい秘技まで授かったのにたった一人の敵も倒すことができない

「そんなのは嫌だ……もう二度と……」

仲間を失いたくない……力が欲しい……ホシイ……誰でも護れる……



イヤ……

……ニクイモノヲコロセルチカラガホシイ……

「ぐががががが！！」

そう思うといままでこれ以上の開放が怖くなくなった……たしかに激しい痛みが伴うがもうどうでもよかった  
だからためらいなどいらぬ……私は全てを開放した

「ががががが……あああああああー……」

「!?!」

もうあまり意識がはっきりしないが呂布が驚いている表情だけは確認できた

「フウーツフウーツ……」

「……なに」

限界まで開放した力を試したくなり、軽く動き、軽く攻撃しただけだったがそれでも呂布が驚くには十分の威力だったようだ

「変わった……」

呂布はようやく私を敵と認識したのか見たこともない速さで攻撃を仕掛けてきたが今の私には遅すぎた

「……………」

本当によく意識もはっきりせず、視界も暗くなっているが身体が呂布の攻撃に勝手に反応してくれる

「あぐ……………」

開放した甲斐があった。呂布の突きを掴むとそのままわたしはもう片方の腕を呂布の腕目掛けて振り下ろした  
ゴキツといういい音が響き、呂布の右腕の肘から手までは逆方向に曲がっていた

(……………これなら簡単に殺せそうだ)

なぜか意識が深い闇の中に沈んで逝く……………でも不思議と不快ではなかった……………むしろ最高の気分だった。自分が武の高みにいるようでそんな意識が途切れていく中、呂布の首を掴み、私が最後に言った言葉は

「……………お前を……………クロス」



## 開放した感情（前書き）

……更新を大幅に遅らせて、本当に申し訳ありませんでした

## 開放した感情

Side: 凧

「……意外とあっけなかつたな」

私は自分の足元に置かれているさっきまでもがいていた肉塊に目を向けた。まだ温もりが残っている……

「……………」

自分の手には獣の血がべっとりついていて、それがなんともむなしかった

(別にここまでする必要はなかつたかもしれない……でも)

本当に自分が自分でない感覚というのはこういうものなのだろうかというそんな疑問すら今の私にわ関係ない

(ああ、すごく……今が心地いい)

そうなんとも言えない優越感に任せ、肉塊を蹴り飛ばしたのにいつまでたつても落下音がしなかつたから顔を上げて目をやると誰かが抱えていた

「凧……お前……」

「……………ああ、一刀様ですか」

私が蹴飛ばした呂布を抱えていたのは我が主の姿に驚くわけでもなく、ただ静かに返事を返した

「……………お前がこいつをこんなにしたのか」

「ええ、そうですよ」

「……………あの力を使つてか」

さすが私の師、すぐにこの力に気づいた

「……………はい」

「生半可な開放じゃこいつとは渡り合えない……………どこまで開放した!?」

「……………」

声を荒げて私に問いかける

(どこまで……………そんなものは決まっている)

「フフ……………」

「な、風?」

「決まってるじゃないですか……………私自身の心ですよ」

「!?!?.....お前」

「生真面目で変な正義感に囚われ、今まで隠してきた理想の私自身を解放したんですよ!?!」

「な.....く.....」

見て分かった目の前、恩人の顔が見る見る優れないことが、後悔、憤怒、喪失.....そんな感情が見て取れる

(ああ、なんだろうこのすごい気分は.....今まで強大だった者が途端に小動物のように見えてきた)

それは目の前の主も例外ではなかった

「一刀様.....」

「.....なんだ?」

この力をもっと試してみたいと思った私は一つ提案をかけてみた

「私と戦いませんか?」

「なんでだよ?.....」

「決まっているでしょう?」

ずっと思っていた。いくら地道な努力をしようが、一刀様や春蘭様のように私はなれないとでもその醜い感情は決して表には出さなかった

「私よりも強い強者がいるこの世界そのものが……」

それでも所詮、この世界は才能を持つ者がこの世界で自分の思い通りにすることができるとして唯一の方法……でも私にはそれほどの才がなかった

（だから護れなかった……二人を……例え、私に武神のような才能がなくてもあの二人だけは護りたかった……）

「憎いからですよ!!」

もう止めれない。止める必要もない……自分の力を止めてくれる者が現れるまで!!



-----

Side：一刀

「決まっているでしょう？私よりも強い強者がいるこの世界そのものが……憎いからですよ！！！」

「止める風！？」

哀しかった……まさかあの風がそんな心の闇を抱えていたなんて俺はずっと気づいていなかった

「はあっ！！！」

「う、くそ……」

なんとか反撃しても風をとめないといけないがかすかに息がある田布の安全が先だった

(この傷わずかに急所に逸れている……呂布がさすがなのか。それとも風が無意識に手加減をしてのかはわからないけど)

「ちっ……フッ！」

俺が必死で風との距離をとり、それによってなかなか当たらないことに苛立ちを覚えた風が得意の氣弾を撃ってきたが……

「ま、まずい」

普段とは倍以上の氣弾が迫り、仕方なく風同様に足だけにほんの少し開放してなんとか飛んでかわした

「いきなり、攻撃とは……俺は了承してないのにな」

「ふふ、ここは戦場ですよ。そんな言葉、意味ないですよ」

さらに氣弾を打ち放ち、それも避けたが、今度は間髪いれずに氣弾が襲い掛かってきた

「ちっ、くそ、」

「一刀様。そんなモノは早く捨てて、私と本気で死合して下さいませんか？」

「……断る」

「そうですか。なら二人ともども、死んでください」

そういつて氣弾がまた飛んできたが、さっきと違い、より鋭く細く、

早さも上がっていて、さながら氣弾の雨のようだった

(しゃれにらん威力と速さだ……このままじゃ次避けるのは無理っぽいな……って!?)

その氣弾砂埃を立てながら俺のすぐ目の前に迫っていた

(もうやりたくはないが……こいつを守るにはやるしかない)

覚悟と開放の準備をして、俺は隙だらけなるのを承知で着地した瞬間、足の力を抜き、氣弾は上を取り抜けて、そして開放した

S i d e : 詠

「……うかつだったわ。まさかこんなに早く」

「ん、なんか言ったか詠？」

「なんでもないわよ。この馬鹿!!」

「な、誰が馬鹿だ。え「うっさいわ!! 傷に響く!! おとなしゅうしとれこの馬鹿!!」なんだと……!!」

袁昭の領土が一気の増えたことでもともと忙しかった政務がさらに忙しくなり、しばらく自分の部屋に閉じこもっていたのが駄目だった

(時間の感覚が麻痺していたわ……)

季衣からの報告を受けた後、自分も付いていくと聞かなかつた月を(長い時間を掛けて)なだめ、暇すぎて山へ修行をしていた春蘭を(とても長い時間を掛けて)呼び戻し、それを聞いた春蘭<sup>はが</sup>は準備がまだ終わっていない私を無理やり連れて行き、今に至る因みにちゃんと跡から季衣が兵たちを連れてきてくれた

「それより早う行かんと風や一刀が死んでしまつで……」

「分かつてる。早く行くわよ!!」

「おう!!」

「うん!!」

(こんな所で二度もあいつを死なせるわけに行かない)

ボクの頭の中を駆け巡る忌まわしき記憶が苦しめる。気がついたら残り続ける記憶

(これが本当にボクが体験した記憶なのか、それとも夢なのかは知れないけど、多分、本当の記憶だと信じてる。どうして信じるかはボクの心に残る最初にアイツがボクの全てを救ってくれたあの暖かさが今でも鮮明に残っているから、だからこそ今度は私がアイツを救ってやると誓った……でも、ボクはアイツが何度も死に触れてるのを知ってるのに救ってやれなかった。それがとても悔しくて忘れないのに、忘れることのできない記憶。これ自体、ボクを蝕む毒であり、アイツを救うことができる希望でもあるから、途中で放棄したあいつみたいにボクはならない)

「ふぎやつ!?!?」

「おっと、お迎えご苦労だな。詠。それに春蘭も季衣もお疲れだな?」

「か、一刀。いきなり後ろに立つなんて、あつ、その二人は凧と恋なの?」

「ああ、凧は軽傷で気絶してるだけだけど呂布がかなり重症なんだな。連れて行く」

そういつて二人を抱えたまま、霞たちが治療を受けている拠点へと向かっていった

「そういえば季衣、なんで一刀は呂布をつれ来てたのだ？」

「はあくやっぱり聞いてなかったんですね。春蘭様は」

「な、なにを？」

いつものように二人の請け合いをやってるうちにアイツが戻ってきてきて、私は話しかけてみた

「一刀が恋が止めてくれたんでしょ？」

「……いや、違う」

「え？」

「俺が来たときにはすでに二人とも倒れていた。俺はその二人を運んできただけだよ」

「本当？」

「……ああ」

それだけの会話でわかってしまった

（あいつ、またボクに隠し事したわね。割と重要なことを）

幾多の経験によってあいつに関してはボクに隠し事はできない。でも今、怪我人が優先なのでそのことは心にしまっておいた

――――少し前――――

Side：一刀

『これなら当たっただろう……ふう……！？』

『最後まで油断するなと教えただろ？ 凧』

正直、危なかった。あのまま着地していたら直撃していたし、もし、  
風が油断せずに容赦なく俺に追撃をしていたら殺されていた  
結果、呂布をある程度、離れさせたところに寝かせてきた

(これで遠慮しなくてすみそうだ)

『本当に私を退屈させてくれない人ですね……一刀様は!!』

『もう加減なんてしない、一人の武人としてお前の相手をしてやる』

踏み込みと同時に前の呂布以上の開放し……そして……

勝負は一瞬でついた





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5505o/>

---

真・恋姫†無双 ~ 霸王の意志を継ぎし者 ~

2011年11月1日02時50分発行